
ポケットモンスター マリン

港龍香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター マリン

【Nコード】

N0770Z

【作者名】

港龍香

【あらすじ】

ポケモンがいる世界でこんなことが起こっていた。カントー地方における人々の支配。ジョウト地方におけるロケット団の復活事件。ホウエン地方における古代伝説のポケモンの復活。シンオウ地方における時と空間の支配。イッシュ地方における人々がポケモンを手放す現象。さまざまな地域で、起こっている中、小さなところでも大きな戦いがあったそれは 世界がなくなるかの出来事。センゴク地方それが今回注目した舞台

出発してみよう！（前書き）

これは ポケットモンスター ゲーム アニメ スペシャルの内容
を引っ張っていますが それらのキャラクターは出てきません ご
了承ください

出発してみよう！

鮮国地方 アリスカタウン

あ「ふぁ〜」

彼の名前は あゆむ 今日アリスカタウンから旅立つ男の子だ

「ごろろー」

一緒にいるのはミズゴロウ彼のパートナーだ

あ「おはようミズゴロウ 今日はいよいよ出発だ ちひろには負けてられないからね」

ちなみに下に妹がいる

ち「ばか兄ー！ おきてるかー！！」

ってやってきたか 彼女の名前はちひろ
才色兼備完璧超人の女の子

「るぴー」「わたたー」

一緒にいるのはスコルピとワタッコだ

あ「うん 起きてるよ ちひろ」

ち「めずらしっ！ 起きてるなんて！」

あ「あははー 今日ぐらいは起きてないとね」

「ちよっと二人ともー時間よー」

二人「はーい」

「研究所」

「なみか 二人は？」

な「そろそろじゃないかな たぶん・・・」

彼女の名前はなみか 博士の子供

ポケモンとしての知識はすごい・・・が
バカである

「ネー」

彼女のパートナーはネイティ どうやら

な「来たみたいだよ」

ばたん！

あ「遅れてすみません 博士！」

ち「私は悪くないからねー」

「そろったみたいだね なみか あゆむ君たちには

ポケモン図鑑をたくす！」

あ「はい！ これで旅に出られるんですね！」

「その通りだ このポケモン図鑑を完成するのはとても大変だ

いろんな人と戦い交換そして野生のポケモンを捕まえる

がんばってくれ！」

ち「がんばってねー♪」

な「ちーちゃんはやらないの？」

ち「私はもう もらったもん ほぼぜーんぶ捕まえたもんね！」

あ「あいかわらず すごいなー」

な「そうだ あゆむ ポケモンの捕まえ方知らないでしょ 教えて

あげる！」

あ「あ・・・うん なみか」

と二人は研究所をあとにする

そのあと

「さてチャンピオンのところまでいけるかね？」

ち「博士」あの二人が私みたいにジムまでいくと思ってるの？」

「なみかは行かないとおもうが あゆむ君は挑むね だって知って

るんだろう？今のチャンピオンを」

ち「確かにそうだ 負けられない気持ちはあるだろうね だって現

チャンピオンはこの私なんだもの」

ここでチャンピオン発覚 なみかは知らないですよ

「そういえば まだ捕まらないのか この地方にいる二体のポケモ

ン」

ち「この地方は他のと違ってここでしか住んでいないポケモンはほ
ぼいない・・・二体しかいないこの地方だけのポケモン・・・一匹

見つけたけど

もう一匹がね・・・」

「さすがに 難しいか 伝説のポケモンは」

ち「そうだね 名前だけ解ってるのになかなか会えない まあ気楽にさがすよ」

とちひろは研究所を去る

アルセウスとかミュウツーとかセレビィとか もう捕まえているみたいですよ

（才色兼備の完璧超人でも見つけれないポケモンか・・・）

と博士は思っていました

～一番道路～

な「野生はねー弱らせてから捕まえるのが基本！でもでも状態異常にするともっと捕まえやすい！解った？」

あ「うん 解ったよなみか」

なんか棒読みですね 聞き流してませんか？

な「そう？ならこの先にある ミレッドタウンまで来てみて いいこと教えてあげる」

あ「うん 解ったよ」

となみかは先にミレッドタウンにいった

そのあとからちひろが来た

ち「お兄ちゃん こんなところにいたんだ」

あ「うん さっきまで なみかに捕まえること教えてもらってたから」

ち「そんなことぐらい知ってるのに 物心ついたときはいつもばかりのこと

心配してたよね」

あ「そうだね あの時きも・・・」

ち「・・・」

あら？なにかつらい過去でもあるのかな？

ち「そういえば お兄ちゃん このさきミレッドタウンにジムリー

ダーいるの知ってる？」

あ「知ってるよ もうすこし鍛えてから挑もうかと考えてる」
ち「そう・・・がんばって」

とちひろは去る

あ「ミズゴロウ」

「ころろー」

あ「行くか ミレッドタウンに」

とあゆむは走る 次の町 ミレッドタウンへ

次回予告『ミレッドタウンについた あゆむ！入ってすぐに現れた
少年に勝負を挑まれる！ 手持ちはなんとナエトル！相性抜群の相
手に

悪戦苦闘するあゆむ！ そしてジムリーダーとは誰なのか！
次回「勝負してみよう」お楽しみに！』

勝負してみよう

一番道路

あ「ふう〜・・・」

「ごろろ？」

あ「ちよつとね・・・疲れたなーって思ってたさ」

「ごろろ！」

あ「ごめんごめん あと少しで次の町だ・・・」

とあゆむとミズゴロウは一番道路にいた
がささささ

あ「！ミズゴロウ 水鉄砲！」

「ごろろ！」

と出てきたのはサンドだった

そのまま命中 そして

あ「モンスターボール！」

と捕まえた

あ「・・・水鉄砲が当たったにしてはずいぶん弱っている・・・今
傷薬は持っていないし・・・ミズゴロウ！」

「ごろろっ！」

あ「早くミレッドタウンに急ごう！」

「ごろろ！！！」

ミレッドタウンへ

あ「ふう・・・ってポケモンセンターは・・・」

「؟؟？」「・・・あゆむと言うのはお前か？」

あ「そうだけど・・・」

といったら

「？？？」「勝負する！」

とポケモンを出してきた

あ「っ・・・ミズゴロウ！」

「ごろろ！」

「???」「ナエトル！」

「ナエ！」

あ「草タイプ・・・」

とあゆむは心の中で

（こっちは体力が無いサンドとミズゴロウだけ・・・どうにか勝って早くポケモンセンターに連れて行かないと・・・！）

「???」「葉っぱカッター！」

あ「どろかけ！！」

と技が衝突

「???」「たいあたり」

あ「ならこっちもだミズゴロウ！」

「ごろろ！」「なえ！！」

とまたも衝突

（不意打ちつかないとダメか・・・なら！）

あ「ミズゴロウ！どろかけだ！」

「???」「目潰しか？そんなのは効かない！」

あ「いや・・・狙うのは足だ！」

「???」「なっ！」

とナエトルの身動きが取れなくなっていた

あ「ミズゴロウ！体当たり！」

「ごろろ！！」

と命中する

「???」「・・・戻れ ナエトル」

あ「戻すのか」

「???」「当たり前だ 勝負はもうついている これ以上のダメージはしたくないしな」

あ「やさしいんだな」

「???」「当たり前だろう ポケモンは生きているんだからな 人もダメージを追いすぎれば壊れるしな」

あ「そうゆう役って　たいがいポケモンを道具にするって相場が決まっているからな」

「???」「どんな相場だ」

突っ込み役が増えた

「ポケモンセンター」

な「おっそーい!!」

ち「まあまあ落ち着きなよ　なみか姉ちゃん」

な「ネイちゃんが町に入ったって来てから30分はたってるの!なに?迷子にでもなったの!」

ち「いや・・・いくらお兄ちゃんでもそこまでバカじゃないよ・・・」
突っ込み役が逆になっている

と入り口からあゆむときっきの男の子が入ってきた
な「遅い!いつまでまたせるのよっ!」

あ「ごめん　なみか　ちよつとバトルしたら遅くなったんだよ」
「???」「・・・」

ち「その人が相手?」

な「ふーん・・・あたしはなみか　ポケモン図鑑を完成するために旅をしている女の子!」

といってから

ち「私はちひろ!ばか兄の妹なの!」

あ「そういえばお前の名前聞いてないな」

さいが「・・・さいがだ・・・」

あ「へー・・・そういえばなんで僕の名前しっていたんだ?」

さ「・・・アリスカタウンで両親のどちらか聞いたら解るだろう?

あの一族の末裔だからな」

ち「照れるな」↑末裔その2

あ「そうだね」↑末裔その1

な「そっか　そうだもんね　そりゃああんたら兄妹頭いいもんなしより」

と言ってちひろがこういう

ち「なみか姉ちゃんはポケモン関係の知識だけはいいいもんね」
な「ヴっ・・・」

あ「もつといええば それ以外はダメだけどね」
な「あうっ・・・」

いたいたしいでしょうね なんせ二連続だから
さ「いいところがポケモンしかないんだな」

な「うるさーいっ！」

となみかが言った後

さ「そういえば ポケモンを回復するんじゃないのか？」

あ「そうだった ってゆうかさいがもだろ？」

さ「ああ・・・」

とジョーイさんにポケモンを渡した

ち「・・・お兄ちゃん 手持ち二匹だけ？」

あ「一番道路で捕まえたんだ 水鉄砲当たったにしてはずいぶん弱
ってたし・・・」

な「急所にあたっただけじゃないの？」

あ「急所に当たってもだよ」

さ「・・・」

ち「そういえばバトルってどっち勝ったの!？」

あ「僕のほうだよ まあ・・・一番最初のバトルよりか条件は良かったしね」

さ「草タイプがか？」

ち「・・・そっか 最初のバトルってあれだもんね しかもそれでも勝ったし・・・」

さ「メンバーは？」

な「たしかー ポポッコとユキワラシだよね？」

あ「そうだね しかもレベルが上 こっちは一匹だったし・・・ねっ
ちひろ」

ち「うん そうだねー お兄ちゃんユッキーを一発で倒したしさ
ワッコをひたすくらいあたりしてきたしさ 攻撃する暇が無かった」

さ「その ユキワラシは見れるのか？そのワタツコがポポツコだと
して」

ち「んー・・・見れないね ごめん
な・・・」

と沈黙 何かあるみたいです 気になる

「回復終わりましたよー」

さ「ありがとうございます・・・じゃあな」

あ「どこいくんだ？」

さ「どこだっていいじゃないか」

とさいが が去っていった

あ「・・・変なやつだな」

ち「だね」

な「あんたら兄妹が言うな」

たしかにそうだね

あ「っと ミズゴロウ サンド出ておいで」

「ごうろう！」「さん！」

と二匹が出てきた

ち「そのサンド手持ちにするの？」

あ「うん 捕まえたしね」

な「そういえばジムに挑戦するの？するならジムまで案内してあげる！」

あ「よろしく なみか」

とポケモンセンターから出て行った

ち「傷つきすぎたポケモンねえ・・・」と

ちひろは

ち「ワツコ ジムまでお願いね」

「わたた！」

とポケモンセンターを後にした

くミレッドジム 前く

な「ここがミレッドジム」

あ「おっきーねー」

「挑戦者かい？」

あ「はい そうですけど」

「そっかーよかったよかった リーダー挑戦者ですよ」

「なあに！！？」

と大きい声が聞こえた

な「おっきっ・・・」

ドタドタと音がして

「挑戦者！ やっときたのか！」

「はい ストさん」

「あはは よかったよかった」

「そうですねー」

あ&な「「・・・」」

沈黙していた

あ「声大きいけど 見た目そうじゃないね」

ス「よくいわれるな 見た目があってないと！」

な「耳がキーンとするう・・・」

と時間が過ぎると ふわふわと何かがやってきた

ち「あ ストさん ひさしぶり」

ス「ちひろかーひさしいな」

な「ちーちゃん知り合い？」

ち「知り合いも何も 挑戦者だったもん」

チャンピオンならそうですね

な「へえ・・・」

それでおわっていいんですかね？

あ「挑戦してもいいですか？」

ス「いつでもいいぞ！」

「その前にジムのルールは解るかい？」

あ「なんとなくですけど・・・」

「それじゃ 説明するね ポケモンは6匹まで

先に相手のポケモンをすべて倒したほうの勝ち

入れ替えは挑戦者のみできるよ 道具やきのみを持ち込みは禁止以上だね」

ス「安心しろ ジムリーダー全員6匹まで持ってないからなー」

ち「二匹以上六匹未満だね」

「手持ちは二匹だね それじゃ ジムの中入ってね すぐ始めるよ」
な「私達は？」

ち「観客席あるからそこにいこ」

と二人はそこにいった

でジムリーダーと挑戦者^{あゆむ}は

ジムの中に入り準備をしていた

「それでは ミレッドジム ジム戦を開始します
準備はよろしいですか？」

あ「大丈夫です」

ス「OKだ」

「では 始めっ！」

の声と同時にポケモンが出され 技が炸裂した

ス「イワーク！たいあたり！」

あ「ミズゴロウ！どろかけ！」

それを観客席で見ていたなみかは

な「すごい」

ち「んー・・・勝負見えたね」

な「早いよ ちーちゃん でどっちが勝つの？」

ち「見てれば解るよ すぐに決着つくかも」

と舞い上がった煙がなくなってきた

イワークが倒れていた

ス「一発でこれほどとは・・・イワークもどれ！」

あ「よくやったよミズゴロウ 次も頑張れる？」

「えーろろ！」

ス（ふうむ・・・チャンピオン家系の息子であっていい判断をする）

「ウソッキーよ 行ってくるのだ」

な「草タイプっぽくて私嫌い」

ち「わかってはいても草タイプ入ってるみたいだもんね」

あ「・・・ミズゴロウ！水鉄砲！」

ス「ウソッキー！いわなだれ！」

と技が炸裂

な「ごほっ！げほっ！」

ち「大丈夫？」

な「なんとか・・・」

煙が無くなったあとと見たのは・

ス「ふむ・・・」

あ「ほっ・・・」

両者とも倒れている姿だった

「試合終了 勝者挑戦者あゆむ！」

あ「よしっ！」

な「勝ったー！」

ス「ふむ さすがというのか当たり前というのか解らないが おめでどう」

あ「いやー・・・やっとなが正解ですかね？ 僕家族の中で一番弱いですから」

ス「ストーンバッチだ 受け取れ」

あ「ありがとうございます」

とバッチを受け取った

な「おめでとー！」

ち「お母さん見たら激怒すかもね」

あ「そうだねー」

な「なんで!？」

ち「『相性抜群の相手なんだから 一匹で倒しなさい!』って」

あ「ちひろの場合は ユッキー一匹で倒したもんね」

ス「あれは 酷かった」

ち「実力の差ですから」

と平然に言う 実力でって・・・

「次は アスナタウンジムかな？」

な「次の町はないの？」

ち「次の町フレイシティはジムないね 大都市だからあってもいいんだけどね」

な「へえ・・・」

くジム外く

「それじゃ 次のジム頑張ってね」

ス「負けるなよおおお！」

あ&な&ち「「さようならー」「」」

とあゆむたちが見えなくなると後ろから

さ「すみません」

ス「ん？」

さ「ジムに挑戦したいんですが」

「希望者だね 名前は？」

さ「さいがです」

とさいが がジムを挑戦していたのでした

『次の町 フレイシティにつくあゆむ達

そこでのなみかの旅の決意が固まる

新キャラも次々と登場！ 少しちひろについて解るかも？

次回「出してみよう！」お楽しみに！』

出てみよう！

「二番道路」

な「大都市かあ」

あ「そんなにたのしみ？」

な「もっろん！だって他の町と違って行ったことなかったし」

ち「ありゃ？初耳だ」

な「あってもポケモンリーグぐらいだよ」

ち「へえ」

それでおわっていいのかな？

普通の人から見たら結構すごいところだよ

「フレイシティ」

な「ついたー！」

あ「さすが大都市・・・高いビルが多いね」

「???」「ちひろさん！」

と女の人がある　さん付けで

ち「マリさんだーお久しぶりー」

マ「おひさしぶりです！」

な「ちーちゃん誰？」

ち「マリさん　私のマネージャーなの！」

さすが才色兼備の完璧超人！ん？関係ない？

あ「はじめまして　ちひろの兄　あゆむです」

な「私は　なみかです」

マ「お二人とも初めまして　マリです　そうだ　ちひろさんちよっ

と情報が・・・」

と内緒話をしている　と

ち「・・・ねえ　コンテストにつきあってくれる？」

あ「コンテスト？」

マ「エントリーするのでしたら　私が先に済ましておきますけど」

な「・・・私出てみたい！」

となみか言う

あ「どんなのか知ってるの？」

な「ある程度は！」

ち「なみか姉ちゃんのある程度はほんの少しだからなあ・・・」

マ「えっとなみかさんとちひろさんと・・・あゆむさんは？」

あ「あ　僕はいいです」

マ「っとこれでおしまい　コンテストは明日なので準備済ませてく
ださいね」

な「はい！」

とマリさんいなくなる

ち「えっと　コンテストってのは　ポケモンのうつくしさ　かっこ
よさ

かしこしさ　たくましさ　かわいさを見せるものなんだよね　それ
を目指すものを「コーディネーター」って言うのね」

あ「トレーナとブリーダーに関係するもの？」

ち「そうだよ　学校の先生は教えてくれなかったけど」

な「その頂点が「トップコーディネーター」なんだよね！」

ポケモンになると詳しくなる　なみかさん

ち「コンテストは全部で三次審査まで　一次審査は人気投票　二次
審査は技を使ったポケモンアピール　それを合計した上位12名が
三次審査に受けられるの」

とスラスラ言う

あ「三次審査は？」

ち「バトルだよ」

こ　コーディネーターだからってバトルしないわけじゃないんだか
らね！

ち「トーナメント式で決勝戦で勝ったほうの優勝なんだよ」

な「ふんふん」

となみかさんものすごく聞いてます　ちなみになんでバトルなのか

と言うと

詳しくはポケモンアニメを見てね

「その夜 旅館にて」

あ「なみか」

な「ん？何？あゆむ」

あ「どうしてコンテストに出ようと思ったんだい？」

な「最初のさ旅の目的はポケモン図鑑を埋めることだったの・・・でもちーちゃんがほとんど埋めているって聞いて目的がなくなったんだよね」

となみかは窓の外を見て

な「あゆむはジムを制覇 ちーちゃんはポケモン図鑑の完成 それぞれ目標をもって旅に出てるのに私だけ何も無いなーって思ったの ここについたときコンテストの話になってこれだって思ったよ」

あ「旅の目的が決まったってこと？」

な「うん 興味はあったし図鑑集めるなら行かないほうがいいと思って諦めてたけど 今回のコンテストをきっかけにしてトップコーディネーターを目指そうと思うの 今回はちーちゃんが出るから優勝は無理だと思うけど」

となみかはあゆむの方に顔を向けて

な「自分のベストを尽くして がんばってくるよ！」

あ「・・・がんばってね」

「翌日 コンテスト会場前にて」

ち「レッツ コンテスト！！」

な「イエーイ！！」

とはしゃいでいました

あ「はしゃぎすぎて疲れないようにね」

さ「おい まて この状況が理解できないんだか？」

と（永遠の突っ込み役）さいが がロープでぐるぐる巻きにされていた

あ「さいがを見かけたからコンテスト一緒に見ないかって誘おうと

思ったけど きつとこないだろうなーって思ったから少し気絶させて逃げないようにロープでぐるぐる巻きにしてみただよ」

さ「よく覚えてなかったがあれは少しってほどの気絶させ方じゃなかったぞ」

どうやって気絶させたかっていうと ミズゴロウのたいあたり

ち「なみか姉ちゃん！昨日言ったこと覚えていていれば二次審査は楽勝だよ！」

な「よしっ！がんばるぞー！」

（コンテスト会場内にて）

？「ちひろっ！今度こそ決着つけてやるんだからな！」

と女の人（↑重要）が話しかけてきた

ち「ヒカルさん 今回も優勝はもらいますけどね」

と火花が散っています

あ「誰？」

マ「彼女はちひろさんのライバルのヒカルさんです」

とマネージャーことマリさん出てきました

な「いつのまに・・・」

マ「ライバルとなったのは私がちひろさんのマネージャーとなつて一ヶ月たったときのこと・・・」

（回想 どこかのコンテスト会場内にて）

「おい みろよ」

「ああ 前のコンテストでぶっちぎり優勝したやつだろ？」

「名前はヒカル！」

と女の人が歩いてくる

「くやしいわ！あんな大差で負けるなんて！」

と歩いてくると入り口にちひろが見えてくる

ち「おっきーね！」

マ「鮮国地方のコンテスト会場本店みたいなところですからね」

「おいおい あいつもでるのか？」

「一番最初のコンテストで参加者を泣かせたあいつだろ？」

「才色兼備の完璧超人のちひろ！」

このころから言われてたんですねー

ヒ「あなた このコンテストにでるの？ 完璧超人と言われるみたいだけどコンテストは私の得意分野 負けて泣きじゃくる顔がみえてくるわ！」

ち「・・・まあ出ますけど いい勝負をしましょうね お兄さん」
（終了）

マ「それから自分の正体がばれて ちひろさんのことライバル視してるみたいですよ」

な「え？あの人男なんですか？」

マ「もともとが女の子顔だったから少し化粧しただけで女になりきれそうよ」

あ「二人ともきずかなかったの？」

二人「あんたはきずいてたんかい！！」

あ「いやだって 体の形とかで解らない？」

さ「そんなのに気づけるのは普通の人にはわからない」

ヒ「もう私はヒカルではないわ！私はコウよ！」

ち「いつのまに本名に戻ったんです？」

ヒ「なんで私の本名を知っているーっ！？」

ち「ヒカルさんが最初に勝ったときに教えてくれたじゃないですか」

コ「がーん！覚えてなかったー」

なにやら楽しい話をしている

マ「お二人ともお時間ですよ」

コ「今回絶対勝つからなーっ！」

とコウ（ヒカル）がいなくなった

ち「なみか姉ちゃん！時間だって！」

あ「僕達は観客席にいるからがんばってね なみか」

さ「・・・」

と言葉を受け取り

な「がんばる！」

と控え室に向かった

（控え室）

な「いっぱいいるねー」

ち「大都市だからねー」

と声がする

「出場者の皆さん 準備をしてください！ 舞台に出ます！」
な「よしっ！」

ち「がんばろーね」

と舞台に向かった

（舞台 観客席）

さ「いつまでこんなのしてなきゃいけないんだ？」

あ「逃げないようにだからねー」

「さあ！今回の出場者とポケモン達です！」

アナウンサーの声がして

舞台には30人と30匹のポケモンがならんでいた

あ「ちひろが5番目 なみかが24人目か」

さ「一番最初が人気投票だったか」

あ「はい さいがの」

さ「このままじゃかけねーよ」

とあゆむは縄を解く

あ「複数でもいいんだね それじゃあ・・・」

さ「・・・」

「回収しまーす」

と回収された

「お次はアピールタイム！トップバッターは・・・」

とアピールタイムが始まった 五番目なのですぐにちひろの番

「五番目は才色兼備の完璧超人といわれているちひろさんです！」

ち「ワッコ！」「わたた！」

ち「わたほうし！」「わたた！」

とほうしが舞ったら種が出てきて

ち「タネマシガン！」とほうしを撃つ

「わたほうしとタネマシガンの組み合わせ！まるで雪が降っているかのような！」

ち「とんぼがえり」

とワツコはちひろのほうへ戻る

「雪の中を舞う 草タイプ！ちひろさん幻想的な光景をみせました！」

あ「すごいねー」

さ「そうだな」

とその次は

「名前を変えて再登場 六番目はコウさんです！」

コ「ミミロル！」「みみ！」

コウ（ヒカル）の人でした

コ「シャドーボールから冷凍ビーム！」

「みーみー！」

とシャドーボールを何個も打ち出し冷凍ビームを打ち出す

玉が出来たら二個ミミロルが持ち 残りをコウが持つ

コ「はい！」とお手玉をする

「シャドーボールのお手玉！氷の玉のお手玉！前の大会とは違うパフォーマンスをしてくれました！」

と盛大の拍手

あ「すごいねー」

さ「女装を抜いたら真人間なのにな」

それをいってはいけません これは作者空間なのですから

く控え室く

な「・・・」

緊張してましたこの人 さすがにそうですよねー

ち「なみかねーちゃん！」

な「ちーちゃん・・・」

ち「緊張してるの？」

な「うん　こんな大舞台初めてだからね」

ち「大丈夫！なみか姉ちゃんは才能があるもん自信もって！」
な「うん……」

「24番の方お願いします」

な「出番だ・っ！」

ち「がんばれー！」

「舞台」

「今回が初出場！24番目はなみかさんです！」

あ「なみかだー」

さ「昨日言ってたことっていつてたけどなんなんだ？」

あ「それはさー」

「昨日」

ち「初心者に限って多いんだけどポケモンじゃなく技を披露するのが多いんだよね」

な「え？」

ち「だってポケモンコンテストだよ　主役はポケモンだもん技が目立っても意味無いじゃん」

あ「なるほどね」

主役はポケモン！あたりまえです

な「とゆうことは？技はポケモンを目立たせるために必要ってこと？」

ち「そうゆうこと」

「終了」

さ「ポケモンを目立つためねえ……」

あ「ちひろ曰くそれが出来てコーディネーターを目指せるらしいよ」と話しているうちになみかさん舞台にいますよ

な「ネイちゃん！」「ねいー」

な「高速レポート！」

とネイティがいっぱい出てきた

あ「それは残像だ……ってやつだね」

さ「作者が元ネタを知らないやつをやるな」

メタ発言はいけません

な「ナイトヘッド!」

と目が光る ネイティですよ?

「ねー!」

「高速レポートによる残像でナイトヘッドを繰り出し ポケモンを印象付けました! 初心者ながらすごいパフォーマンスです!」

な「で・・・できた」

あ「わーすごい」

さ「・・・」

※作者の表現技法が低くごめんなさい

く控え室」

ち「なみか姉ちゃんすごい!!」

ちひろがいきなり抱きついてきた

ち「あれなら三次審査に出れるよー!」

な「ほ・・・本当!」?

ち「うん!」

「結果が出ました! 三次審査に進めるのはこの方達です!」

とモニターに顔が出たそこにはなみかがあった

な「やった!」

ち「なみか姉ちゃんおめでとー」

あ「おめでとー」

さ「・・・(ぱちぱち)」

といつのまにかあゆむたちがいる

きにするな!

コ「ここからが勝負よ! どこにしても勝ったほうが優勝だからね!」
嵐のように現れさっていった なにしてんだよ

「トーナメント表はこのようになります」

と画像が出る 右側がちひろ 左側がコウとなみかな
「勝てるかなあ・・・」

あ「実力もあるけど 運もあるからねがんばって」

さ「それはさりげなく冷たくないか？」

とアナウンスが入る

「一回戦 はじめます！」

あ「それじゃ僕達は 観客席に戻るから」

さ「がんばれ・・・」

とあゆむとさいが が観客席に戻った

モニターでは第一回戦 コウさんがいた 場所は左側一番上がコウさん

一番下がなみか 右側一番上がちひろみたいなかんじですよー

あっという間に三回戦目 なみかの出番です

な「ネイちゃん！」

「ココドラ！」

とポケモン勝負が始まる

な「ナイトヘッド！」

「メタルクロー！」と技を出し合う

もちろんアニメを知っている人はわかるでしょ？ この勝負は芸術

点がい入るのですよ そこらへんも考えないと技を当てても 相手

に芸術的に受け止められたらこっちのゲージも減りますからね

「そこまで！」

といつのまにやらタイムアップ

「勝者 なみか！」

なみかさん勝ちました 初勝利！やったね

と続けて 四回戦ちひろさん

ち「ワッコ！」

「レディバ！」

タイプの不利なちひろさんだが

ち「つばめがえし！」

と一発いれたらK.O

「レディバ！？大丈夫！？」

と言っている横で

ち「ワッコ！よくやったけど 早すぎだからね！」

と小さく怒っていた バトルを長く楽しみたいんですね

な「ちーちゃんすごいねー」

ち「いやいやそれほどのことでも」

と七回戦 コウさんは圧勝で準決勝 なみか ちひろは一回戦勝つたらそのまま準決勝なので八回戦行って 九回戦 コウVSなみか

な「ネイちゃん！」

コ「ミミロル！」

とポケモンを出し同時にこういった

な&コ「「シャドーボール！」」

砂煙が舞う もちろん両者ともたっている

コ「ぴよぴよパンチ！」

な「つつく！」

と技を打ち出す それが続くと

「そこまで！」

と審判が言う

「勝者 コウ！」

なみかさん負けました でも初めてにしてはいいところまでいきましたね

ち「なみか姉ちゃんお疲れ様 惜しかったねー」

な「技数も少なかったし 今度の作戦につながるね ちーちゃんが
んばって！」

ち「がんばるー」

と十回戦またもや瞬殺 さすがチャンピオン！

で決勝戦 コウVSちひろ

ち「ワッコ 飛び跳ねる！」

コ「ミミロル 冷凍ビーム！」

と同時に言った もちろん冷凍ビームは当たりません
コ「くっ シャドーボール」

ち「エナジーボール」

とぶつかる

コ「ピヨピヨパンチ！」

ち「ギガドレイン！」

と技を出し合う　そして

「そこまで！」

と声がして　モニターを見ると　コウのゲージが無くなっていた

「勝者　ちひろ！」

とちひろさん優勝しました　すごい

表彰が終わって　会場外

へ会場外にて

な「ちーちゃんすごい」

あ「おめでとー」

さ「・・・」

と拍手する三人　そこに

コ「次回こそは勝つんだからね！」

とツンデレ風に言ったコウ

マ「ちひろさん　またなにかありましたら　連絡しますね」

といったマリさん　二人とも去っていった

な「次がジムのある町　アスナシティだね！」

ち「そうだねー・・・！！」

と顔が青ざめるちひろ

さ「どうしたんだ？」

ち「いやぁ・・・なんでもないよー」

あ「・・・（そっか・・・）」

と3番道路に向かう　あゆむ達だった

『目指すはアスナタウン！　向かうためには洞窟を通るぞ！　あれ

？　ちひろさんが震えてる？　洞窟抜けたら早速ジム戦だ！　次回の

相手は炎タイプ！　ちひろの弱点が知れちゃうぞ！　次回「通ってみよ

う！」　おたのしみに！』

通ってみよう！

〔三番道路〕

な「アスナタウンってどんなところ？」

あ「さあ？僕にもわからない」

さ「温泉が有名な町だ」

あ「な「すごい！」

さ「それぐらい知つとけ」

そうですねー あれ？

な「ちーちゃん どうかしたの？」

そうちひろさんの顔色が悪いです

ち「へ？あ・・・いや・・・なんでもないよ」

と少しだけ動揺する ちひろさん どうしたんでしょう？

あ「・・・（やっぱり・・・あのときの・・・）」

とあゆむさんも無言

そんなうちにも 道はサクサク進みます

〔洞窟 外〕

な「ここ通らなきゃいけないの？」

さ「そうみたいだな」

ち「うっ・・・」

とちひろさんが少し引き気味になった

な「ちーちゃん？」

ち「えーい！もうどうにかかってしまえ！」

と洞窟に向かって走り出すちひろ

あ「ちひろ！まって！」

と後を追う あゆむ

な「ってまって！」

さ「・・・」

と二人追う 二人

（洞窟内）

ち「思いつきり入ってきたけど・・・」

と分かれ道にの前に立つ　ちひろさん

あ「ちひろ！大丈夫なのかい！？」

と心配する　あゆむ　何が？

な「二人ともはやーい」

さ「・・・」

この二人も追いつきました

ち「お兄ちゃん！あのときの私とはなめないでよね！きちんと克服するために毎日がんばってたんだもん　いまじゃ誰かと一緒に入っていれば離れてても平気なんだよ！」

あ「そう？　無理しないようにね？」

な&さ「・・・？」

と話の趣旨がみえない二人　私にもわかりません

な「えっと？　ちーちゃんなにか怖いのか？」

ち「怖いのはゴーストタイプだけ！」

あ「ちひろは怖いではなく恐ろしいところなんだよ」

さ「恐怖で表せるじゃねーか」

あ「そうだねー」

とあゆむが笑う

あ「ちひろはね　小さいときの旅行先で洞窟に閉じ込められて以来洞窟が苦手になったんだよ」

ち「よけいなこというなーっ！」

とちひろさんが大声で言う

な「？洞窟ってあの？」

あ「なみかの考えてるのとは違うやつなんだよ」
なぜ解る　隠れ天才か？

あ「まあ人って一つくらい欠点ないと可愛げがなくなるからね」

さ「・・・前から思ってたんだが・・・お前ら本当に兄妹か？」

あ「？兄妹だよー」

そうゆうのも解ります 言いたくなりますよね
ち「早くいくよー！さっさと出たいんだからね！」

というちひろ

そのさきは二手道

な「どっちいけばいいの？」

ち「片方複雑だから えっと・・・この洞窟は左側が複雑なほうだね！」

とちひろを先頭にさいが なみか あゆむは洞窟の右側に行くが
ドドドドドドドドドドドドドドドドドド

と音がする

な「何？この音・・・」

ち「何かが掘っている音だね たとえばドリルとか」

あ「人工のものか・・・」

さ「おいっ！さっきより音がでかくなってるぞ！」

ドドドドドドドドドドドドとさっきよりも大きい音で聞こえてくる
その瞬間

どっしゃーーん！

と岩が崩れた 幸いあゆむなみかは右側の入り口に入る手前だったが
先に入っていたちひろ さいがは岩の向こうになった

あ「あっちゃー・・・」

な「じゃないよ！ちーちゃん！さいがくん！」

と呼びかけると かすかだが声が聞こえた

さ「こっちは大丈夫だ そっちは平気か？」

あ「こっちも大丈夫だよ・・・ちひろは？」

さ「なんかつぶやいてるぞ？」

あ「あー・・・それはやばいね」

さ「なにがだ」

と突っ込みを入れる

あ「とりあえずこっちは複雑なほうの道を進んでみるよ きつとど
こかで合流点があるはずだから そこまで・・・ちひろをよろしく

な？」

さ「おう わかった」

と声は聞こえなくなった

な「ってどうするの？ 複雑なほうだから時間はものすごくかかると思うけど」

あ「どうにかなるでしょ」

な「無責任な・・・」

ですよー

（おまちください）

とまたもや声がきこえる

あ「誰だっ！」

（ふふっさすがに声だけだと 初めてですもんね あゆむくん なみかちゃん）

な「私達をいつているの？」

と二人はあたりを見渡す けれど誰もいない

（時間があります 私の道しるべをたよりにすすんでください）
と氷の息が出た どこからかは解らない

あ「氷・・・？ まさか！」

（時間がありません・・・ ちひろちゃんを助けてくださいね）

と声は聞こえなくなった

な「・・・進もっか」

あ「うん・・・」

と道しるべを元に進む二人だった

く少し時間さかのぼり岩の向こうではく

さ「声が聞こえなくなったか・・・」

とその隣でちひろはつぶやいていた

ち「いやだ・・・あのときみたいに・・・いや・・・」

さ「・・・大丈夫か？」

ち「・・・」

と無言でポケモンを出す

（ちひろちゃん！大丈夫！？）

ち「ラル・・・フラッシュ・・・」

（解ったわ）

と周りが明るくなった

さ「・・・立てるか？」

ち「うん・・・」

とちひろさんは立ちました そしたらさいが後ろにしがみつきました

（このまままでいてくれる？昔洞窟入ったときもこんな風にあゆむくんにしがみついていたの）

さ「本当に兄妹か？こいつら・・・」

いや それはあたりまえでしょう

とさいがさんがそのまま歩く ゆっくりと

さ「まっすぐでいいんだよね？」

ち「うん・・・」

とちひろは言った

「時は進み合流点」

あ「あ さいがにちひろ」

な「よかったー」

さ「お前ら 迷わなかったんだな」

な「誰かが手助けしてくれたんだよね」

さ「誰・・・？」

（・・・あゆむくんもしかして・・・）

あ「きつとそうだね 心配でずっと近くにいたんだよ」

（ふふっ ちひろちゃんが一番のパートナーですもんね）
な「ってなんでおぶってるの？」

さ「泣きつかれたんじゃないのか？途中で進むのがつらくなったから後ろ見たら寝てたんだよ」

あ「まあ仕方ないね トラウマと似たこと起こったから」とあゆむは言う

な「え？結局なにが起こって洞窟嫌いになったの？」

あ「少し長くなるから歩きながら話すね」

と三人と一匹は歩き出す

あ「ちひろが洞窟嫌いになったのとワツコに会ったのは同じときだったんだよ」

な「え？そうなの？」

あ「でもそれと同時に悪いやつへの敵対心も強くなった頃だからね

あの事件はちひろを大きく変えた日だったね」

そうあれは僕が六歳　ちひろが五歳のときだったとあゆむは言った
　　過去※視点はあゆむ

あ「すっごーい！」

ち「ふえー」

僕達は月に一度家族旅行に行くんだ　そのときの旅行は炭鉱を見に行くことだったんだ

母「働く人の邪魔にならないようにね」

とお母さんの忠告があった邪魔にならないようにいろんな場所を見ていた

ち「お兄ちゃん　炭鉱の中って入れないかなあ？」

あ「入れないよ　車とか通るもん　邪魔になっちゃうよ」

と従業員がそれを耳にしていたらしい

「入り口だけなら入っても大丈夫だよ」

と返ってきたのだ　僕達はすかさず炭鉱の入り口まで走った

ち「ははっ！でかーい！」

あ「おっきー！」

と僕達ははしゃいでいた瞬間だった

突然地震がおこったんだ

さっきみたいに岩なだれがおこって　入り口は閉ざされたんだ

そのとき僕らは炭鉱内にいたんだ　ちひろは岩なだれが起こったすぐ近くにいたからそれがトラウマになっているだろうね

「大丈夫かー！」

と何回もその言葉が聞こえた　でも次第に聞こえなくなってきた
入り口は閉ざされたものしかなかったからとつても大変だったんだ
ち「おかあさあん！おとうさんあん！うわあああん！」

ちひろは号泣だったね　泣きやませるのものすごく時間がかかった
と言っても実際泣き止ませたのは僕ではない　小さな音だったんだ
ち「あ・・れ・・？」

あ「どうしたの？」

ち「聞こえた・・・何か・・・こっち！」

ちひろは走ったんだ　炭鉱洞窟の奥へ　もちろん僕も向かった
一番奥にあったのは　ワタツコ　ポポツコ　ハネツコが沢山つまれ
ていた光景だった

ち「やっぱり・・・ポケモン・・」

あ「ひどい・・・」

「あー　これで全部かー？」

「おう！これでやっと邪魔をしていたこいつらの排除ができたぜ」
と二人の男の人の声が聞こえていた

あ「ちひろ　隠れよ！」

ちひろは全く動かなかった

「おい　誰がいるぞ！」

「うそだろ？従業員でも入ったのか！？」

と男の人たちがやってきたのだ

「子供だぞ」

「子供でも関係ねー　見られたからにしまつしねーと」

とポケモンを出そうとした瞬間

僕のモンスターボールからミズゴロウが出たんだ

「みずーっ！」

あ「こらこらミズゴロウ　旅行での戦闘は禁止って言われただろ」

「遊んでんのか？」「しまつするぞ！」

あ「やめたほうがいいですよ　特に僕達にはね」

と僕はいったんだ

あ「ちひろはちょっとした事故で現在ポケモンを使ってはいけないことになっています もし大丈夫だったら真っ先に殺しにかかってましたよ ちひろもユッキーも真面目だからね」

ミズゴロウはいまだに威嚇している ちひろのボールの中のポケモンがうなずいていた

あ「今はミズゴロウを止めている僕ですけど もしこれ以上の悪行をしていたら怒られるのを当然で戦っていたかもしれません」

「くっ・・・」

「子供だからってなまえきいてんじゃねー！」

とそのとき 誰かが走ってくる音が聞こえたんだ

「やべーぞ！」 「逃げるぞ！」

と二人組みはいなくなっただ ちひろはいつの間にかワタッコ達が積まれていた山の上にいた

あ「ちひろ なにやってるの？」

ち「さっき かすかに ポケモンの声が・・・いた！」

とちひろはハネッコを持ち上げた 生きているらしい

母「あゆむ！ちひろ！」

父「大丈夫だったか！？」

とお母さんとお父さんが来た 入り口の岩がかたずいたのだろう

僕は外に出るまでに起こったことをすべて話した

ちひろはハネッコを持ったままうつむいていた

母「災難だったわね でもよくやったわ 緊急時ではポケモン使って良いことにしよう」

父「一匹だけでも生きていてよかったな ちひろ」

ち「うん・・・」

「は・・・ね・・・」

母「そのハネッコを治療するためにポケモンセンターに行きましょうか」

父「しかし どこからきたんだろうな？ ここの辺はワタッコ達の生息地じゃないはずだが・・・」

母「そんなのは関係ないわ　わかんないなら自分のものにしちゃえばいいのよ!」

あ(それは無責任なきがする・・・)

ち「いいの?」

母「ええ!そのほうがこのこのためつてもものよ!」

ち「うわーい!二匹目!ニックネームどうしよっかなあ!」

急に元気になった　手持ちが増えてうれしいのはわかるけど

ち「進化系がワタツコだよね!だから・・・ワツコ!あなたの名前はこれからワツコね!」

「は・・・ね!」

と元気になったように見えた　ワツコもちひろが好きになったんだろうね

ゝ終了ゝ

と話終わった頃はもう出口だった

あ「それで　洞窟嫌いになってワツコが一緒にいるようになったんだもね　ワツコ」

「わたた!」

サーナイトことラルの代わりにワツコがいた

さ「いろいろ突っ込みたいところだが　何かすごい過去だな」

な「気づいたときにはもうワツコはいたからねー　どの旅行かわからなくなるよ・・・」

ゝ外ゝ

ち「ふえ?朝?」

とちひろさんが起きてきた

あ「まだ　一日過ぎてないよ　ちひろ」

ち「そう?ならまたね・・・」

さ&な「寝るんかい!」

ち「・・・ああ・・・そっか・・・降ろしてさいが兄ちゃん」

さ「ああ」

ち「よく寝たー!」

とちひろは背伸びをする

「わたた！」

ち「機嫌いいねえ！ワッコ！」

「わった！」

な「洞窟抜けたらすぐなんだ アスナタウン！」

あ「おお！さすが温泉の町 湯気がたくさん！」

「あつぶなーい！」

と声がした瞬間 なみかの顔に何か当たった

それはポケモンだった

「こらー！ガーディ！言うことを聞きなさい！」

「ぐるるるるる！」

あ「威嚇してるね」

な「してるね・・・」

ち「めちやくちや警戒してるじゃないですか」

さ「何か悪いことでもしたのか？」

「なついてないだけなの！」

と言い返すと

「でも育てやだから 私になつかれても困るんだけどね」

あ「育てやなんですか？」

「ええ このガーディはお客様のなの お客様のためにもあなたのためにも脱走はだめだよ？」

「うをおん！」

ち「あー・・・そのお客様ってずっと来てないでしょ？」

「うっ・・・」

あ「寂しがってるね 主人を思ってずっと待っている」

「くっ・・・」

さ「不在しすぎなら 電話でもかけてやればいいものを」

「はっ・・・」

な「かわいそうにね ずっと待っているのに来てくれない まるで捨て犬みたい・・・」

「ぐはっ・・・」

と4連発ダメージを受けています

どうやら中だそうです

「このガーディ 預かっているんじゃないくて 無理やり預かったのよ」

四人「え？」

「この主人が悪い噂のある人でね ポケモンも道具としてつかってたのよ」

ち「ドウグ・・・」

「その人がココの町に来たとき 手持ちはガーディしかいなかったのよ 一匹しかいないからすべてのストレスがガーディに来るわけね それを見ていられなくなって・・・」

あ「止めに入っただけですね？」

「そうよ それで療養のために預けてもらっていったら 好きにしろただしそのポケモンは用無しだとかいったのよ むかつくわ！」

とココからは会話文がもったいないのでカット 簡単に説明するとそのガーディを自分のポケモンにしようとしても なつかない 道具扱いしていた主人を思っている とてもかわいそうなポケモンな話だ

きずいていたんだけど 帰ってこない主人を待つしか方法も無く 探す方法もないのでしかたなく 預かっているという状況に陥っているのだ

「そこで お願いがあるのー この子を一度その人のところへ連れて行ってくれる？」

あ「場所もわからないのですか？」

「そうなんだけど もしかしたら君らのほうがこの子もなじみやすいと思うしね」

ち「なるほど で？ 誰が引き取る」

な「はいはい！ 私が引き取るー！」

となみかさんが手を上げていた
さ「それじゃ 決定だな」

すぐに決まってしまった それでいいのだろうか？

「よろしくね」

な「ネイちゃん 新しいお仲間よ！ 名前は・・・ディちゃんです！」

「ねいー」

「うおう！」

とすぐに仲良くなったみたいですわね よかったですね

「つてずっと 立ち話だったわね 私の家へいらっしゃい 何かご馳走するわ」

ち&な「やったー！」

ご馳走に弱い 二人だった

く育てや

「あがってあがってー！」

と案内された四人 と一人誰かいた

？「おひさしぶりです！ あれ？お客さんでしたか？」

「ガーディを引き取ってくれた方よ！」

？「そうなんですか！？ ガーディちゃん喜ぶますね！」

ち「あれ？フレナさん」

フ「ちひろちゃん？久しぶりだね！ その三人は知り合い？」

ち「そうだよー」

という

あ「兄のあゆむです」

な「私はなみかです」

さ「さいがだ・・・」

と言った

フ「私はアスナジムジムリーダー フレナ よろしくね」

あ&さ「ジムリーダー！？」

とびったりそろった 仲がよろしいこと

あ「さいがもジムバッチ集めてるのか？」

さ「もってことはお前もか・・・」

と火花が散っています あれ？デジャヴ？

フ「ジム戦と行きたいけど 二人連続は無理だから もう一人は明日でいいかな？」

あ&さ「はい！」

フ「それじゃ どっち最初にする？」

あ&さ「僕！ 俺！」

と同時に言った また火花が散っています
な「とりあえずジャンケンで」

とジャンケンをする 二人 すると・・・

あ「それじゃ 僕からやりましょう！」

あゆむがグーでさいが がチョキであゆむが勝っていた
フ「いいわついて来て」

と案内される4人 いや一人知ってるんだよね

そんなところでさいが

さ（なんで ジャンケンはこんなに負けるんだよ・・・）

他にも負けたことあるみたいです

（ジム内）

「挑戦者はあゆむ・・・でポケモンは二体と・・・」

ち「それじゃあ 私達は観客席にしよう」

な「わかったー」

さ「・・・」

と三人は観客席に あゆむは最終準備に

あ「ミズゴロウもサンドも大丈夫だね・・・ん？」

と少しくたくたになっているミズゴロウを見た

「みず・・・」

あ「大丈夫かい？最初にしようと思ったけど後にする？」

「みず！みず！」

あ「そう？無理はしないようにね」

と言った

そして

「それでは アスナジム ジム戦を開始します 準備はよろしいですか？」

フ「OKだよー」

あ「大丈夫です」

「では はじめっ！」

フ「キュウコン！炎の渦！」

あ「ミズゴロウ！水鉄砲！」

と炸裂 すると

フ「ミズゴロウ へばっているんじゃない？」

あ「大丈夫ですよ これは疲れではないですから」

（観客席）

な「なんて卑怯な・・・」

ち「私のときはロコンだったのになあ・・・」

さ「卑怯のか・・・？」

とさいが言うのと

ち「なみか姉ちゃんキュウコンをどうぞ」

な「図鑑？38 キュウコン きつねポケモン ロコンの進化系

特性はもらいび九本のシッポにはさまざまな言い伝えが残っている

能力としてはHP攻撃防御が特攻 特防 すばやさよりやや劣る

エスパー技も覚えられるし 炎技特殊としては結構高いところにある

よってなんでいわず！？」

ち「ポケモン図鑑より優秀だからねー ミズゴロウをどうぞ」

な「図鑑？258 ミズゴロウ むまうおポケモン ヌマクローの

進化前 特性はげきりゅう おおきな岩をコナゴナにするパワーを

持っている 頭のヒレはリーダー 能力的には攻撃が一番高い 主

に要るのはハウエン地方」

と言った後がつくりしている

さ「ポケモンだけはいいいんだな」

な「だまれ・・・」

言い返す元気がなさそうです

そんな中で

フ「キュウコン！神通力！」

あ「ミズゴロウ！守る！」

と進めていた

ち「あ」

な「すごい」

さ「何が？」

と不思議に思っていたさいが　すぐにわかります

あ「ミズゴロウは戦いの場で進化したかった　ちよっとした意地で
ずっと止めていたんだ　本当の実力は・・・ここからだっ！」

とまぶしい光に包まれて　そこにいたのはヌマクロー

ち「ヌマクローをどうぞ！」

な「図鑑？259　ヌマクロー　ぬまうおポケモン　ミズゴロウの
進化系　ラグラージの進化前　特性はげきりゆう　ドロドロにぬか
るんだ足場で生活するうちに強靱な足腰になった能力としてはこう
げきが一番上すばやさが下になった　進化して地面タイプが増え
草が4倍になる代わりに電気タイプが効かなくなった」

さ「炎タイプにはかなりのダメージが出来る」と

あ「ヌマクロー！マッドショット！」

「ぬま！」

と炸裂　キュウコンが戦闘不能に

フ「ギャロップ！」

さ「ギャロップは？」

な「図鑑？78　ギャロップ　ひのうまポケモン　ポニータの進化
系　特性はにげあし及びもらいび　ものすごい加速力で走り出し1
0歩で最高時速240？になる　炎は信頼したものには熱くはなら
ない　能力としてはすばやさが一番上HPが少ない」
ぐったりしていません　なれたみたいですね

ち「進化したヌマクロー相手にかなうわけないでしょ 能力的には上だけど」

あ「マッドショット！」

フ「火炎車！」

とものすぐく炸裂

さ「苦戦しているんじゃないのか？」

な「微妙・・・？」

あ「水鉄砲！！」

フ「飛び跳ねる！」

と水鉄砲は当たる

あ「ヌマクロー！たえろ！」

フ「いっけえー！！」

と砂煙が舞うそして砂煙がなくなるとギャロップが倒れていた

「ギャロップ戦闘不能 勝者挑戦者！」

あ「ふう・・・」

フ「あらら 負けちゃった はいファイアーバッチよ」

とフレナはバッチを渡す

あ「ありがとうございます」

フ「うふふ 久しぶりにいい勝負が出来たわさすがちひろちゃんの

お兄さんでありあの家族の長男なのね」

あ「あはは・・・（苦笑）」

となみか達がやってくる

な「おめでとー！」

ち「おめでとー」

さ「・・・」

もう少し祝ってあげてください

あ「今度はさいがの番だ」

さ「・・・解っている・・・」

とジムが出る4人

（翌日）

え？早い？だって普通に日をまたいだだけだよ
いないじゃないか　ねえ？

そこはまあ置いといて　さいがのジム戦ですね

あ「がんばれー」

ち「二回目だし見るのは飽きたのだけれども」

な「そんなこと言わないの・・・」

さ（だんだん扱いが酷くなってるのは気のせいかな？）

気のせいですよ　まだ4話目ですからね

さ「ズバット！」

あ「あれ？手持ち増えてたんだ」

ち「初耳だねー」

な「図鑑？41　ズバット　こうもりポケモン　ゴルバットの進化
前　特性はせいしんりよく　目がないといわれるので有名　それで
も飛びまわれるのは口から超音波を出しているからである　能力と
してはすばやさが一番高い」

勝手に言わないの　とりえがなくなるでしょ

というわけで（？）　さいがの戦闘は早送り！

え？酷い？　いやいや気づかないから皆ね

それではジム外へ

さ「なあ・・・何か飛ばされたような気がするんだが？」

ち「え？何が？」

フ「あーあ！二連敗するなんて　私もまだまだだね！」

な「でもでも　キュウコンとかギャロップとかもの凄く強いし！た
だこの二人がばかみたいに強いだけですから！」

あ&さ「「え？」」

その疑問はそのままにしたほうがいいですよ　ハイ

フ「次はヒノウジムだね」

ち「ヒウ姉さんがいる町か」

フ「ちひろちゃんでもヒウ姉さんは無理？あの〇〇は」

ち「無理　かなりな××じゃないと駄目だと思うよ」

え？一部が聞こえない？気のせいでしょう？

な「次もヒノウシテイだから・・・」

あ「またジム戦だね」

さ「・・・・・・・・・・」

と時間はたち

フ「それじゃあねー！」

4人「さよーならー！」

と4人はヒノウシテイに向かっていきました

『ヒノウシテイについた4人！なんと悪の組織が！？

荒れ狂うちひろ！あゆむのサンドとなみかのガーディの正体が？

次回「見つけてみよう！」お楽しみに！』

見つけてみよう！

ち「はい・・・そうです・・・そんな遠くないですし すぐにつきますよ 遅くなっても夜には・・・はい・・・では」

とちひろさんが電話を切りました

さ「誰に電話してたんだ？」

ち「ニガテな人」

さ「そうか・・・」

いやいやいや終わっちゃ駄目だってそれで！

な「えっと これとこれとこれ！」

あ「なみかー次も都市なんだから買い物はそこでしようよな？」

な「着いたとき夜になったらどーするのさー！だから今買うの！」

と4人はフレンドリイショップにいました

ち「なみか姉ちゃん これとこれと・・・これは？」

な「んーそこまではいらなかなあって」

さ「とゆうか何で俺はここにいるんだ？」

あ「ちひろに軽く脅されたからじゃない？」

ああなるほど だからいるんだね

な「これでいいかなっ！」

となみかさんがレジにいった

あ「やっと出発できるのか・・・」

さ「ああ・・・」

約2時間の買い物（の保護者？）お疲れ様です

（4番道路）

な「さてヒノウシティだっ！」

あ「ヒノウシティは第二の都市だよな ポケモン大好きクラブとか

テレビ局とかあるし」

さ「でもなんか裏話聞いたことあるぞ ヒノウシティには悪の組織の本拠地があるのかなんとか」

ち」まさか・・・ヒウ姉さんがいたらそんなやつ××に目覚めるよ」

とちひろさんが小声でそういいました

あ「何かいった？」ち「ううん」

そんな合間にヒノウシティにつく4人

ゝヒノウシティゝ

あ「あれ？」

な「え？」

さ「・・・」

三人はポカーンとしていた

都市なのに 人がいないから

あ「おかしいなあ・・・」

ち「・・・まさかっ！」

とちひろは走った 向かう先は駅だった

??「あー！ー！もう！あと少しだけ人がいたらっ！ラウでもつれてくる？でもあいつだって仕事はあるし・・・」

と一人の女の人が叫んでいた

ち「ヒウ姉さん！」

ヒ「・・・！？ちひろちゃん！」

と女の人がちひろを抱きついた

ち「ふぎゃっ！」

ヒ「最近会っていなかったからものすごくさびしかったのよお！ラウをいじめても楽しくないし！ってゆうかあいつ喜ぶだけだし！ちひろちゃんをこうやってするのが今の私の楽しみなのよ！」

と早口で同じ言葉を言っていた

あ「誰？」

な「え？もしかしてあの時入っていた○○なひと・・・？」

さ「かもな・・・」

ヒ「ってそんなことしてる場合じゃなかったわっ！ちひろちゃん！」
ち「は・・・はいっ！」

とちひろさんきをつけをしていた

ヒ「まずいことになっちゃたから　少し手伝ってくれる？」
ち「やっぱり？」

く聞

さてさてここから説明しよう

現在ヒノウシティは人質をつけての立てこもりが発生していた
やられたのは駅だった

条件をのめば人質は解放してやると

あ「その条件って？」

ヒ「サマンジャ洞窟の許可証」

な「え・・・どこ」

説明しよう　サマンジャ洞窟とはヒノウシティとブリッザシティの
中間に位置する（若干ブリッザより）洞窟で中の点検などはブリッ
ザシティのジムリーダーが許可証はヒノウシティのジムリーダーつ
まりヒウさんがやっているのだ

ヒ「つまりあいつらは　サマンジャ洞窟を動き回りたいわけなのよ」

さ「はあ・・・」

な「えっと　そのサマナジャ洞窟ってなんですか？」

ヒ「サマンジャ洞窟ね　詳しいことは知らないけど　神聖な場所ら
しいわ」

さ「らしいって・・・」

ヒ「私は興味ないしね　入ったこと無いもの」

まあ　許可証作るだけですからね

ヒ「もちろん私は許可証はわたさない　町の人も助けようとしてる
んだけど・・・戦力不足でね　困っていたのよ」

あ「それでちひろを・・・」

ヒ「そうゆうことよ」

ち「えっとその・・・ヒウ姉さん　その立てこもってるやつって誰
です？」

ヒ「α団とか名乗るやつらよ」

ち「a団・・・っ！」

ちひろは抑えきれないような感情を出しながら

ち「解りましたヒウ姉さん 具体的に私は何をすれば？」

ヒ「a団を誘導してほしいのよ 人質の周りにやつらが多くてね」

ち「解りました・・・突撃経路は？」

ヒ「どこからでもいいわ」

とちひろさんは

ち「レックっ！小さくなる！」

「レック！」

な&さ「ええええええええええっ！？」

ですよねー言いたいことはわかります

あ「わからない人になみかどうぞ」

な「図鑑？384 レックウザ てんくうポケモン 特性はエアロ

ック ホウエン地方にいるカイオーガ グラードンとならぶ古代ポ

ケモン はるか上空のオゾン層の中を飛んでいる そのためあまり

姿を見せない 能力としては伝説とあってすべて高いがこうげき

とくこうが一番すばらしい」

というわけなんです なんで持っているんでしょう？それは・

あ「才色兼備の完璧超人だからねー」

だそうです

さ「いや 質問してないのにそんなこというな エスパーか？お前

は」

あ「いやいや ナレーターさんの声が僕には聞こえたんだよ」

さ「この話は小説かアニメだったのか？」

ええ まさに

な「そんなことより 私達はどうするの？」

ヒ「もちろん 手伝ってもらわね♪ 少しでも戦力がほしいしね」

あ「何をやればいいんですか？」

ヒ「駅の従業員入り口を見張ってほしいの この際だから団員を
一人残らず刑務所（ヒウさんに××にされる場所）送りにしたいし

ね〜♪」

刑務所送り・・・ん？ なにか怖いものが見えた？ 気のせいでしょ？

さ「そこを見張っていればいいんだな」

ヒ「そうゆうこと そっち側が入り口だからよろしくね〜♪」

三人「はい」

（従業員出入り口前）

あ「っと ここかな？」

さ「そうだろ でっかくそう書いてるからな」

な「めだつねえ〜」

と三人が従業員出入り口までついたとき

「くそっ なんだあのガキ 次々に仲間を倒していったぜ」

「だからこの入り口から幹部の人に知らせるんだろう さすがに幹部相手じゃだめだって」

「幹部様は強いしなあ！ ケケッ 敗北する姿が目に見えるZ・・・ん？」

とα団らしきやつらが扉から出てきた

あ「見張っとくもんだねえ〜 ヌマクロー サンド」

さ「ハヤシガメ ズバット」

な「ネイちゃん！ デイちゃん！」

とポケモン達を出す三人 え？ いつの間にハヤシガメになったって？

ジム戦のときからですよ 聞いてない？ 言っていないもん

あ「ヌマクロー マッドショット！ サンド ころがる！」

さ「ハヤシガメ はっぱカッター！ ズバット つばさでうつ！」

な「ネイちゃん ねんりき！ デイちゃん ひのこ！」

と出てきたα団下っ端をやつつける

下？「ぐはっ！」

下？「こっちにも・・・だと？」

と倒れる ポケモンを出さすにかわいそうに・・・

あ「ん？ サンド どうしたの？」

「さん・・・」

とサンドからヒカリが発生して・・・サンドパンに進化した
さ「きちんと育ててたんだな」

あ「あたりまえだよー」

？「ほう そのサンドパンとガーディー・・・」

あ「誰だっ！」

とあゆむさんは入り口の逆のほうを振り向いた

？「いやいや 怪しいものではないのでね 今大変なことになって
いると聞いたから駆けつけてみただけの野次馬だよ」

「ぐるるるる」「さーんー」

と二匹が威嚇をしていた

な「ディちゃん？知っている人なの？」

「うおう！！」

？「だろうな 俺の読みが正しければそのガーディーは俺が持って
いたものだ」

な「なっ！お前がディちゃんをつ！」

あ「なみか 待って」

とあゆむがなみかを止める

あ「・・・僕のサンドパンを知っているようですが？」

？「元α団にいたときにさらったやつだ 抜けるときに野生に返し
てやったんだよ」

さ「傷ついてたのは・・・」

？「大方 知らないやつを他の野生ポケモンが攻撃したんだろう」

あ「元α団といいましたよね？ なぜ抜けたんです？」

？「あいつらの思想についていけねえんだよ 俺の考えとは違うか
らなっと話すぎたな そいつらかわいがってやれよ」

な「言われなくてもそうしますよーっだ！」

と謎の男が遠くなっていく

あ「あなたの名前はー！」

ジ「ひとまずジョーカーと名乗っておくぜ」

と謎の男 ジョーカーはいなくなった

さ「変な人だな」

な「素性を名乗ってないさいが君がゆうな」
たしかにねー

あ「そういえば あれからα団出てこないね」
な「ちーちゃんうまく言ってるのかなあ」

それでは舞台を変えましょう

（駅 内部）

「ぐはあっ！」

「がはっ！」

とα団がやられています

ち「あと どれくらい残っているかなあ？ うふふふ・あはははっ
！」

ちひろさんが壊れています

ち「つと 町の住人町の住人・・・よし落ち着いた しかし・・・
なあ・・・」

「いたぞ！ 侵入者だっ！」

とα団がまた来た

ち「どっちが侵入者だか・・・ ライ！ ラナ！」

「らいっ！」「とーりー」

とライチュウとトリトドン（色は青）が出てきた

ち「10万ボルト！ 泥爆弾！」

「ぎやあああああああ！！！」

とまたもけちらす

ち「むうう 直接入ったほうがいいかなあ？ でも目立ちすぎたら

人質が・・・」

いえ もう十分に目立ってますよ

「こっちです！ リーダー！」

「こっちか・・・ほら 歩けっ！」

ち「っ！？」

とα団が人質を連れてきた

「こんな子供にやられたのか？なさけねえな」

ち「誰もが弱いんじゃない 私が強すぎるだけなのよ」

「んー？お前どっかで見たことがあると思ったら・・・あの時
ドラピオンを殺したやつなんじゃねえの？」

ち「ッ！！」

とちひろさんが青ざめる

「ハハッ！やっぱりなあっ！さぞかわいそうになあ！あのドラピオンはよお！」

ち「・・・さい・・・」

「あっ！？」

ち「うるさいって言ってんだよ 下っ端があっ！」

「んだどお！？」

ち「ラル！レポート！！」

（ええ！）

といつの間にか サーナイトことラルが人質をレポートしていた
「なっ！？くそっ！！」

ち「とりあえず 目の前は完了っ」と

「くそっ！もうひとりつれてこーいっ！」

「ぐはっ！？」

「なんだ！？」

ヒ「残念でしたー☆すでに人質は取り返したのよー」

「くそっ！」

ち「おとなしく捕まりなよ 死にたくなければね」

「くう！！！！」

と人質事件は終わったのでした
（外）

あ「ふー 終わってよかったねー」

「さんっ！」

とサンドパンは走り出した

あ「ってどこ行くのーサンドパーン」

とあゆむは後を追うと・・・一人の少女が立っていた

「さん！」

？「ふえ！？」

と少女倒れる

あ「大丈夫！？」

「さんー♪」

とサンドパンじゃれています

？「もしかして サッチなの？ うわーい！もう会えないかとおもったよう！」

あ「ああ・・・元手持ちだったんだ それだつら進化させないほうがよかったね」

？「ううん！サッチがこんなにもかわいくなっただよ！むしろうれしいの！だからありがとう！」

あ「どういたしまして 僕の名前はあゆむ 君は？」

ア「アリネっていうの！」

あ「アリネちゃんね サンドパン・・・サッチだっけ？君のだったら返すよ」

ア「え？いいの？」

あ「うん サンドパンが望んでいるならね」

ア「サッチ・・・」

「さんっ！」

ア「ありがとう！お兄ちゃん！」

がたがたがた！！と音がした

ア「？もしかして最近見つけ子かな？」

とアリネちゃんはバックからモンスターボールを取り出した

あ「ソルロックなんてこちら辺では見ないね」

ア「そうなの？ お母さんからもらったボールがたまたま当たっちゃって捕まえたんだけど・・・そうだっ！サッチをここまで育ててくれたお礼にこのソルロックあげる！」

あ「いいのかい？」

とあゆむが聞く

ア「うん！ソルロックね お兄ちゃんのところに一緒にいたいみたいな」

あ「それじゃあ・・・交換かな？」

ア「だねっ！」

とポケモン交換 通信ではありません

その影で3人は

ち「お兄ちゃんと呼んでいいのはちひろだけだっ・・・」

さ「お前ら本当に兄妹か？」

な「ブラコンだからねえ」

ちひろさんはブラコン あゆむさんはシスコンです あ でもそんな重症なものではないですよ？一応言っておきますが

あ「やー おまたせー」

「そるー」

さ「おう あゆむ お前ジム戦やるんだろ」

あ「当たり前だよー」

さ「ヒウさんに聞いたたら 「自分がジムリーダーよ」あゆむ君とダブルできなさいなあ」 って言ってきたから・・・」

あ「？どうゆう意味？」

ち「ヒウ姉さんの戦い方式はダブルバトルだからだよ」

な「なんでも 挑戦者を一気に見たいときに便利だからだって」

いやいやいや それだけでは駄目だろう

ち「バトルの強さとかもあるけれど 他にも協調性が試されるの」

あ「へえー 今日はどう遅いし・・・明日挑戦しよう」

さ「おう」

（翌日）

え？だから早いと きにしたら負けだ

ヒ「うふっふふ ようやく来たわねえ」

「これよりヒノウジムジム戦を開始します 挑戦者の使用数はそれぞれ二体 ジムリーダーは三体となっています ジムリーダーが四

体倒したら挑戦者の負け 挑戦者が三体倒したら ジムリーダーの負けとなります 準備はいいでしょうか！」

あ「大丈夫です」

さ「(こくん)」

「それでは はじめっ！」

あ「ヌマクロー！」

さ「ハヤシガメ！」

ヒ「スバメっ！マントイン！」

と試合が始まっている 観客席では

な「あ 進化前 フレナさんが全部進化してたからこっちもって思っただけど・・・」

ち「いやいや なみかお姉ちゃん さすがに3体最終進化だったら強すぎでしょ」

な「いや そうだけどさ・・・」

ヒ「つばめがえし！つばさでうつ！」

とハヤシガメ集中攻撃

さ「くっ やっぱり・・・ハヤシガメ！かみつく！」

あ「ヌマクロー！とっしん！」

しかし当たらない

ヒ「残念 空飛ぶ相手はダメかしらねー♪」

あ「さいが 交代だ」

さ「おうっ！」

と二匹をもどすと

あ「ソルロック！」

さ「ズバット！」

の二匹を出す と・・・ズバットが光り始める

さ「ズバット・・・いやゴルバット！ちょうおんぱで相手の動きを封じるんだ！」

とゴルバットに進化して 技をだす

あ「動きが鈍ったらこっちのmondだよがんせきふうじ！」

「そーるー」

二匹に直撃した 起き上がったのはマンタインのみ

ヒ「うふふ 協調性はばつぐんね 最近出番がなくなって退屈してたけど大丈夫みたいよ？ トゲキッス！」

「とげっ！」

ち&な「最終進化あー！？」

ち「ヒウ姉さん ずるい！ 私るときはまだドケチックだったのにな！」

ヒ「うふふ あれから時はながれてるのよー」

あ「相手は強敵だね ソルロック！ 炎の渦！」

さ「ゴルバット！ エアカッター！」

と二匹に直撃 マンタインは倒れた

あ「後一匹！」

ヒ「うふふ 簡単にやらせはしないよお トゲキッス はどうだん！」

とソルロック直撃 そして倒れる

あ「お疲れ様 ソルロック・・・ヌマクロー！」

「ぬまっ！」

さ「あやしいひかりだっ！ ゴルバット！」

ヒ「混乱技二つも持っているなんて・・・」

あ「ヌマクロー！ みずのはどう！」

ヒ「なんでそんなの覚えてるのよーっ！？」

と観客席では

ち「うふふ 私が10個ほど持っていたのを渡したから・・・」

な「どこで手に入れたのよ・・・」

そしたらトゲキッスは倒れた！

「トゲキッス戦闘不能！ 勝者挑戦者！」

ヒ「あははー負けちゃったわー はい二人ともフライバッチよ」

あ&さ「ありがとうございます」

ち「おめでとーこれで三つだねー でもやっぱりヒウ姉さんはすご

いねーさすが「スカイガーディアン」！！」

ヒ「うふふゝそれほどでもないわゝ♪」

な「へ？フライガーディーってなに？」

あ「スカイガーディアンね ヒウさんの肩書きみたいなものだよ」
ヒ「一番最初に戦ったストさんは『岩石の男』フレナちゃんは『フ
アイヤーガール』私が『スカイガーディアン』ブリッザシテイにい
るジムリーダーが『トランスペアレんシースノウ』ラウが『グラウ
ンドガーディアン』アリッソジムリーダーは『鋼鉄の騎士』コノエ
ジムリーダーが『森の王者』ミシコナジムが『プラントプリンセス』
って言われてるわ 四天王は順番的に『エスパーパーフェクト』『
ウォーターダンス』『電気使いのお嬢様』『すべてを極めた男』
って言われててチャンピオンが『ゴーストジーニアス』って言われ
てるの」

あ チャンピオンはちひろさんですよ ゴーストってことは昔は使
えたんですね

な「へーヒウさん物知りー」

ヒ「うふふ それほどのことでも♪」

さ「次はブリッザシテイか」

あ「『トランスペアレんシースノウ』がいる町だね」

ヒ「今日はまだ早いからね それほど遠くないから出発しなさんな」
4人「ありがとうございますー！」

と4人が見えなくなった後ヒウさんはジムに戻り 自分の場所にあ
るパソコンを開いた 開いたときこんな文字が書かれていた

『せんごく☆ジムリーダー四天王チャット☆』

一瞬ひきました いや正直に

ヒウさんは入室をクリックしていた

※ここからチャットの内容です

ヒウさん

sky…今日は挑戦者きたゝ☆ 負けちゃったなりゝ♪

Ground…ここでもいいから罵って！

Plant…あらあら ヒウさんが負けるなんて・・・

Snow…まずGround!やるんだったら現実でしなさい!Pl
lant!現実名をださない!

フレンさん
Flame…今日もつつこんでるねー

ストさん
Rock…guhahahahaha kir eg am o d o t t
er an n wa -

Steel…ローマ字・・・直してない・・・
Insect…虫ポケモンかわいいよ ハアハア

Snow…Insect!変体発言をやめる!

sky…挑戦してきたのはあゆむとさいがつて子 そうそうa団と
かいうやつらが立てこもっちゃって大変だったけどちひろちゃん
のおかげで解決したよー

Snow…ふーん・・・それじゃ 次は俺かってそっちを先にいえよ
っ!?

Plant…あら ノリ突っ込み

Electricity…へーこんどはSnowの町か大丈夫かな?

Snow…どうゆういみだ?

Water…見つけれられるかじゃない(笑)

Esper…こらこら二人とも そんなにいいじめないの たとえ事
実でも

Grapple…ひどいな お前は

Rock…Grapple ma ta ta ta ka u b e s i !

Steel…直してない・・・

Rock…dou yar un o ka i ma da ni wa ka ra
n no da -

Flame…左上の半角/全角のキーを押すといいですよ

Rock…おお!直ったぞ!

Insect…ちよつと今から 愛でてくる

Ground…蹴って殴って罵ってえゝ

Snow…いいかげんにしろお前ら二人

※終了

『無事にヒノウジムを突破したさいが あゆむ！

な なんとここですいがの素性がわかつちやうぞ！？

さてチャットで「見つけられるか」といわれた『トランスペアレン

シースノウ』の正体とは！次回 「知ってみよう！」 お楽しみに！』

知ってみよう！

一文で終わらす前回のあらすじ　4人はヒノウシティで事件を解決した。

「ヒノウシティ」

？「おやおやおやあ！？」

とブリッザシティに行く道でとめられた4人

ち「誰？」

ちひろさんも知らないようである

？「君達　ポケモンをもっているようだねー　みしてみして！」

とポケモンを勝手に出す謎の人

ち「レック　小さくなるね」

「れっく！」

とうぜんに　こうしなきゃいけない

？「ほほーう！スバラシイ！君達をポケモン大好きクラブ名誉会員に認定するー！」

4人「「「へ？」「」「」」

「ポケモン☆大好き☆クラブ」

え？星が書いてある？　きにしたら負けだ

会長「ここが　ポケモン大好きクラブであーる！」

あ「わーすごいねー（棒読み）」

会長「ふふっふ　もっとほめるのだー」

な「すごいすごい（棒読み）」

会長「うへへっへ！」

さ&ち「「・・・」」

会長「ってそこ！ほめんかい！」

さ「別に　これが特別ってわけじゃねーし」

ち「ここよりすごいの見てるし？」

会長「うーん？君君」

と通りすがった人に手紙をわたす

会長「これをレイシティのマビタキさんに届けてくれる？」

4人「あ ポケモンスター」

会長「そしてわしこそが！ポケモンクラブの会長である！」

と4人はすでにいなかった

あ「やっと開放されたねー」

な「長い話はいやー」

ち「・・・眠いなあ・・・」

さ「やっとブリッザシティに向かえるか・・・」

外にいました

会長「話をきかんかい！」

とポケモンクラブ内にはその言葉が響いたという

（五番道路）

あ「そういえば この途中にあるんだよね」

な「サマナジャ洞窟？」

ち「サマンジャ洞窟ね」

さ「そういえばヒノウシティとブリッザシティのはざまにあるんだ

っけか」

な「それじゃ！みにいこー！」

と4人は走った

（サマンジャ洞窟 入り口）

あ「普通の洞窟だね」

さ「入り口だけ見て決めるな」

？「あらあ？人がいたわあ」

さ「！その声！」

？「あらあら久しぶりね さいが」

な「さいが君のお母さん？」

ち「なんでα団の服きてるのかなあ？」

振り向いた先にいたのは女の人 さいがさんのお知り合いみたいです

さ「リンカ・・・さん・・・」

名前でましたねー

リ「あらあらそれが育ての親に対する態度お？」

さ「リンカさん二つ質問がある・・・一つ目　なんでα団の服をきているんだ？」

リ「どこでα団を知ったかしらねえ？・・・まあいいわ　まっ簡単な話よ　私はα団員だったってこと」

さ「二つ目・・・」

とさいがは深呼吸をしていった

さ「俺の本当の両親はどこにいる!？」

リ「あらあら　いったでしょう？あなたは捨てられたって」

さ「違う！俺なりに調べてはみたその情報の中で小さい頃の俺らしきものがみえたんだ」

リ「ふう・・・いろいろ困ったものねえ・・・いいわすべてを話しましょう」

とリンカさんはこういった

リ「さいが　あなたは10年くらい前・・・α団員によってさらわれたわ」

と四人はびっくりする

リ「さらった理由はただひとつ　あなたをα団員として育てれば立派な戦力になるからね　だけど・・・育てる途中で大きな事故にあった」

ち「ハウエン地方の古代ポケモン事件・・・」

リ「そうよー　この地方も少なからず影響はあった　さいがを預かっていた施設は壊れた　それからどこか目立たなくて海に近い町ではないところに育てていた・・・私はそのときにさいがを育てるよう言われた・・・それだけのこと・・・だからねさいが　あなたの両親がどこにいて　あなたをさらったのはどこでってことは私には解らないわ　もう少し上層部の人間なら知っているかもだけど」

さ「そん・・・な・・・」

リ「残念だったわね　さてと　これ以上ここにおいても無駄骨だわ

私は基地に戻る それじゃあね」

とリンカさんはいなくなった

さ「くそっ・・・くそっ！」

泣いていた近くにポケモンがいた

「ろー！」

さ「ん・・・？もしかして！リンカさんのロトムか！？」

「ろー！」

さ「なんで・・・リンカさんが・・・」

「ろー！」

ち「さいが兄ちゃんの傍にいたくて勝手にこっちにきたか・・・」

あ「リンカさんがプレゼントしたのかもね」

さ「リンカ・・・さん・・・」

とさいがは涙をふくという

さ「俺のたびの目的は三つあった・・・一つはリンカさんを探すこと

二つ目は本当の両親を探すこと 最後はポケモンバトルを強くなること 俺はその目的を果たすために旅をしていた・・・最初に会ったミレッドタウン・・・そこが俺の出発地点・・・育った場所なんだよ」

あ「僕達のことを知っていたのは 情報をあつめるときに知ったってところかな？」

さ「ああ いろんな人をしてっているうちに・・・な・・・・・・先に進むぞ・・・まだ目的はひとつしか叶ってないからな」

な「ツンデレっていうの？あれ」

ち「ちがうちがう」

とちひろが言うと

あ「さいがはツンとかないからあれはだたのテレ隠しなんだよ」

さ「さっさと行くぞ・・・」

とさいがのほほが赤くなっていた

三人「はい」

と4人はブリッザシティについたのである

「ブリッザシティ」

マ「ちひろさん！」

ち「あれー？マリさん　なんでー？」

マ「ちひろさんとあゆむさんの両親から預かり物をといってもあゆむさんだけなんですけどね」

あ「んー？父さんと母さんから？」

マ「はい　これですよ」

とマリさんが出したのはひとつのモンスターボール　もちろん中にはポケモンが

あ「あ　タツベイだ」

さ「なぜ　タツベイ・・・」

ち「お父さんとお母さんはドラゴンタイプの使い手だから・・・」
な「ドラゴンタイプじゃないのにギャラドスとかリザードンとかいたりしてね！まあ　ドラゴンって言われてるやつなんだけど・・・」

あ「手紙がついてる・・・」

『あゆむとちひろへ』

元気にしてるでしょうか　お母さんはいつでも元気です

旅立ってから一週間が過ぎました　あゆむの手持ちが火力不足ではないかと思い　このタツベイを送ります　あともうすこしでコモルに進化するかもしれないから気をつけてね！　ちひろは・・・大丈夫よね？　ゴースト嫌いになって大丈夫？　ユッキーと会えなくて大丈夫？　洞窟で泣いたりしてない？　お母さんはそこが心配です　ちひろといえはお父さんが帰ってきましたよ　ちひろと会ったら？　といたら「ちひろの殺意の気配があるから会ったら殺されるかもなww」と言っていたので書いておきます　また出張に出たのでしばらく会えなくなりますね　今度はきちんと引き止めておくのかならず帰ってくるように！　今はブリッザシティあたりですかね？　きちんとジム制覇して　リーグチャンピオンになりなさい　お母さんより　PS　そういえばお向かいのキシル君が旅に出たそうなので会ったら覚悟するように！』

と書いてありました

な「あゆむとちーちゃんのお母さんってこれだけみるといい母親だよね」

あ「キシルが旅立った・・・」

ち「(怒)」

さ「エスパーなのだろうか」

マ「たしかに送りましたそれでは」

とマリさんいなくなる 早い

な「キシル君が旅立ったのは知りたくなかったね」

ち「くそっ・・・あのやろう・・・」

さ「誰なんだ？そのキシルってやつ」

あ「一言で言う・・・」

と三人は声をそろえてこういった

な&あ&ち「「ナルシスト」」

さ「なるほどな・・・」

となっとかするさいが

ち「・・・まあキシルのことは置いとくとして ジム戦ジム戦」

あ「そうだった えっとジムは・・・」

さ「ってちひろは一回戦ったことあるんだろ？」

ち「あるけど・・・ブリッザジムは建物が無いから 人を探すのに

一苦労したんだよ また本人自体も影うすいから」

？「影薄いつていうなー」

さ「つまりその場であつたらすぐ戦闘みたいなものか？」

ち「そうだよー」

？「無視するなよお前らー」

な「となると この広い町の中 ずっと探さないといけないのね・・・」

・

？「いや 今探している相手はここにいるぞー」

あ「早く見つけるといいなあ・・・」

？「ええい！お前らこの俺がここにいるのに無視すんなあ！」

四人「「「!?!?!?」」」」

とびつくりした四人 さっきからいたのに・

ち「うわー ビックリしたー ザードさん影薄いから 近くにいる
も気づかないんだもの」

ザ「影薄いゆうな!」

あ「・・・えっと・・・ブリッザジムリーダー 『トランスペ
レンシースノウ』の人ですか?」

ザ「まさしく 俺がブリッザジム ジムリーダー 『トランスペ
レンシースノウ』のザードだ えっとあゆむ君とさいが君」

あ&さ「「!?!?」」

な「なんで二人の名前を?」

ザ「ジムリーダーの裏情報網で知ったんだよ」

ち「そういえば 私ときもそうだったような・・・」

ザ「ストさんとフレナはあまり書き込まないけどヒウさんはしょっ
ちゅう書くからなっかっていっても名前だけだが」

あ「へー」

ちなみに裏情報網ってあのチャットですよ

ザ「ジム戦だったな どっちからやる?」

あ&さ「僕「俺!!!」」

と息の合った二人 デジャブを感じます

あ「・・・今回はさいがに譲るよ アスナジムでは僕が先だった
し」

さ「悪いな・・・」

と先に勝負するさいが

ち「それじゃ 私が審判するね これよりブリッザジム ジム戦を
開始します 両方準備はよろしいですか!」

さ「大丈夫だ」

ザ「OK」

ち「では・・・はじめ!」

さ「ゴルバット!」

ザ「オニゴーリ！」

とポケモンを出す二人

あ「オニゴーリってことはエキスパートは氷か・・・勝てるかなあ？」

な「それってあゆむが？さいが君が？」

あ「両方」

さ「ゴルバット！エアカッター！」

ザ「オニゴーリ！こごえる風！」

とダメージを追う両方のポケモン

さ（タイプの不利はこっちが不利・・・だが！）「ゴルバット！はがねのつばさ！」

ザ「そんな技覚えてるのかよー オニゴーリまもる！」

とはがねのつばさはあたらない

さ「もういっかいだ！」

ザ「守れー！」

だがはがねのつばさは当たるとオニゴーリは倒れる

ザ「デリバード！」

さ「もどれ ゴルバット・・・ロトム！でんげきは！」

「ろとー」

ザ「効果はまあまあかな・・・デリバード！プレゼント！」

さ「残念だったな・・・ロトムは電気 ゴーストタイプ！ノーマル技は効かない！」

あ「ん・・・？そうだったけ・・・ってちひろ！」

ち「え・・・？何が？」

と震え声でそういった

な「震えてるけど・・・大丈夫？」

ち「大丈夫も何も・・・審判しなきゃいけないしね・・・すごいぎりぎりなんだけど・・・」

とちひろさんはそういった

さ「・・・ロトム！あやしい風！」

「ろと！」

とデリバードは倒れる

ザ「あちゃー こんな早くに追い詰められるとは イノムー！こおりのつぶて！」

「ろと！？」

さ「ロトム！」

瀕死ぎりぎりでした

さ「交代だ・・・ハヤシガメ！！はっばカッター！」
と攻撃するさいが

あ「氷には草の体制はないから効果はばつぐんだね」
な「一撃でももらったらアウトだけどね」

ザ「こおりのつぶてだイノムー！」

さ「はっばカッター！」

と両者とも攻撃が当たるとどちらも倒れた

ち「イノムー ハヤシガメ共に戦闘不能！ジムリーダーに控えのポケモンはいないので勝者 挑戦者！」

さ「よしっ！」

あ「おめでとー」

な「おめでとー！！！」

と祝福する二人

ザ「いやーおめでどう これがアイスバッチだよまさかあんなにストレートに負けるとはなあ・・・っと次はあゆむ君だね？少し時間をくれないかな？ ポケモン達を回復してくるから」

とザードさんはポケモンセンターに走っていった

あ「いやあの 明日でも・・・ってはやっ！」

ち「大丈夫だよ ザードさんのポケモンタフな上に負けず嫌いだから 気をつけてねお兄ちゃん」

な「さっき以上の勝負になりそうだね・・・」

さ「最初でよかった・・・」

あ「・・・・勝てるかなあ・・・」

とザードさんがポケモンセンターから帰ってきてから
ザ「さあ！勝負だよ！」

（数分後）

ち「デリバード戦闘不能！よって勝者 挑戦者！」

あ「ふーぎりぎりだ・・・ありがとうね タツベイ」

「ベーい」

とザードさんはこういった

ザ「ああ・・・強いとは解っていてもこんになにあっさり負けると
はなあ・・・っとはいアイスバッチ」

あ「ありがとうございます」

ザ「これで四つ目か 次はエニビレッジだね」

ち「エニジムかぁ・・・うーん・・・」

ザ「ラウがいやなのはわかるけど きちんと仕事はしてるからさ
ゆるしてくれよ」

ち「ラウさんはまだいいです ヒウ姉さんもいいです 一番いやな
のはコノエジムの・・・」

ザ「あー あいつか たしかに変態だがあいつもきちんと仕事して
るんだ ゆるしてやってくれ」

ち「どうせだったら裏情報網で教えてあげてください てか言って
ください」

ザ「聞かないんだよ ラウとあいつはさ」

と話の進む二人 とそこに

？「あーらー？ちゃんと見つかったのねー よかったー」

ザ「お前 ウミ・・・どうゆう意味だ？」

ウ「見つけられたかってことじゃないのー（笑）」

あ「誰だろう・・・？」

ウ「初めましてー あゆむ君にさいが君になみかちゃん
な「なんで・・・？」

ウ「ジムリーダーの裏情報網に顔出してるからよー」
さ「ということはジムリーダー？」

ウ「いいえ？ 私は四天王の一人『ウォーターダンサー』のウミよ
今回は定期公演とザードのところがジム戦っていうから来てみたの
よ」

な「定期公演？ ってなにかやってるんですか？」

ウ「ダンサーなのよ 四天王のほかにな 私踊ることが大好きだからね 見ていく？」

3人「「はい！！」」

ウ「でー・・・？ そこに隠れたつもりの 女の子はなにをしてるの
かなあ？」

ち「えー・・・？ 私あなたのこと知りませんよー」

と振るえ声で言う ちひろさん

ウ「嘘いうな！ 忘れたとは言わせないからね！」

ち「いやだー！ー！！ 放してー！ー！！ あの公演にはー行きたくないのー！！！」

ウ「うふふ 逃がさないからねー あの監督にあんたを連れてくる
よう言われてるからねー」

ち「放してー！！！」

とちひろの声がブリッザシティ中に響いたという

ザ「さてと 俺は家にでも帰るか」

と帰宅 そのあとパソコンを開き ある場所へつなぐ

『せんごく☆ジムリーダー四天王チャット☆』

またですか

※ここからチャットの内容です

ザードさん

Snow…skyが戦った少年二人と戦ったよ 強いねあの二人

ヒウさん

sky…でしょー？

Plant…あらあら ザードさんもやられましたか

Ground…罵りがたりないよう！

Snow…Plant・・・お前毎回一回は現実名だしてないか？

フレナさん

Flame…Plantさんは天然だからね

Plant…それを聞くと少しむっときます・・・

Steel…今度は・・・Groundのどこ・・・

Insect…うへへえ 虫ポケモンかわいいぜえ

Snow…やめろ Insect ちひろが嫌がってだぞ？

sky…仕方ないじゃないの この変体は今に始まったことじゃないんだから

Ground…うーん次は僕のところかぁ・・・

Esper…あ 日本語しゃべってる

Electricity…Esper 日本語はしゃべってたわよ？

Grapple…突っ込むなElectricity こいつはこうだから

Ground…そういえばRockさんとWaterさんは？

sky…Rockさんはまだジム Waterは定期公演だかなにかGround…へー・・・そういえばSnowさん 挑戦者にさいが

って名前があるんだよね？

Snow…ああ そうだが？

Ground…うーん・・・どこかで聞いた名前なんだよなぁ・・・

sky…あら？やっぱり まさかとは思って言っではなかったけど

Ground…本人みたらわかるかな？ とりあえず4人が到着するまで待ってみるよ

※終了

『ブリッザシティを越えて 次に行くのはエニビレッジ ここでさいがの過去が？解るかも？ エニジム ジムリーダーウとはいったいどうゆうひとか！久しぶりの人たちもでるぞ！次回「再会してみよう！」お楽しみに！』

再会してみよう！

「あるポケモンセンターで」

な「お父さん！どう？」

「あーはいはい　なみかに言われた通りに作っておいたよ　まったく作るのはお父さんじゃなくて　オーキド博士なんだよ？無理をさせないようにね？」

な「はーい　ごめんなさーい」

となみかさんがお父さんと話しています

「そういえば　なみか　お前海を渡る手段もっているのか？」

な「・・・ちーちゃんがなんとかしてくれるかなあ・・・って」

「ちひろちゃんは大勢乗れるようなポケモンは手持ちに無いはずだぞ？・・・とりあえず一緒にポケモン送っておくから　ネイちゃんをお願い」

な「はーい！」

と電話の電源を切る　となみかは

な「ネイちゃん！お父さんのところにテレポートね！とりあえず私達は先に進んじゃうから荷物受け取ったらまたここにテレポートして私達の後についてきてね！」

「ねー」

とネイちゃんがいなくなった否テレポートした

な「よしっ！おまたせー！あゆむ！ちーちゃん！さいがくん！」

ち「それじゃー出発だあー！」

「六番道路」

な「昨日は盛り上がったね！」

あ「ウミさんのダンスコンサート」

さ「・・・結局　監督にあえたのか？」

ち「ふっふふ　簡単に見つかるちひろではないのだよー　ギリギリのところで逃げた！そして一番の特等席でコンサート見た！」

あ「どこに？」

ち「ステージライトの上」

な「どうやって行っただの！？」

よい子はマネしないでね！ちひろさんだから出来るんだからね！

あ「しかし　ザードさんでぎりぎりとなると次から作戦考えないと
なあ・・・」

ち「躓いてたらこれからのジムリーダー倒せないぞ！」

さ「お前はザードさん相手に苦戦しなかったのか？」

ち「うふふ聞いて驚け！ちひろちゃんはワッコー一匹で倒したのだ
！」

な「ありえないから！！」

ち「不可能じゃないんだよ！まず素早さを最大限に高めた草タイプ
を用意します　一番最初に眠り粉かキノコの胞子！そのあと宿木の
種！あとは半減にならないものをひたすら打つだけ！ちなみにワッ
コーは剣の舞を一回やってから恩返しをひたすら当てたよ」

実際には出来ないからね！ちひろさんだから出来るんだからね！

な「ちーちゃん　ちーちゃん　次のジムリーダーってどんな人？」

ち「そうだなあ・・・ヒウ姉さんと真逆の人」

さ「真人間ってことか？」

ち「まっさかーラウさんはねえー」

とちひろさんはこういった

ち「○○ならぬ××のひとなんだよー」

冷たい風がふいた

あ「もうすぐエニビレッジか」

な「ねえ！？無視していいの！？」

さ「どんな町なんだろうな？」

「ねー」

とネイちゃんが飛んでくる

な「ネイちゃん！こんなに早くついたんだ！お疲れ様！」

「ねー」

な「うん！えっとP・・・はっ！ダメだよなみか！ここで言ったらダメなんだよ！」

ち「エニビレッジだよ」

「やあやあ！四人共！ようこそエニビレッジへ！」

「ここはセンゴク地方で唯一の村としてあるところなんだよ!」

ラウ「ごめんごめん！僕はラウ！エニジム
ジムリーダーなんだよ

と噂のラウさんが登場した

「君があゆむ君彼女がなみかちゃん、で君がさいが君だね！そして久しぶりだねーちひぐはあっ！」

ち「ええい！近寄るなあ！」

とラウさんが興奮していた

「(こくり)」

「ヒウちゃああん！もつと言ってええええええ！！」

とヒウさんとフレナさんがいた

メ 「ちひろ・ ・ ・ ひさし・ ・ ・ ぶり・ ・ ・ 」

75

フ「ラウさんがね　もしかしたら感動の再会かも？って言ってたの
集まれる人集合って　これだけなんだけどね」

ヒ「ストさん　ザード　ツリーと四天王は仕事で忙しい　セクトは
いきたといっていたがツリーがいないので却下よってこの4人」
とヒウさんが言っていた

ラ「そうそう・・・さいが君　たぶんだけど・・・君が喜ぶところに
連れて行くよ　ついて来て」

とラウさんがそういうとでかい家についた

ラ「ここだよ　入ってみな？」

さ「え？ああ・・・」

とさいが　がドアを開けると

「「さいが！！」」

と二つの声がして　さいがを抱いた

「よかった！生きていてよかった！」

さ「え？・・・？」

さいがは困惑していた　まあ察した人も多いでしょう　さいがの両
親である

ち「おお！感動の再会だね」

あ「これで　さいがの旅の目的二つ目達成だね」

とあゆむが言う

「あゆむに・・・ちひろか？」

と声がする　二人は振り向くと同時に声をあげた

あ&ち「「お父さん！！」」

と同時にちひろさんは走り出した

ち「こーこおであったか百年目えー！！この恨みはらさいでかー！
！」

ととび蹴りが炸裂しようとしたが　ぎりぎりではけて逃げた

「ああ　運がないなあ　カイリュウ空え逃げるぞ」

とあゆむちひろの父親は風のように来て風のようにいなくなった
な「台無しだなあ・・・」

となみかがつぶやいた

数十分後　ようやく家の前で泣いていた三人が家の中へ入ったのでジムリーダー4人とあゆむ　なみか　ちひろさんも家の中へ入った
「さいがに再会できて本当にうれしかったわ　ありがとう」

ち「ねえねえ　なみか姉ちゃん」

な「なあに？　ちーちゃん」

ち「見て　さいが兄ちゃんのあの笑顔！」

な「そうだねえ・・ムカつくぐらいの笑顔だねえ」

ち「さいが兄ちゃんが寂しそうだったから　あれをプレゼントにするのにさあ！　意味ないよね」

な「まあまあ　祝いとしていいんじゃないの？」

とちひろさんとなみかさんが話していました

あ「何やってるの？　二人とも」

ち「教えないよ　すぐわかるからねっ！」

な「うん！　はい　さいがくん！」

となみかさんは小包をさいがさんに渡す

さ「え？」

ち「本当はー悲しんでるさいが兄ちゃんに渡そうって計画してたんだけど　こうなったからね　親と会えましたね祝い」

な「中身はね！　ポケモン図鑑なんだよ！　私達と一緒に旅に出て一人だけ持っていないからねって　お父さんに無理って頼んでもらったの」
さ「・・・・・ありがとう・・・」

ラ「今日はジム戦とか考えずに　親子水入らずでいてね！　さいが君！　で？　君はどうする？」

とあゆむに聞くラウさん

あ「やりたいです！　ジム戦を！」

ラ「OK　ちひろちゃん　僕は先に行って準備していくから案内よろしくねー」

ち「はいはい」

フ「ジム戦かあ！　ワクワクするね！」

ヒ「たしかに 私たち自身他のジムリーダーのジムを見ることが少ないからね」

メ「・・・・（こくり）」

フ「私見ますけど ヒウさんとメタルさんは？」

ヒ「もちろん 行くわ」

メ「・・・・悩んで・・・・いる・・・・ほかの・・・・ジムリー・・・・ダ
ー・・・・のしあ・・・・いは・・・・みた・・・・いけど・・・・つ・・・・
ぎ・・・・は・・・・ぼくの・・・・ジム・・・・だから・・・・相手の・・・・
ポケモン・・・・わか・・・・ちゃう・・・・」

ち「なるほどですね」

とちひさんが言うのと メタルさんはこういった

メ「まあ・・・・しって・・・・いても・・・・せん・・・・じゅつ・・・・も・・・・
ポケモン・・・・も・・・・かわらな・・・・い・・・・」

ヒ「なら 見なさいよ てゆうか見れ」

メ「わか・・・・った・・・・」

ち「それじゃ エニジムにいつこうか・・・・はあ・・・・」

とちひろさんがため息をつく

な「どうしたの？」

ち「あのね・・・・一番いきたくないジムってエニジムなんだ・・・・
一回トラウマになって・・・・」

ヒ「ああ ラウはセクトと一緒にジムに仕掛けをするタイプだから
ね」

ち「セクトさんはいいんですよ！なんなの！？あの仕掛け！あああ
あああ思い出しただけでも嫌だなあ・・・・」

とちひろさんがとぼとぼと歩く

ち「とりあえず行きましょう ラウさん待っているから」

（エニジム前）

ち「きたか・・・・」

とちひろさんは深呼吸する

ち「いざ オープン！」

とドアを開けるとそこには」

「おかえr」

パタンとドアを閉める

ち「・・・」

な「・・・えっと・・・」

あ「・・・」

三人は無言だった

フ「見えました？」

ヒ「私は見えたわ」

メ「・・・メイド・・・」

ち「メイド喫茶みたいなやつなんていない！いざオープン！」

「おかえりなさいませ t」

ばたんとまた閉めた

ち「私のところにいるメイドは偉い子なんだ！あの人ほどいいメイドはいないんだあ！」

な「ちーちゃんメイド付の家もってたの！？」

あ「あれ？なみかも行ったことなかったけ？・・・でもそのとき

ってメイドさんいないときだっけ？でも最初からいたような？」

ち「もう一回 オープン！」

「おかえりなさいませ 挑戦者様」

メイドがいました なぜ？

「このジムは仕掛けを解いて ジムリーダーに挑戦するタイプのジムです 観客席からの協力は出来ません よろしいでしょうか？」

あ「はい」

「それでは お進みください お連れの方々は観客席にご案内します」

フ「はい♪」

なぜかノリノリのフレナさんだった

くラウさんのところへ

ラ「よく切り抜けられたね まずここまでで来る人が減っちゃうん

だよー」

あ「たしかに・・・あれは難しいですね　まあ・・・僕はそんなに難しくなかったですが」

「それではー エニジムジム戦を開始します　ラウ様　挑戦者様準備はよろしいですか？」

ラ「大丈夫だよー」

あ「大丈夫です」

「それでは　はじめてください♪」

ラ「ダクトリオ！」

あ「タツベイ！」

とバトルが始まった

ち「なみか姉ちゃん！」

な「うーはいはい・・・」

図鑑？135　ダクトリオ　もぐらポケモン　ディグダの進化系

特性はすながくれ又はありじごく　すごい力の持ち主でどんなに硬い地面でも地下100キロまで　掘り進む　また三つの頭が互い違いに動くのは周りの土をやわらかくするため　能力としては地面タイプでありながらすばやさが高いが防御と特攻が低い」

ジム三人「「おー（パチパチ）」」

ち「タツベイにしたのは間違いではないけどねー」

な「あ」

となみかさんが言う　と　タツベイが光だしコモルーに進化した

あ「まもる！」

ラ「マグニチュード！」

あ「コモルー交代！ヌマクロー！」

ラ「マグニチュード・・・7！」

と地面がゆれる

あ「変えててよかったー　ヌマクロー！みずのはどう！」

「ぬまー」

とダクトリオに当たる

ラ「ふいーぎりぎりー すごいねー ダクトリオ！きりさく！」

あ「もう一回！みずのはどう！」

とダクトリオが倒れる

ラ「お疲れ様・・・サンドパン！穴を掘る！」

「さん！」

あ「ヌマクロー 攻撃を準備できる形にいるんだ！」

「ぬま！」

ラ「いけ サンドパン！」

「さん！」

と後ろからサンドパンが出る

「ぬま！」

と後ろからあたる

あ「ぎりぎり・・・交代！ソルロック！炎の渦！」

「そーるー」

ラ「おおっと ふゆうか・・・サンドパン！ブレイズクロー！」

「さんっ！」

あ「ソルロック！ロックカット！そのあと岩石ふうじ！」

「そるー」

と急所にあたる

ラ「あちゃーサンドパン！きりさく」

あ「サイコウェーブ！」

とサンドパン ソルロック共に当たる

「さーんー」

サンドパンが倒れた

あ「ソルロック大丈夫かい？」

「そる！」

ラ「もう2匹か・・・それじゃ こっちをだそっかなヒポポタス
！」

ち「ヒポポタスお願いするね」
な「うー・・・」

？449 ヒポポタス カバポケモン ガバルドンの進化前 特性はすなおこし すなでからだをおおうことで ばい菌から身を守っている また砂漠の砂の中を移動する 能力としては HP こうげき ぼうぎょと高い だがすばやさが低いのが難点」

なわけジム内はすなあらしです

あ「やっぱ屋内でも有効かー」

ラ「僕は自分に砂嵐が当たるのがすきなんだ！快感だなあ♪」

あ「××・・・」

と飽きたように言う

ラ「さっ 行くよ ヒポポタス！かみつく！」

「ひぽっ！」

あ「ソロック！炎の渦！」

「そーるー」

と技がどちらとも当たった

「そーるー」

ソルロックが倒れた

あ「お疲れ様・・・ヌマクロー！みずのはどう！」

ラ「ヒポポタス！穴を掘る！」

あ「それなら・・・じしん！！」

とジムがゆれる

フ「じしんは穴を掘るをしているポケモンに大ダメージをする技・・・」

・

ヒ「いくら地面タイプといえど これは結構きついわね」

メ「・・・（こくん）」

とジムリーダーたちがそういていた

ラ「これくらいで倒れる・・・僕のポケモンじゃないよ！ヒポポタ

ス！とっしん！」

「ひぽっ！」

あ「っ！ヌマクロー！みずのはどう！」

「ぬまっ！」

とみずのはどうが当たるとヒポポタスは倒れた

ラ「わっ いい判断だね さてともう最後の一匹か早いなーさあ出番だよ！ヌオー！」

あ「うわー・・・最後にしてすごいのでたー」

ラ「あはは 大変だろうけどがんばってねー ヌオー！マッドショット！」

あ「ヌマクロー！こっちもだよ そのあとに水鉄砲！」

「ぬまー！」

とヌオーの傷がなくなった

あ「あーやっぱり？いやなのきたなあ・・・」

ラ「まあ大爆発とかでくると 別のほうがいいけどこっちのほうが便利だからね」

な「あ 特性がちよすいなんだね」

ヒ「じめんで電気無効 ちよすいで水無効でチートかつ！」

フ「それでリンドの実（※こうかばつぐんの草技のダメージを半分にする）とかもってたらいやだよねえ」

メ「ヌマクロー・・・げきりゅう・・・無意味・・・」

とメタルさんが言う

ち「たしかに 水技をもっていたらちよすいで回復だし・・・」

あ「ヌマクロー！がまん！」

「ぬまー！」

な「悪くはない判断だけど・・・」

となみかさんが言う

ラ「ヌオー！ふぶき！」

とヌマクローに当たる

あ「いまだ！いっけえー！」

「ぬまー！」

とがまんが解かれた ヌオーに直撃だがあまりダメージを負っていなさそう

ラ「残念だったね・・・じしん！」

とヌマクローが倒れた

ラ「これで一対一！」

フ「あちゃー やばいねえ」

ヒ「あゆむ君 負けちゃうのかしら？」

な「大丈夫ですよ あゆむは ね？ちーちゃん」

ち「え？何が？」

な「信じてあげて！お願いだから信じてあげて！」

ち「信じるも何も 私最初から勝つて知ってるもの ここで負けたらレックで破壊光線だから」

メ「ひどい・・・ね・・・？」

な「ひどいも・・・死にますって・・・」

と雑談をしていると コモルーVSヌオー戦は始まっていた

ラ「なかなか あたらないねー」

あ「当たったら倒れますもん そうそうに当たらないようにしてるんです コモルー！ずつき！」

ラ「じしん！」

あ「コモルーまもるっ！よけてずつき！」

と攻撃が当たる

ラ「やるねえー でもよけれかな？ふぶき！！」

あ「まもるっ！！」

激しい戦闘が起こる

あ「コモルー！ひのこ！」

ラ「ヌオー！マッドショット！」

まだまだつづく戦闘

ラ「ヌオー！じしん！」

とコモルーに直撃 しかしまだ立っている

ラ「な・・・体力はもう少ないはずなのに・・・！」

あ「それなら・・・自分のポケモンよく見てください」

ラ「まさかっ！」

とラウさんがヌオーを見ると じりじりと弱っていくところが見えた

ヒ「ほう やけどか」

フ「つまりあの火の粉はやけどにするためだったんだね」

メ「・・・運強い・・・」

そしてあゆむはこう言う

あ「いけえ！コモロー！！ずつき！」

と攻撃が当たり ヌオーが倒れる

「ヌオー戦闘不能です よって勝者挑戦者様！」

な「おめでとー！！」

ち「わー（ぱちぱち）」

ラ「負けちゃったなあ はいグラウンドバッチだよこれで5個目だね！」

あ「なんか運要素が高い戦闘になりましたが・・・あ そうだ恒例のあれやりましょう」

な「あれね！はいちーちゃんの武勇伝特集！」

なにか恒例になっています

あ「というわけでちひろ このジムってどうやって攻略した？」

ち「え？ラルー一匹だけど？」

冷たい空気が流れた

フ「そういえば私のところポポッコ一匹・・・」

ヒ「私のところは一人で倒しに来たわね たしかユキメノコとムウマ」

メ「僕の・・・ところは・・・」

な「ストップです それはあゆむかさいが君どちらかが攻略終わったときに言いますから！」

メ「わかった・・・」

了承するメタルさん

ラ「さ 村長の家にでも帰りますか」

あ「ラウさんの家って村長がいるんですか？」

ヒ「何いってんのよ さいが君のお家が村長の家なのよ」

あ&な「「えー！！！」」

その声が響いたという

（村長の家）

？「これ　そのチビ蔵！」

とおばあさんが杖を突いてあるいてきた

ち「ああ・・村長さんこれ電話で言っていたものです」

村「あれから何ヶ月たったとおもうんじゃない！」

と杖でちひろさんの頭を叩く

ち「いたい　いたいですよ・・」

ラ「あれが村長さん　さいがくんの祖母にあたるんだよ」

村「本当　おまえさんがあんな地位になってなければ無視できるもののおっ！」

ち「ひどいなー」

ヒ「まあまあ　村長さんちゃんと物を持ってきたんだからいいじゃないませんか」

村「ヒウよっ！お前がのこのことここに帰ってきたな！あんな都会のジムリーダーになりおってっ！あんな若造に任せられんのじゃ！」

ラ「僕とヒウちゃんは同じ年だよー（泣）」

とラウさんが泣いていた

な「帰ってきたってことは・・ここってヒウさんの故郷なんですか？」

ヒ「そうよ　ラウとはいとこなのよ」

ラ「ヒウちゃん　僕をいじめてえ」

ヒ「ボケがっ！カスがっ！この変体がっ！」

とラウさんを下踏みつけながらそういった

ラ「もっと　もっととおおおおおお！！」

ち「やれやれ・・」

村「やれやれはお前じゃ！まったく・・今日はもうおそいここに泊まりなさんな」

フ「私はもう帰ります　仕事溜まっちゃうし」

メ「僕は・・まだ・・いる・・」

ヒ「あらなんで？」

とヒウさんが聞くと

メ「挑戦者・・・ひとりだけ・・・知るのは・・・不公平」

ち「真面目ですねえ」

ヒ「さてと 私も帰らなきゃいけないし フレナ送るわよ？空のほうが早いでしょ？」

フ「そうですか？お言葉に甘えます」

ち「それではー」

な「また会いましょう！」

ヒ&フ「さよーなら！！」

ヒウさんフレナさんがいなくなった

な「・・・あゆむとさいが君は？」

ち「お兄ちゃんはいが兄ちゃんをいじめてる」

メ「たい・・・へん・・・だね」

ラ「ののしり・・・ののしりたりない・・・」

村「いいかげんにせんか！お前は家があるんだから泊めんぞ！」

ラ「はい・・・帰りまーす」

ととぼとぼと歩いて家に帰っていくラウさん

村「メタルの小僧とあゆむの小僧はこっちじゃ おまえさんふたり

はここでまっとれ」

な&ち「はい」

あ「解りました」

メ「（こくん）」

く夜 あゆむ・メタルがいる部屋で

あ「ふあゝそろそろ寝ますかあゝ」

メ「今日の・・・戦闘・・・悪くは・・・無かった・・・だけど・・・その運だけで我アリッソジムは・・・抜けられない・・・あのちひろでさえ・・・4体も・・・つかったんだから・・・ね」

あ「それは勝てますかねえ」とゆうことはこの先の・・・たしかコノエジムは五体？」

メ「・・・いや・・・聞いた話・・・では・・・二体・・・怒りに任せて・・・一体では無理でも二体で5匹全部倒した・・・らしい」

あ「ますます 不安になってきた・・・勝てるかなあ？」

メ「チャン・・・ピオン・・・家系・・・の力を・・・待っている・・・」

あ「おおげさですよ 僕はあの家のなかで一番弱いですから」

メ「それを・・・いいきれるのは・・・すごい」

あ「いやー 本当のことですから・・・」

とあゆむは窓から見えた月を見る

あ「さて寝ますか 明日は見ることに移動ですから」

メ「・・・ふっ・・・」

と二人は寝た そしてあゆむは夢を見る

『た・・・け・・・』

(ん？そこに誰がいるの？)

『たす・・・け・・・』

(え？なんていつてるの？)

『お願い！助けて!!』

と言葉と同時にあゆむは勢いよく起きる

(・・・今のは一体・・・)

く朝

「それではー エニジムジム戦を開始します ラウ様 挑戦者様準備はよろしいですか？」

ラ「大丈夫だよー」

さ「(こくん)」

ジムリーダー二人と4人組はエニジムにいた さいがのジム戦だ

「それでは始めてください！」

といわれた瞬間

ラ「ダクドリオ！きりさく！」

さ「ゴルバット！エアカッター！」

どちらの技も炸裂した

ラ「ダクトリオ！もう一回だ！」

さ「ゴルバット交代！ハヤシガメ！はっぱカッター！」
ダクトリオが倒れた

ラ「やるねえ ヌオー！」

さ「はっぱカッターだっ！」

と2連続で倒していく

ラ「それじゃ・・・ヒポポタス！」

さ「交代だ！ビブラーバ！」

ち「あ 新しいポケモンだね」

な「・・・言えと？」

あ「強制はしてないよ なみか」

ラ「すなあらしで体力削りたくないのかな？ピポポタス！たいあたり！」

さ「ビブラーバ！りゅうのいぶき！」

ヒポポタスに当たる 技

ラ「くっ・・・もう一回だ！」

さ「かみくだく！」

とヒポポタスは倒れる

ラ「あちゃーだね サンドパン！」

さ「交代 ロトム！」

と観客席では

な「・・・ちーちゃん大丈夫！？」

ち「このくらいの距離なら平気だよ」

な「そう・・・ちーちゃんのゴースト嫌いは大変だね」

メ「・・・それは・・・おかしい・・・」

とメタルさんが言う

ち「んーまあ なみか姉ちゃんが勘違いをするのもおかしくない話
なんだけどね なみか姉ちゃん 私はゴースト嫌いじゃなくて ゴ
ーストタイプに近づけないだけ ゴーストタイプに関しては私は大

好きなんだよ」

な「そうなのっ!？」

ち「ちょっとした事件で　ゴーストタイプに恐ろしいものがついちやって近づけないだけで　私のところはゴースト一筋なんだよ　ジムリーダーで言うエキスパートならば私はゴーストタイプを極めてるんだよ」

そりゃあ　ゴーストジーニアスだからですね

ち「お母さんとお父さんはドラゴンだけどね　私はゴーストが大好きだから」

あ「まあ　ゴースト好きになった理由の一つがユツキーがユキメノコに進化したって所だからね」

な「ああ　ゴーストタイプだもんね」

なつとくするなみかさん

と言っているうちに戦いは進んでいます

さ「あやしいかぜ!」

とよけるサンドパン

ラ「そんなのはあたらないよー」

さ「・・・すながくれか・・・交代だ　ハヤシガメ!」

ラ「サンドパン!　ブレイズスクロー!」

さ「ハヤシガメ!　メガドレイン!」

どちらの技も当たる

ラ「きりさくだよ!」

さ「もう一回だ!」

とサンドパンに技が当たると倒れた

「サンドパン戦闘不能!　よって勝者　挑戦者様!」

あ「おー　おめでとー」

ラ「昨日より簡単にやられたなあ・・・はいグラウンドバッチ　どう?　メタルさん勝てそう?」

メ「・・・手持ち・・・増やす・・・レベル・・・アップする・・・しない・・・俺には・・・勝てない・・・」

ち「なんかいつも以上に話がつながらないんですけど・・・」
メ「きに・・・するな」

気にしますって

ラ「それじゃ 次はメタルさんのいる アリッソジムだね がんばって！メタルさんはジムリーダーの中で二番目に強いからね！」

ち「うん たしかに 私も認めるほど強いもの」

村「またれよ！そのあゆむの小僧！お前さんの夢に出てきたポケモンが解ったぞ！」

メ&な&ち&さ&ラ「」「」「夢？」「」「」

と5人一緒に首をかたむける

なかのよろしいことで

あ「うん 昨日夢に出てきたポケモンが気になったから調べてもらったんだ でどんなポケモンなんです？」

村「うむ 貴様の言うことから察するに このポケモンじゃ」

巻物を見せられた あゆむ そこには『ファイアブイズ』とかかれていた

あ「ファイアブイズ？」

村「ふむ ファイアブイズとは この地方にしかないポケモン二匹のうちの一匹でな イーブイの先祖のポケモンとも言われている かしどこににいるのかは全くわからないのじゃ この言い伝えだけが残っておる」

あ「そうなんですか・・・」

と同時にあゆむはこう思っていた

（どうして助けてといていたのかな・・・）

ち「とりあえず！アリッソシティにいきましょう！」

メ「あ・・・そういえば・・・」

（七番道路）

メ「海・・・わたるよ・・・？」

ち「あー・・・どうしよう 私全員で渡れる水ポケモンいまないよ？」

メ「俺は……空飛ぶけど……」

な「心配しないで！こんなこともあるうかとお父さんからポケモンもらってきたんだよ！」

とモンスターボールを投げる

な「ラブちゃん！久しぶりだね！向こう岸までお願いね！」

とラブラスがこくんとうなずいた

な「さっ！乗って　いくよー！！」

と4人がラブラスに乗った瞬間

？「フレイシティで言っていたガキ4人がこんなやつらとは　ふん
α団のレベルも下がったもんだな」

あ「誰だっ！」

？「申し送れた　俺はα団幹部が一人　イプシロンと言う　以後お
見知りおきを……」

ち「うるせえな……だまれよ　人殺しにポケモン殺し」

と低い声でちひろさんはそう言う

イ「人殺しなんて　俺達は世界平和のためにやっているだけなんで
すよ？」

ち「世界平和だあ！？罪のないポケモンと人を殺している集団じゃ
ねーか！」

あ「ちひろ　落ち着いて　ここで暴れたら海のそこだよ？　あと本
気で暴れたらダメだからね？」

イ「しかし　ジムリーダーは人質を助けただけと言っていました
ガキ一人に10人近くやられたと聞いていますが　いったいだれな
のか　気になりますねえ」

あ「それを　いいただけですか？なら帰ってもらえませんか？そ
ろそろ僕も我慢の限界なんです」

イ「たががガキにやられるような俺ではないですが　いいんでしょ
う　今回は身を引きますよ……俺は……ね」

メ「！4人と……もふせ……て！」

と前方から攻撃がきた

多数のa団である

イ「どこまでやれますかねえ・・・」

とイプシロンは消えた

ち「レック！ちいさくなる！そしてりゅうのいぶき！」

な「ネイちゃん！」

と言うとネイティが進化してネイティオになった

な「サイコキネシス！ラプちゃん！冷凍ビーム！」

あ「ヌマクロー！みずのはどう　ソルロック！サイコウェーブ！」

さ「ゴルバット！エアカッター　ビブラーバ！りゅうのいぶき！」

メ「エア・・・ムード！はがねのつばさ・・・！」

5人の攻撃が当たるが数は減ってないように見える

あ「くっ　多い！」

ち「ワッコ！ギガドレイン！ラナ！どろぼくだん！」

しかし数は減るようなそぶりはみせない

さ「何人きてんだよ　これじゃ　自滅だぞ！？」

と攻撃がさいがに当たる

さ「ぐふっ！？」

そしてさいがは技が当たった勢いで海に投げ飛ばされた

あ「さいが！」

な「さいが君！」

ち「さいが兄ちゃん！」

くエニジムではく

ラ「ふー　いまごろ海を渡っているところかな　アリッソシティは

ここから下るよりも海を渡ったほうが近いからね」

とラウさんはパソコンを開く

『せんごく☆ジムリーダー四天王チャット☆』

おい　約5行上を見る作者　なんでこのタイピングでいれるんだよ

空気よめ

くチャット内容く

ヒウさん

sky..あ　Groundジム戦終わった？どうだった？

Ground…あつさりまけちゃったよー(泣)

Plant…強いんですね　メタルさんでも勝てるのでしょうか？

Snow…Plant…何回いったら解るんだよお前

Insect…待ってよバタフリーたーん！抱きつかせてー！

Esper…Insectは相変わらずだな　前回でこりたとおもったんだが

Grapple…Insectがそんなことではこりんだろうよ

Electricity…あれ？さきに来てるはずのSteelは？

Ground…Steelはちひろちゃんたちというよ　今頃は海だね

Water…そういえば下るよりも海わたるほうが近いんだっけ？

Rock…本当なら陸でいったほうが近いんだけどなあ！

Flame…まっすぐではないけないもんね　回り道しちゃうから海のほうが楽なんだよ　幸いどっちも海側だしね

Plant…だんだんと私の出番が近づいてきてうれしい限りです　まあアリツシティからコノエタウンまで道のりは長いんですけど

Electricity…町名前ってだしていいの？

Snow…町名前で特定はされないだろうが　今回はされと思うぞ　題名がそうだからな

Flame…Plantさん…

Plan…いいじゃありませんか　このサイトとこのチャット自体理事会が作ったものでしょう？　少しぐらいなら怒られません

sky…いや　あんたはアウトだよ

…終了…

『アリツシティに向かう途中でa団に襲われた4人とメタル！海に沈んださいがはどうなるのか！

そして次回a団の活動目的がわかるぞ！

次回「潜入してみよう！」お楽しみに！』

潜入してみよう！

「破壊光線ッ！」

だれが言っているか　ちひろさんである
技は敵に直撃し

あんなに多かったα団がいなくなったのだ

あ「ヌマクロー！海にもぐって　さいがを探して！」

「ぬまっ！」

ヌマクローはもぐり　さいがを探した

数分後

ヌマクローが海からあがってきた

「ぬまっ！」

あ「いたのかい！」

とヌマクローの横にはもう一匹ポケモンがいた

サメハダーであった

「さめっ！」

サメハダーの上にはさいが　がいた

な「見つかった！」

メ「息は・・・あるみたいだね・・・早く海わたって　ポケモン

センターに行こう！」

「ポケモンセンター」

あ「・・・・・・・・・・」

な「・・・・・・・・・・」

ち「・・・・・・・・・・」

三人は無言だった

メタルさんは調査があると言っていなくなった

そしてジョーイさんが出てきた

あ「ジョーイさん！さいがは大丈夫ですか！？」

「大丈夫ですよ　しばらくしたら目を覚ましますよ」

とジョーイさんが去っていった
な「はあ、よかったあ」

ち「ゆるせない・・・α団のやつらっ！私の周りのものを壊していきかつ！さいが兄ちゃん・・・ワッコの家族・・・そして・・・ピオ・・・ゆるせない！ゆるせない！」

あ「ちひろ」

と泣き狂っていたちひろをあゆむはとめた

あ「たしかにゆるせないけど 殺しはだめだ そんなのはあいつらと一緒だよ」

ち「・・・うん・・・」

さ「だ・・・から お前ら・・・本当に兄妹かよっ・・・っの」

と入り口からさいが 出てきた

な「さいが君大丈夫!？」

さ「ポケモンの攻撃一発で海に落ちただけで大げさだ こんなへの・

いき・・・ぐっ・・・！」

とさいが が少ししゃがむ

あ「ダメじゃないか 安静にしないと 傷が悪化するだけだぞ」

さ「うるせーな・・・こんなの平気だって」

ち「安静にしないなら・・・眠らすよ？」

とちひろの後ろに邪のオーラが見えた

な「ちーちゃんダメ！それは違う意味でねむっちゃう！」

いつものノリが戻ってきました

メ「意識・・・戻ったみたいだね・・・」

とメタルさんが出てきた

メ「よかった・・・よかった・・・そうそう・・・さいが・・・くん・・・これ」

とメタルさんはモンスターボールを差し出す

さ「これは・・・？」

あ「あ これ」

な「ああ！このポケモン！」

ち「さいが兄ちゃんを助けたサメハダー！」

とモンスターボールの中をみれば 確かにサメハダーがいた

メ「ちょう．．．さ．．．で．．．サメハダー．．．が．．．さいが．．
．くん．．．に．．．なつい．．．たから．．．つかま．．．えたん
だ．．．よ」

さ「．．．そうか お前が俺を助けてくれたんだな ありがとうな
サメハダー」

とさいが と言うと サメハダーが喜んでいた

メ「そして．．．つよ．．．すぎる．．．敵．．．がいた．．．α団．
．このまま．．．じゃあ．．．かて．．．ない．．．だから．．．特
訓．．．だ！」

とメタルさんがガッツポーズをとる

メ「とり．．．あえず．．．明日．．．アリッソ．．．平原．
．で来て．．．ね」

な「あの．．．それって私もやってもいいですか？」

メ「？．．．きび．．．しいよ？」

な「はい．．．このままじゃ 私置いてけぼりだし 足でまといに
なりたくないんです！」

メ「そ．．．う．．．ちひろ．．．はどう．．．する？」

ち「私は．．．調べたいことがあるから．．．今回はメ
タルさんにまかせる！」

メ「そう．．．」

とあゆむたちは入り口に行くと一回みた人がいた

ジ「おお？ 見た顔だと思ったらお前達か」

あ「ジョーカーさん」

ち「誰？」

とちひろが首をかしげる

な「えっとね 元α団員でディちゃんの元持ち主なの」

ち「いじめたっていう？」

ジ「おう そのころはポケモンの大切さが解ってなかった時代だ

ガーディには失礼なことをした」

あ「そうだ ジョーカーさんα団のこと聞いてもいいですか？」

ジ「いいが・・・もうひとりいなかったか？目つきの悪いやつ」

な「私よんでくるよー」

（数分後）

ジ「さて・・・何が聞きたい？」

あ「α団の目的・・・かな？」

ジ「ふむ・・・それじゃ 少し昔話をしよう 昔・・・俺がα団に入る前のことだ そのときのα団はな 人間だけを支配しようとしていた しかしその途中ある事件が起こった」

あ「ある事件？」

ジ「カントーだかの地方に 人間を滅ぼそうとして失敗したやつらがいたという その話を聞きつけてα団のボスは作戦を変えた 次の作戦が人間とポケモンを支配することだ これも失敗したというやつらがいたが それは気に止めなかったらしい 俺もその計画に賛成してα団に入ったんだ・・・だが・・・あいつらはどこにどう転んだかポケモンの支配・・・つまりはポケモンがいない世界を望んだ 俺はなそのとき気づいたんだよポケモンの大切さっつーのがな だから俺はα団をぬけた 今も変わってなければ あいつらはポケモン抹殺を望んでいるだろう」

ち「それじゃ なんでヒノウシテイの人間を？」

ジ「それは あいつらの交換条件にだされたもの サマンジャ洞窟の許可証つまりサマンジャ洞窟だろう」

さ「サマンジャ洞窟ってどんな場所なんだ？」

ジ「俺も詳しくは知らないが・・・あそこには伝説のポケモンファイアブイズがいるという ファイアブイズはこの地方の中で最強のポケモンだ α団のボスはそいつをもつてしてポケモン達を滅ぼそうとしているんだろう」

な「ファイアブイズ・・・？どこかで聞いたような？」

となみかが少し考えた後

な「そうだ！あゆむの夢の中に出てきたポケモン！」

とあゆむのほうを向くとあゆむが考えていた

あ（・・・きつと・・・助けてといったのはそういう理由なのか？）

ジ「俺はα団の元団員としてα団をとめようと動いているんだ」

「へるっ！」

とヘルガーがやってきた

ち「ジョーカーさんの新しい手持ちですか」

ジ「ああ どうやら俺は炎タイプが好きらしい ふむ・・・その小僧に迷惑料としてこのヘルガーをやるう どうやら気になっているようだからな」

とあゆむの近くにヘルガーがいった

ジ「さてと 俺はこの先に行かなきゃいけないえ じゃあな」

とジョーカーさんがいなくなった

あ「・・・よろしくね ヘルガー」

「へるっ！」

くそして翌日く

メ「みんな・・・な集まった・・・？ それじゃ・・・せつ・・・めい・・・するね・・・ここ・・・アリッソ平原・・・は・・・多種の・・・ポケモン・・・がいる・・・ところ・・・ほかの・・・地方で・・・例えば・・・サファリゾーン・・・みたな・・・ところ・・・始める・・・まえ・・・に・・・二人に・・・これ・・・」

となみかとあゆむに一匹ずつポケモンが渡される

メ「なみか・・・ちゃんには・・・クチート・・・あゆむ・・・く・・・んには・・・ジバコイル・・・手持ち・・・強化・・・とても・・・役立つ・・・それじゃあ・・・一番・・・最初の・・・修行は・・・手持ちを・・・6匹に・・・すること・・・これから・・・は・・・手持ち少ない・・・と・・・キツイ・・・それぞれ・・・バランス・・・の・・・いい・・・ポケモン・・・を・・・捕まえて・・・ね」

と言葉と同時に3人は 散らばった

「あゆむチーム」

あ「僕達のところはあと一匹 水地面岩エスパードラゴン・・・で最終形態が飛行ついて悪炎電気鋼・・・あとは毒草氷ノーマル格闘ゴースト虫・・・バランスを考えるとやっぱり二つもっているポケモンだね」

とあゆむの手持ちは全員うなずく

あ「毒草タイプのフシギダネ進化たちとかゴースト毒タイプのゴース進化たちとか虫毒タイプのスピアーとか虫草タイプのパラセクトとか・・・あとは・・・」

と横を見るとポケモンが歩いていた

あ「ソルロック！サイコウエーブ！」

「さいがチーム」

さ「後一匹・・・なんかもうすでにバランスなんてめちゃくちゃだが最後ぐらいは重ならないものがないよな あと必要といえば炎タイプとか氷タイプか・・・」

「ろとろと！！」

とロトムが騒いでいた

さ「どうした？ロトム・・・！あーえっと・・・まあいいか！ロトムまず電磁波だ！」

「なみかチーム」

な「私のところは二人と違って二匹もいるのよねえ・・・たいへんだなあ・・・」

となみかがとぼとぼと歩いていた

な「ポケモンが多いって言われたけど どんなのを捕まえればいいのかわかんないよねえ・・・」

「ネー」「うおう！」「ラプー」「クチ！」

な「どうしたの？ネイちゃん デイちゃん ラプちゃん クチちゃん・・・あれ？やったあ！二匹同時！ラプちゃん！なみのり デイちゃん！ひのこ」

「数分後」

メ「はや・・・いね・・・」

あ「なんか・・・これだって思っちゃって」

さ「同じく」

な「私もです」

メ「まあ・・・いいけど・・・ね・・・それじゃ・・・今度・・・
は・・・ポケモン・・・のレベル・・・アップ・・・もう少し・・・
・奥に・・・いくと・・・強い・・・ポケモン・・・がいるんだ・・・
・そこで・・・進化・・・してない・・・ポケモン・・・の進化・・・
・とか・・・ね」

と平原の奥に行く4人

メ「それじゃあ・・・みんな・・・な・・・捕まえたポケモン・・・だして・・・」

あ「ユキワラシ！」

さ「マニユーラ！」

な「リンちゃん！サンちゃん！」

とユキワラシ マニユーラ チェリンボ サンダースがでた

メ「みんな・・・な・・・いいの・・・持っている・・・ね・・・それ
じゃ・・・進化のを・・・十体ぐらい倒してきて・・・捕まえた・・・
・ポケモン・・・だけで」

あ「となると なみかは有利に戦えるんだね」

な「みんなのポケモンより レベルは低いけどね」

（数分後）

な「倒してきましたー」

戻ってきたなみかの手持ちはチェリンボからチェリムに進化していた

メ「い・・・ちばん・・・おつか・・・れ・・・」

な「一番なんですか？てつきりあゆむとさいがくんが最初だと・・・」

「

さ「ただ・・・いま・・・戻りました・・・」

とさいが がボロボロになって戻ってきた

メ「おつ・・・かれ・・・さ・・・ま・・・」

さ「さすがにきつかった・・・」

な「きつかった・・・って何かルール決めてたの？」

さ「いや・・・普通の進化ポケモンに 最終進化になると効果抜群でも一発で倒せないからな」

な「そこは・・・こう・・・運が悪かったと」

あ「十匹倒してきました」

とあゆむがピンピンして戻ってきた

ユキカブリはユキノオーに進化していた

メ「おつかれ・・・さま・・・さい・・・ご・・・」

あ「やっぱり？ちよつと手間取ったんだよね」

な「手間取ったって3段階進化ポケモンの最終進化ばかりだったの？」

あ「いやー・・・ポケモンが近寄らなくて 弱いポケモンを倒したらかわいそうだからそのためにやった威嚇がほとんどのポケモンに効いちやって（笑）」

そんな威嚇までだせますか

メ「それ・・・じゃ・・・君達が・・・野生・・・ポケ・・・モンを・・・倒している・・・あいだ・・・に・・・集めた・・・トレーナー・・・を倒して・・・ね・・・」

さ「倒してって・・・少ないですよ？これじゃ・・・いくら強くてもあゆむひとりで出来るんじゃない・・・」

トレーナーは8～9人ぐらいだった

メ「だい・・・じょうぶ・・・みんな・・・負けず・・・嫌い・・・だから・・・ここに・・・いるトレーナー・・・全員に・・・勝てたら・・・OK

・・・同じ・・・ひとが・・・仕掛けてくるからね・・・」

と3人はポケモンバトルを始めた その中でメタルさんはつぶやくメ「本当・・・は・・・この・・・仕事・・・を・・・ちひろ・・・にやらせ・・・たかった・・・あの子・・・ポケモン・・・いっぱい・・・持っているから・・・ね・・・しかも・・・全部・・・強いから・・・」

・負けても・・・立ち上がる・・・人に・・・なってほしいから・・・
・そのほうが・・・一番いいんだけどね・・・そういえば・・・ち
ひろも・・・負けたこと・・・あるのかな・・・」

ありますよ　一番最初にあゆむに負けてますよ

（数時間後）

な「疲れた」

メ「三人・・・とも・・・お疲れ様・・・全員・・・最終進化・・・ま
でいった・・・？」

あ「僕のコモルーがまだで・・・」

さ「俺はビブラーバが」

な「私はディちゃんが石進化だから・・・」

メ「そ・・・う・・・今日は・・・おしまい・・・明日・・・最後
の・・・修行を・・・する・・・」

ち「あれ？終わっちゃった？なーんだ　修行に手間取ってるお兄ち
ゃん達を高笑いしようと思ったのに」

さ「感じ悪いな・・・」

な「それじゃあね修行の内容言うからちーちゃんならどう対応する
？」

あ「その1手持ちを6匹にする」

ち「タイプが重なるうが近くに来たやつ即ゲット」

さ「その2進化したポケモンを十四匹　捕まえたポケモンのみで」

ち「経験値の高いやつで弱いやつをねらう」

な「その3トレーナー9人を全員倒す」

ち「全員のポケモンを並べて　全部一気に倒す」

メ「普通の・・・倒し方・・・じゃ・・・ない・・・」

おっしやるとおりです

ち「効率よく手際よくLvアップが心情だから」

さ「嫌な心情だな・・・確かにいいけどさ・・・」

あ「えっとね　ちひろ　お母さんの口癖をまねるのはやめようね」
ち「いいじゃないのさー」

あなた達のおかあさんは一体どんな人ですか

メ「それ・・・で・・・何・・・調べて・・・たの・・・？」

ち「秘密です 教えられる内容でないですから」

メ「そ・・・う・・・それじゃ・・・明日・・・ね」

な「はい！」

あ「明日もよろしくお願いします」

さ「（こくん）」

と4人はポケモンセンターに行った

（翌日）

メ「それ・・・じゃ・・・あ・・・最後・・・の・・・修行・・・」

とメタルさんは3匹のポケモン トリデプス ハガネール ドータクンが出された

メ「なみか・・・ちゃんは・・・トリデプス・・・あゆむ・・・くん・・・は・・・ハガネール・・・さいが・・・くんが・・・ドータクン・・・それぞれ・・・相手の有利なポケモン・・・で・・・戦って勝利・・・そのあと3人で・・・エアムード・・・を・・・倒す・・・」

さ「ということは俺は・・・クロバット・・・きついなー」

な「私はネイちゃん ラプちゃんだね！」

あ「僕は ジバコイル ソルロック ユキノオーか」

そしてバトルが始まった

（あゆむチーム）

あ「ジバコイル！ソニックブーム！」

とハガネールにあたるそして 捨て身タックルをしてきた

あ「っと 交代！ソルロック！炎の渦！」

ハガネールに直撃した

あ「ソルロック！サイコウェーブ！」

思いのほか効いてなく また捨て身タックルをしてきた

あ「捨て身タックルは結構痛いからねー 岩で半減でも・・・ソルロック！炎の渦！」

とハガネールは氷のキバを使ってきた

あ「交代！ユキノオー！ウッドハンマー！」

思いのほか効いていた

あ「よし はっばカッターだ！」

ハガネールは炎のキバをしてきた

あ「っと ソルロック！炎の渦！」

と技が当たると ハガネールは倒れた

あ「ふーさすがハガネール 最高レベルの防御力 ソルロックが炎

の渦を覚えてなかったら負けてたかもね」

とあゆむはため息をついてこういう

あ「はあゝあ でもお母さんとかちひろはこんなの楽勝なんだろう
なあ お母さんに勝てたお父さんが本当にすごいよ・・・僕 ちひ
ろに勝てるのかなあ」

あなた達の家族いったいなんですか

ゝさいがチームゝ

さ「クロバット！エアカッター！」

とドータクンは神通力をつかった

さ「クロバット！まもるだ！」

と攻撃は防いだ

さ「危ない 危ない 一回でもうけたら即終了だ クロバット！ち
ようおんぼだ！」

ドータクンは混乱したが 神通力を使ってきた

さ「くー あんま効いてないか クロバット！エアカッター！」

すると ドータクンは自分に攻撃し始めた

さ「効いてきたか クロバット！エアカッター！」

ドータクンは混乱が解け 神通力を使ってきた

さ「げ もう解けたのかよ クロバット！あやしいひかり！」

ドータクンはまた混乱した

さ「よし！クロバットの混乱系の命中率はすげえな エアカッター
！」

とエアカッターが炸裂 自分への攻撃もあって ドータクンは倒れた
さ「エアカッター連発か 苦手タイプだったししかたねえな 鋼で
毒は無効だしな」

よく勝てたものです

「なみかチーム」

な「ネイちゃん！催眠術！」

とトリデプスはねむりにつく

な「ラブちゃん！なみのり！」

技は命中し 急所に入って良いダメージを与えた

しかし トリデプスはすぐに起き いわなだれを繰り出した

な「ラブちゃん！冷凍ビーム！」

しかしダメージは与えられない

な「効果いまひとつなの 忘れてたあ・・・ネイちゃん！サイコキ
ネシス！」

とラプラスを戻しネイティオを出す

トリデプスはアイアンヘッドを出してきた

な「ネイちゃん！もう一回！サイコキネシス！」

トリデプスにそんなに効いてなく いわなだれを出してきた

な「うううラブちゃん！なみのり！！！」

なみのりはまたも命中急所 大ダメージを与えた

トリデプスはアイアンヘッドを繰り出した

な「負けるな！ラブちゃん！なみのり」

なみのりはあたる トリデプスはすなかけをだした

な「あうううネイちゃん！サイコキネシス！」

急所がきつかったか トリデプスは倒れた

な「ぎりぎりだったあゝ さすがというかどうかというか あゆむ

達ならもっと簡単なんだろうけどさ あの一家には誰も勝てないよ

だってすごすぎるんだもん」

だから あの一家はなんなんですか

「メタルさんのところ」

メ「おつ・・・かれ・・・さ・・・ま・・・そう・・・そう・・・これ・・・おわった・・・ら・・・こ・・・れ・・・あげる・・・」

とメタルさんはバッチをだした
メ「スチール・・・バッチ・・・ほしい・・・でしょ？・・・このあと・・・で・・・というの・・・も・・・時間・・・かかる・・・から勝てたら・・・あげる」

な「あのー それって私も持っていないんですか？」

メ「問題・・・は・・・ない・・・むしろ・・・持っていたほうが・・・オトク・・・スチール・・・バッチは・・・手持ちの・・・防御力を・・・あげる・・・バッチ・・・無駄に・・・ならない・・・はず」

な「なるほどなるほど」

となみかさんが納得する ポケモン知識増えてよかったですね

メ「それじゃ・・・あ・・・エアムード！・・・はがねの・・・つばさ・・・だ・・・っ！」

とメタルさんがエアムードをだし 攻撃をする

あ「ラグラージ！濁流！！」

さ「ドサイドン！リーフストーム！」

な「ネイちゃん！サイコネシス！」

しかしどの技も当たらなかった

な「空で当たりにくいのか なら私が 動きを制限しておくから！二人はどはでにドーンとやりなさいな！」

となみかはネイティオことネイちゃんと一緒に空へ

メ「そんな・・・簡単・・・に・・・つかま・・・らない・・・！エアムード！・・・金属音！」

とネイティオに直撃

な「う・・・くっ！ ネイ・・・ちゃん！催眠術！」

「ねー」

と催眠術があたった

メ「エア・・・ムード・・・！」

あ& a m p ; さ「「今だ！破壊光線！！」」

しかしエアムードは立っていた

メ「はかい・・・こうせん・・・と・・・いえど・・・こんな・・・はやく・・・おわる・・・俺の・・・ポケモン・・・じゃ・・・ない・・・エアムード！鋼の翼！」

しかしエアムードは立っていた

メ「はかい・・・こうせん・・・と・・・いえど・・・こんな・・・はやく・・・おわる・・・俺の・・・ポケモン・・・じゃ・・・ない・・・エアムード！鋼の翼！」

とネイティオにあたる

な「うっきゅう・・・あゆむとさいが君が回復するまで持ちこたえるしかない！ネイちゃん！サイコキネシス」

とエアムードに直撃する

メ「・・・エアムード・・・！つばさでうつ！」

あ「ソルロック！炎の渦！！」

さ「ビブラーバ！りゅうのいぶき！」

とあゆむとさいがの技がエアムードに当たる

メ「くっ・・・つじ・・・ぎり！」

な「ネイちゃん！追い風からサイコキネシス！」

あ「ソルロック！サイコウエーブ！」

さ「ビブラーバ戻れ・・・クロバット！怪しい光！」

とどの技も直撃

メ「こん・・・らん・・・！エアムード！」

しかし自分ばかり攻撃していた

あ「ソルロック！サイコウエーブ！」

さ「クロバット！エアカッター！」

な「ネイちゃん！サイコキネシス！」

とエアムードに直撃

エアムードは倒れていた

メ「お・・・めで・・・とう・・・はい3人とも・・・スチールバ

ツチ・・・」

あ「ありがとうございます」

な「本当にもらっちゃっていいのかなぁ・・・」

さ「いいって言ってたんだからいいじゃないか」

という三人

（ちょっといいかしら？）

とサーナイトがいた

あ「ラル？どうしたの？」

（ちひろちゃんからこれを預かっているの　読んでみて）

とラルさんから手紙を貰った

『お兄ちゃんたちへ

しばらく旅にでます　探さないでください

才色兼備の完璧超人より』

さ&mp;な「それだけ！？」

とさいがとなみかが叫んだ

あ「いや・・・もう一枚付いている・・・」

『なんてね　うそうそ　それだけじゃないよ！

ちよつと一人で考えたいことがあるから　しばらくは別行動で

ちなみに恒例になった私の記録タイムはメタルさんに聞いてみて

たぶん次のコノエジムもミシコナジムもツリーさんとかが教えてく

れるから

あと　アリッソ平原の入口から東側にでっかい建物があるんだけど

調べた結果　あそこの地下にa団の基地があるんだってさ　無闇

に突撃しないようにね？

ちひろより』

と手紙に書かれていた

メ「ちひ・・・ろ・・・の・・・やつ・・・は・・・ワツコ・・・
と言っていた・・・ワタツコ・・・ムウ・・・と言っていた・・・
ムウマージ・・・ラル・・・と言っていたサーナイト・・・
ルカ・・・と言ってた・・・ミカルゲ・・・の・・・4匹・・・

「な「ええ!？ちーちゃんが4匹使ったんですか!？　よく勝てたなあ・・・」

(それじゃあね)

とラルさんが消えた

4人はアリッソ平原を出た

　　平原　入口前

あ「・・・あれが・・・」

さ「どうする？突撃か？それともスルーするか？」

あ「さいが　目の前に目標があったら最高速で取りに行くんだよ僕は」

な「それじゃあ　準備とか念入りにしとかないとね！」

さ「ふう　ひと暴れしてくるか！」

と三人はポケモンセンターに行く

メ「・・・子供は・・・夢・・・追いかける・・・懐かしい・・・」

とメタルさんはゆっくりと歩いた

　　数分後　ビル前

な「準備OKだよ」

さ「いつでも突撃できるぞ」

あ「それじゃあ・・・」

三人「「突撃だ!!」」

と三人は走った

『α団の基地に乗り込んだ　あゆむ　なみか　さいが！　次々と現れる幹部！そしてα団のボスとはいったい誰なのか！次回「突撃してみよう！」お楽しみに!!』

突撃してみよう

な「ねえ あゆむ 突撃するにはいいけど どうやってはいるの？」
あ「正面突破で考えてたけど ダメだったかな？」

さ「やることが大胆なんだなおい」

とあゆむさん達はあるビルの前にいた

え？ひとり足りない？ まってまって 前回ちゃんと見た？

前回でちひろさん離脱したんだよ？ 覚えてる？

メ「俺・・・なりにも・・・調べて・・・みた・・・なんでも・・・地下に・・・続く道は・・・二つあるらしい・・・」

とメタルさんが言う

メ「一つ・・・は・・・中・・・もう・・・一つは・・・外・・・
・・・嚴重・・・なのは・・・外・・・」

あ「それじゃ 外の入口から侵入しますか」

と爽やかに言った

な「いやいや！なんでそんな危険なところからいくの！？」

さ「いや・・・まて そのほうが潜入しやすいんじゃないか？」

とさいが 言う

さ「まさか敵陣も警備が強いところに来ないだろうと言う・・・」

な「いやいやいや！ダメだから！普通に守ってるだけだから！」

となみかさんがツッコミ役にてっしている

あ「考えてもみなよなみか 中の方から攻めたとしても一般の人も
いるんでしょ？そのへんの考慮もしないと・・・」

な「うぐ・・・解ったよ それじゃあ 外のほうから行こ」

（入口前）

あゆむさんさいがさんなみかさんは入口前まで来た

メタルさん？増援を呼ぶとかで・・・

あ「おお さすがだね！この多さ！」

さ「さて どう行くか・・・」

な「もうお二人に任せるよお・・・」

あ「まあ 強行突破だよね」

とモンスターボールをもって爽やかにいうあゆむさん

さ「いや・・・もう少し見てみようぜ どこかで良いタイミングがあるかしんねえ」

ともう少し観察を続ける 数分後少し人が少なくなった

さ「よしっ いまだ！ビブラーバ！ドサイドン！地震！」

と地盤をゆらす

な「ネイちゃん！催眠術！！」

と少ない人たちを眠らした

あ「突撃だ！！」

（内部）

あ「と言ってもどういっていいか・・・」

？「あらら 何の奇襲かと思えばこんな子供？」

さ「つつ！誰だ！」

？「誰だとはあんた達よ 何しにきたの？」

あ「お前ら悪党に名乗る者はない・・・」

？「あららそう？それじゃあ・・・ノクタス！！」

とポケモンを出して あゆむに攻撃した

その瞬間にあゆむはポケモン ジバコイルをだした

あ「つつ！何をする！」

？「侵入者だから退治するに決まってるの私は名乗らせてもらうわ

私はデルタ！α団3幹部のうちの一人よ！」

な「幹部！！؟؟？そんなやつがなんで・・・」

デ「そりゃ 基地だからねえ・・・いちゃ悪いかしら？」

な「うぐ・・・」

負けてはいけませんよ なみかさん

あ「ユキノオー！吹雪！！」

とノクタスに攻撃をするあゆむさん

デ「うふふ よそ見はすんなくてことかしら？ いいわ相手になってあげる！」

？「それじゃ その小僧は俺かな」

さ「！！！！イプシロン！」

イ「覚えててくれたのか ハハッそうか 俺が連れてきた部下で海に沈められたもんなあ！」

さ「！！！！！！見てたのか！」

イ「そりゃそうさ 最後3体全員の破壊光線で終わったのがあれだか・・・ 良いデータにはなった」

？「それじゃあ その女の子はあたし？」

な「誰っ！？ サンちゃん！ フラッシュ！！！」

と影にいた人が照らされる

カ「あたしはカイ！ 3幹部のリーダー格よ！ よろしくねお嬢ちゃん」
な「・・・・・・」

とそれぞれの戦いが始まった

くあゆむVSデルタく

デ「ノクタス！ ドレインパンチ！」

あ「ユキノオー戻れコモルー！ 竜の息吹！」

と激しい戦闘が繰り広げていた

デ「うふふ ポケモン交代ねえ・・・ノクタス！ ニードルアーム！」

あ「くっ・・・コモルー！ 火の粉」

デ「相性でも見てるの？ アハハッ！ そんなんじゃ私のノクタスは倒れないわ！ ノクタス！ 悪の波動！」

あ「うぐっ・・・コモルー！ 火の粉！」

デ「ムダムダムダァ！」

あ「コモルー！ 交代！ ヘルガー！ 火炎放射！」

「へるっ！」

とドレインパンチを持っているノクタスに対してヘルガーを出したデ「アハハッ！ そんなんじゃかもよお！ ノクタス！ ドレインパンチ！」

と技があたったがヘルガーは立っていた

デ「ウソッ！いくらタイプ一致じゃなかったとしてもかなりの大ダメージなはずなのにっ！」

あ「それなら・・・自分のノクタスよく見ろよ」

とノクタスがじりじりと弱っていた

デ「やけどっ！」

あ「それだけじゃない このヘルガーはほかのヘルガーより防御が高い！それでやけど 一発だけでも耐えられるってことだ」

デ「つつつつっ！！なによなによ！状態異常がなによ！あと一発でそのヘルガーは倒れるんだからッ！」

あ「できないよ・・・ねえ コモルー ナイスだよ」

とノクタスの後ろにはコモルーがいた

あ「僕は あなたがやけどを確認すると同時にコモルーをボールから出して後ろから攻撃するよう指示をした」

デ「なっっ！ひるむな！こっちにはまだポケモンがいるんだからっ！ヤミカラス！怪しい光ッ！」

あ「ジバコイル！10万ボルトッ！」

とヤミカラスは倒れる

デ「ツツツツ！なによなによ！子供分際で！ノクタス！ヘルガーにドレインパンチ！」

あ「ヘルガー！火炎放射！」

とノクタスに当たると倒れた

デ「ツツツツッ！！！」

あ「はあ・・・僕の戦い方じゃないけれど勝った・・・」

とあゆむさんが勝ち誇っていた

くさいがVスイプシロン」

イ「シサリガー！クラブハンマー！」

さ「ドサイドン！はっぱカッター！」

イ「まあ妥当だけど・・・これはどうかな？冷凍ビーム！」

さ「ドサイドン変われ！ロトム！放電！」

とイプシロンの出していた　ほかのポケモンを攻撃した

イ「ふふ　さすがだな・・・だがッ！ナマズン！じしんだッ！」

電撃が効かなかったナマズンで攻撃された

さ「そんなものいたくもかゆくもないッ！」

ロトムは攻撃が当たってなかった

イ「！！！！ふゆうか！」

さ「残念だったな・・・サメハダー！噛み砕くだ！」

「さめッ！」

イ「シザリガー！クラブハンマー！ナマズン！アクアテールッ！」

ロトムとサメハダーにあたる

イ「くっ・・・そんなダメージはないかナマズン！穴を掘るだ！」

ナマズンは穴に潜った　その同時にさいがは目をつぶる　しばらくしたと

イ「今だっ！」

さ「ドサイドン！リーフストーム！」

と穴から出てきた直後のナマズンを攻撃　そして戦闘不能にした

イ「なッ！？　なんで解った！？」

さ「家の能力・・・といったところか・・・」

イ「ああ・・・お前エニビレッチの村長の孫だっけか・・・ふん使わなければいいだけだッ！ナマズン！アクアテール！」

さ「マニニューラッ！瓦割！」

とシザリガーに大ダメージを負った

イ「くッ！」

さ「ドサイドン！はっぱカッター！」

シザリガーに大ダメージを負わせた

イ「なッ！おのれえ！シザリガー！クラブハンマー！」

さ「最後だ・・・いけッ！サメハダー！毒つきッ！ロトム！電撃波
！」

とシザリガーは倒れた

イ「なッッッッッッッ！」

さ「勝てたッ！」

「なみかVSカイ」

カ「キャハハハハハハ！ブラッキー！ダメ押し！」

な「クチちゃん！アイアンテールッ！」

カ「うふふ いいわぁいいわよお嬢ちゃん！ダーデング！」

とダーデングの周りで渦がまく

カ「鎌鼬！」

な「ディちゃん！火炎放射！」

と攻撃する

カ「キャハハッ！そんなもの効かないわ！ブラッキー！騙し討ち！」

な「うぐっ・・・」

とディちゃんは倒れる

な「ネイちゃん！燕返し！」

ダーディングにしたつもりがブラッキーにあたった

カ「そんなもの出しているのかなあ？ブラッキー！かみつく」

な「クチちゃん！アイアンテール！リンちゃん！日本晴れからソー

ラービーム！」

カ「クッ・・・ちょっと油断したかなあ・・・ブラッキー 月の光

から騙し討ち！」

な「ネイちゃん！よけて！」

とブラッキーをよけたが

カ「うふふふ ダーデング！騙し討ち！」

見事にあたってしまった

な「ネイちゃん！このお！ラブちゃん！滅びの歌！」

となみか カイのポケモンが滅びについたがなみかは一気にメンバ

ーを変える といってもサンダースだけ

カ「何が出来るのかな？一匹で」

な「舐めないでよね 一匹だって出来ることあるんだからサンちゃ

ん！ミサイル針！」

カ「なッ やばっ！」

しかしもう遅い　ダーテングにくるだろうと思ったかブラッキーで受け止めようとしたが相性で効果抜群　ブラッキーは倒れた
な「もう一回よ！ミサイル針！」

ダーテングに命中　そして倒れた

カ「なツくそッ」

な「か・・・勝てたッ！！」

喜び上げるなみかさんだった

そして　すぐにそれは絶望へと変わる

？「ドンカラス　燕返し　バンギラスいわなだれ」

すぐにみんなのポケモンを戦闘不能にしたのだ

イ&mp;デ&mp;カ「ボス！」

と三人は叫んだ

な「なっ・・・ボ・・・ボス？」

さ「こいつがッ！」

あ「・・・」

ベ「ああ　俺の名はベータ・・・α団ボス・・・だ」

とボスは名乗る

ベ「せっかくだが・・・死んでもらう」

？「そうはさせないね！」

？「ええ　大事な人たちを殺させるわけにはいかなもの」

と二人の声が聞こえた

ベ「誰だ！」

セ「ふふふ　それじゃあ　名乗らせよう！僕はコノエジムジムリーダー！通称「森の王者」のセクト！」

ツ「私はミシコナジムジムリーダー通称「プラントプリンセス」のツリーです」

ベ「ふん　ジムリーダーか」

メ「三人・・・とも・・・だい・・・じょう・・・ぶ？」

あ「はい・・・僕たちは・・・でもポケモンが・・・」

メ「よし・・・いそいでここを脱出だ　あいつらの相手は・・・」

あの二人で・・・大丈夫だか・・・ら」

さ「で・・・でもッ」

とさいがさんが言う

メ「ポケモンが・・・ぜんめ・・・つ・・・の君・・・たち・・・じゃ・・・いて・・・も・・・めいわ・・・くだか・・・ら・・・早く」

さ「はい・・・」

としぶしぶさいがさんは了承

メ「ハガネール！穴を掘るだ！」

（外）

あ「くそッ・・・一瞬でやられるなんて・・・」

メ「弱っていた・・・のも・・・ある・・・けど・・・まだまだ・・・戦力・・・不足・・・みたい・・・だね・・・ごめんね・・・」
な「メタルさんが悪いんじゃないんですよ！だって修行してもらえなかったら私あのカイって人倒せなかったもん」

さ「俺もだ　メタルさんのおかげだよ　ありがとうございます」

メ「で・・・も・・・ね・・・」

セ「メタルさんらしくないよ　ありがとうって言われてるなら素直に喜ばなくちゃね！」

ツ「まあ　こんな状況で強く出来なかったってことがメタルさんには大きいでしょうね」

あ「あ・・・先程は助けていただきありがとうございますえっと・・・」

セ「僕はセクト！」

ツ「私はツリーです」

と最後のジムリーダー登場しました

セ「君たちの噂は聞いてるよ　裏情報網やちひろちゃんからね」
な「ちーちゃんから？」

ツ「ええ　あなたたちと別れたあとでしょうか？私たちのところ来て『メタルさんまで倒した人がくるかもしれないから気を付けて』って」

何をだ　とさいがは心の中で突っ込んだ

セ「何はともあれ　無事でよかったよ　君たちが怪我してたらここ
かのだれかさんに怒られるところだったからね」

さてはていったい誰でしょうねえ

あ「メタルさんが呼んだ増援ってこの人たちだったんですね」

メ「う．．．ん．．．ふた．．．り．．．とも．．．すご．．．
く．．．つよ．．．い．．．から．．．ね」

ツ「それでは　出発でもします？」

さ「え？どこに？」

と聞kaisいがさん

セ「決まっているじゃないか　次の町『コノエシティ』つまり僕の
街さ！」

な「セクトさんってコノエジムジムリーダーなんですネ」

セ「そうだよ！先に行っておく僕のエキスパートは虫さ！」

メ「その．．．せい．．．で．．．じょう．．．ほう．．．も
う．．．めい．．．わく．．．」

ツ「そうですよね　まったくもうって感じですよ？セクト」

セ「僕はただ　本当のこと言ってるだけさ！」

といっていますね　わかりますよね？あれですよあれ

あ「一体何のことなんですか？」

メ「いや．．．こっち．．．の．．．はな．．．し．．．」

わかりませんよね　そりゃ　初めて会うんだからね

ツ「疲れてるでしょう？空を飛ぶで送りますよ　トロピウス！」

さ「で．．．でも．．．」

セ「まあまあ　乗って乗って」

と二人は三人をトロピウスの背中のにせる

メ「それ．．．じゃ．．．ね．．．」

ツ「トロピウス　コノエシティまでお願いね」

と5人のっているトロピウスは空へいった

そして．．．あるジムのパソコン　光が付いていた

中を見ると・・・

『せんごく☆ジムリーダー四天王チャット☆』

またかー！

くチャット内容く

Esper…ふわあ 仕事終わったー くそ チャンピオンめ 仕事押し付けやがってどこいったあの天才

Electricity…あはは 「ちょっと修行してくる」 って電話でいってそのままですよえ・・・

Grappler…何か旅にあったんだろうよ そこらへんだとSteel^{メタ}をまたなきやいけないか

Water…まあ 前回も前々回も来てないわけだけど 何があったのか

Steel…や・・・あ・・・
フレナさん

Flame…きましたね Steelさん ジムとかどうなったんですか！？

Steel…あの・・・ね・・・修行・・・して・・・最後の・・・
・おわ・・・ったら・・・あげ・・・た・・・
ヒウさん

sky…Steelらしいわね 今の實力じゃ・・・って思ったの？

Steel…いや・・・海・・・いった・・・あと・・・a・・・
団・・・とか・・・いうやつら・・・に・・・やられ・・・て・・・
・いま・・・の・・・まま・・・じゃ・・・だめ・・・だからって・・・
・・・・して・・・あげた

sky…んなッ！？ちひろちゃんに怪我はなかったんでしょね！？
Flame…ちひろちゃんだけですか！？

Steel…ちひろ・・・あゆむ・・・なみか・・・には・・・
怪我・・・ないけど・・・さいが・・・は・・・相手の攻撃・・・
で・・・海に・・・おち・・・た

sky…なッ！グラウンドオオオオオオオオ！！
ラウさん

Ground…なにッ！いじめてくれるの！？そうなの！？
ザードさん

Snow…までおちつけsky さいがくんは無事だったんだろ？

Steel…う…ん…いま…PlantとInse
ctと一緒に…いる

Snow…ああ だからオレの登場遅かったのか 突っ込む相手少
ないから

Electricity…登場とか言わないでよ…なにかこれ
って小説みたいじゃない

Ground…あはは なにってんのさElectricity
そんな非現実的な

※ポケモン自体非現実的です

Snow…次はInsectのどこか…大丈夫かな

sky…そうね…あそこは精神的にも肉体的にもきついわ よ

Plantはあんなところ通うわね

Rock…がははは！ノリとかじゃないかあ！
ストさん

Flame…なわけないじゃんRockさん ただたん心配だか
らでしょ？

sky…まっ そうじゃなかったらあんなところ行きたくないわよ
ねえ

Esper…ああ…いやあの場所は化け物の巣窟だった

Snow…そっか お前虫嫌いだったもんな

…終了

『α団と戦い ボス・ベータに敗れた あゆむ達 次の街コノエシ
ティでは一体何が起きるのか 次回「向かってみよう！」お楽し
みに！』

向かってみよう！

「コノエシティ」

セ「ついたよ！ここが僕の街 コノエシティ！」

と3人とジムリーダー二人はコノエシティにいた

あ「長かった・・・」

ツ「アリッソシティからコノエシティって遠いの・・・私の町ミシコナシティのほうが近いのよ」

な「なんで!？」

さ「順番が逆だろうに・・・」

セ「それは そう実力の差というものだね！」

ツ「それじゃあ なんでセクトを一番前にしなかったのかしら？」

セ「ひどいねツーちゃん」

と二人が言っていた つうか「ツーちゃん」 って略さないだろう普通は

「あーセクトさんだあ！」

「ほら！セクトさん来たよ！」

「セクトさーん!!」

と子供たちが呼んでる声がした

セ「ごめんねー 今すぐあけるねー」

と子供たちがいる前の建物のドアを開けた

セ「はい どうぞ 思いつき楽しんでね」

と子供達がはしゃいで走っていった

あ「あの・・・なんですか？」

ツ「セクトは虫タイプがエキスパートと言ってましたよね？その虫タイプ好きがいろんな虫タイプがいるの ここらへんじゃあ 見られないポケモンもいるから子供たちに開放してるのよ」

な「へえ・・・」

セ「さっ！みんなもージムはこの奥なんだ！」

とセクトさんが大声で言う

（建物内）

さ「へえ・・・さすがってところか・・・」

あ「たしかに 虫のエキスパートにして『森の王者』の人だよ
ね 虫タイプ多過ぎ」

な「・・・」

となみかさんがふさぎこんで震えていた

さ「どうしたんだ？」

あ「そっか 大丈夫なみか？」

な「・・・やだ・・・」

さ「はい？」

な「虫やだ虫やだ虫やだ虫やだ！！」

と走ってどこかにいった

あ「ってなみか！！」

あゆむはなみかのあとをおった

セ「あ おい まあ・・・そんな広くないからジムまでたどり着ける
か・・・むッ！？」

とセクトさんは目が光った

セ「あはは 新しいバタフリーだあ！待ってよバタフリーちゃん
！」

と走っていった

ツ「ロズレイド 草結びからつるのむち」

とセクトさんは草結びで転び つるのむちで近くまで引き寄せられた

ツ「セクト？今はジムまで案内するのよね？虫ポケモンにひきよせ
られてるんじゃないわよ？」

セ「あはは ツーちゃん容赦ないなあ・・・怖いから・・・止めて？」

一人だけ残ったさいがさんはポカーンとしていた

ツ「ごめんね セクトったら目を離したらすぐに虫ポケモンのところ
にいくのよ」

セ「僕にとっては自由にしてくれくれればいいのに」

ツ「それじゃあ 駄目だっていつてるのよ」

セ「あはは（笑）」

さ「あ・・・あの・・・」

とさいがさんは聞く

さ「お二人って仲いいですけど どういう関係なんですか？」

ツ「幼馴染よ ありがちな・・・ね・・・」

セ「僕のような一般市民とツーちゃんみたいな名家のお嬢様が幼馴染っていうのもおかしい気がするね」

さ「知る中で・・・チャンピオン家系の末裔と博士の一人娘が幼馴染っていうのありますよ」

まんまあゆむさん（チャンピオン家系の末裔）となみかさん（博士の一人娘）ではないですか

セ「まッ 世の中はいろいろあるもんだね」

と綺麗にまとめる まあそういうゆうことにしておくことだ

ツ「あら？ ジムが見えてきたわ 意外と早く着いたわね・・・」

セ「僕がそんな暴走してないからねえ」

自覚あるならやめればいいでしょうに

セ「ここで大半の挑戦者がいなくなるんだよー」

さ「えー・・・」

さいがさんどんびきです でしょうね

な「いやだいやだいやだいやだいやだいやだ」

あ「な・・・なみか・・・落ち着いて？」

とあゆむさんとなみかさんがジムの前にいました

さ「お前ら・・・ジムについてたのかよ」

あ「うん なみかが走って行った場所がここだったんだ」

なんという偶然で

さ「当の本人は」

あ「建物の前で止まってこのように虫嫌だっていつてるよ」

セ「もったいないなあ・・・虫ってほらこんなにかわいいのにさあ♪」

ツ「人それぞれですよ セクト」

セ「とりあえず 中にはいりなよ 中はそんなんでもないからさ」
あ「そういえば・・・」

とあゆむさんが何か言おうとしています

あ「二人同時には出来ないですよね・・・僕とさいがどっちが最初にやる？」

さ「重大だな・・・えっと ミレッドジムではあゆむが先で・・・」

あ「アスナジムでも僕が先だったね」

と二人それぞれのジムのことを思い出す

さ「ヒノウジムはダブルバトルだったし」

あ「ブリッザジムではさいが がさきでエニジムでは僕が先だったね」

さ「アリッソジムでは修行で貰ったから まあ・・・同時ということは・・・」

あ「さいが先だね どうぞ」

セ「決めては悪いけど 今日のうちに二人やっても全く平気だよ」
あ「& amp; ; さ」「え!？」

と二人は驚く

ツ「セクトはちひろちゃんに負けて以来 ポケモンを全部使わなくなったのよ」

な「なななななななんですか？」

とものすごく震え声で なみかさんが言う

セ「虫ポケモンが 傷ついちゃうからねー」

ツ「すごい勢いでちひろちゃん 勝ちちゃったから ちょっとトラウマになってるのよね」

セ「いやー あんなトレーナー見たことなかったよー」

あ「え・・・でも ポケモン全部使わないってどうやって戦うんですか？」

セ「3セットの2セットマッチで戦うんだよ」

さ「え・・・」

とまあ 簡単簡潔に話しましょう

スポーツなんかである 1セット2セットという言葉

「3セット2セットマッチ」と言うのは 3セットあったうち 2セットととれば勝ち というルール 覚えというて損はない・・・はずね

セ「そうすれば 最低でも2体 最高で3体までなんだよ ポケモンの交代はなし つまり ポケモンの能力 相性で決まるんだよね」
ツ「私とセクトは5匹まで持ってますから 2匹使うならそのまま3匹使えるし 3匹使ったとしても 一匹回復するだけとなるんですよ」

さ「へえ・・・」

セ「まあとは言っても 同時にとはできないからね どっちにしろ順番は必要ってことか まあ 二人ともおいでよ ジムには仕掛けしているやつだから二人同時にきてね」

とセクトさんがドアの向こうに消えた

ツ「しばらくしたら行ってね 今セクトがジムの仕掛け攻略中だから」

あ「エッ!? セクトさんも仕掛け攻略してるんですか!？」

ツ「とは言っても セクトが喜ぶ仕掛けだから すぐに攻略するのよね」

セ「もういいよー!」

とドアの向こうから セクトさんの声が聞こえた

ツ「行ってらっしゃい なみかちゃんのことは任せて」

あ「はい!」

さ「行くか!」

とあゆむ達はドアを開け ジムを攻略していった
な「やだよ こわいよお」

ツ「なみかちゃん こっちにいけば虫ポケモン近くで観ないわよ」
な「はい」

となみかさんツリーさんは観客席にいった
くセクトさんのところ」

セ「お疲れ様あ」

といていたさきあゆむとさいが
何か疲れているようです

あ「はぁ・・・はぁ・・・」

さ「俺・・・トラウマになりそう・・・」

何あったんでしょね 気になりますね

セ「それじゃ さいが君だよね このジムのルール 覚えてるよね？」

さ「はい・・・3セット2セットマッチですよね」

セ「そう それじゃ 3匹選んでねー！」

さ（さぁ・・・どいつを選ぼう？ まぁ典型的に クロバットは外
せない・・・交代は出来ないし・・・中間にでも入れておこう

あとはビブラーバに岩石封じ覚えてるから・・・あとは・・・ロ
トムを入れておくか）

としばらくたってから

「それではコノエジム ジムバトルを開始します 準備はよろしい
ですか？」

さ「大丈夫です」

セ「OKだよん」

「それでは はじめッ！」

さ「ロトム！！」

セ「スピアー！」

とポケモンをだす二人

さ「ロトム 電気ショック！！」

セ「スピアー！ ダブルニードル！！」

と技が炸裂

あ（ふうん・・・ロトム クロバット ビブラーバって順番かな？

タイプのにはロトムでもいいけるけど・・・これは・・・ゴリ押
しかなぁ・・・）

さ「くう・・・身代わりだ！」

「ろとと!!」

セ「それじゃ・・・ダメ押し!!」

あ（ありやりや・・・相手悪タイプ持ってたのか・・・身代わり消えちゃうしうん・・・これは負けるかもなあ・・・）

さ「くう・・・ロトム!!でんげきはだ!!」

セ「おっと やらせはしないさ スピアー!!ダメ押し!!」

とスピアーは電撃波を喰らいつつも攻撃をした

「ろ・・・ろ・・・と・・・」

さ「ロトム!!」

「ロトム戦闘不能! よって一回戦ジムリーダーの勝ち!」

セ「おつかれ☆スピアー 戻ってね」

さ「ごめんな・・・ロトム・・・お疲れ様」

「それでは二回戦を始めます!!」

さ「クロバット!!翼で打つ!!」

セ「ガーメイル!!サイケ光線だよ!!」

あ（また・・・でも今回はさいがには有利かな 効果抜群とかじゃなくてもね 相手のガーメイルまだ進化したてみたいだし でもサイケ光線覚えてるってことはLv32以上ってことなんだよね・・・・32まで進化させなかったのかな・・・）

「その頃観客席では」

な「あの・・・」

ツ「はい なんですか?」

な「相手のガーメイル サイケ光線覚えてるのはいいですけど最近進化したばかりですよね?」

ツ「あら・・・わかるのねえ・・・なんで?」

な「いやあ・・・私自分で言うのもなんですけど ポケモン以外全くダメで・・・ちーちゃんにはれるものなんてポケモンしかないんですよ」

ツ「うふ・・・ちひろちゃんにはれるものがあるだけで すごいと思いますよ・・・あのガーメイル自体 最近手に入れたものなのよ

ミノムッチの♂じゃないとガーマイルは出来ないから・・・あのガーマイルはね 最近になって♂を手に入れてものすごくレベル上げてたのよで進化したのがつい最近」

な「へえ・・・でも・・・なんでサイケ光線覚えてるんですか?？」

ツ「ああ・・・それがね・・・もうとっくに20超えてるんだけど進化しないなあって思っていたら あのガーマイルいつのまにか変わらないの石持っていてね うふふ面白かったわ あのときのセクト」

な「もしかしてそのときにはLv31くらいだったんですか?」

ツ「ええ 持たせないでレベルあげて やっと進化させたのよ」

セ「ガーマイル!!! 目覚めるパワー!!!」

さ「うわ・・・氷かよ・・・クロバット! 怪しい光からエアカッター!!!」

あ(うん・・・混乱にできて良い流れだ・・・)

セ「むむむむ ガーマイル!!! 目覚めるパワー!!!」

さ「これで終わりだッ! クロバット エアカッター!!!」

とガーマイルは倒れた

「ガーマイル戦闘不能 よって二回戦挑戦者の勝ち!!!」

さ「よしッ!!!」

セ「お疲れ様 ガーマイル」

「それでは 三回戦を開始します!!!」

さ「ビブラーバ! 岩石封じ!」

セ「ストライク! シザークロス!!!」

と繰り出す戦闘

あ(あちゃー ストライクだしちゃったからおしまいだね 早くつくかも・・・)

セ「ストライク! きりさく!!!」

さ「ビブラーバ! 超音波だ!」

しかし 超音波はストライクには効かなかった
さ「くッ・・・ビブラーバ! 竜の息吹!」

セ「おっと ストライク！シザークロスだ！」

どちらのワザもあたる しかしストライクは身動きが動きにくそうだった

セ「・・・麻痺・・・か」

さ「ええ 竜の息吹はそんな技ですからね ビブラーバ！岩石封じだッ！」

セ「ストライク！影分身！」

しかしストライクは動けなかった

セ「んな！？こんなときに！」

さ「いっけえー！」

と岩石封じが当たり砂煙が舞った 砂煙が見えなくなったあとそこに見えたのは たっているストライクだった

さ「そんな・・・」

セ「ふう 危ない危ない」

く観客席では

な「今のって・・・」

ツ「ええ・・・岩石封じの岩が来る前に とっさにまもるをしたんでしょね」

な「素早い判断ですね 虫タイプが好きだけに・・・」

ツ「ごめんねなみちゃん・・・そこ笑うところ？」

な「／／／／／いいっえ・・・気にしないでください」

あ（へえ・・・さすがジムリーダー 簡単には倒れないよね）

さ「ビブラーバ！竜の息吹！」

セ「ストライク！きりさく」

とさいがさん笑っていました なんでもでしょうね？

負けてない人が強い人に会うと 必然に笑うとかありますけど 違うよね？

さ「これで終わりだッ！ ビブラーバ！岩石封じ！！」

セ「なッ」

とストライクは倒れた

「ストライク戦闘不能！三回戦挑戦者の勝ち！ 2対1によって勝者挑戦者！！」

さ「よしッ！！」

セ「あちゃー やられちゃったなあ はいこれモストバッチ」

さ「ありがとうございます」

あ「さいがー おめでとう ギリって感じだったね」

さ「ああ あの岩石封じで倒れなかったときちよっとヒヤッとしたけどな」

セ「次は あゆむ君だね！」

あ「はい よろしくお願いします！」

さ「俺は 観客席にいつてるぞ」

あ「OK 解ったよ」

「それでは コノエジムジムバトルを開始します！準備はよろしいですか？」

あ「大丈夫です」

セ「OKだよん」

「でははじめッ！！」

あ「ヘルガー！火炎放射！」

セ「アリアドス！ふいうちだよ！」

「観客席では」

ツ「始まったわねー」

さ「よお！」

な「さいが君お疲れ様 勝利おめでとう」

ツ「おめでとうございます」

さ「ありがとう」

な「あゆむの戦闘始まったねー」

さ「どういう結果で終わるんだろうな」

ツ「楽しみですねー」

あ「ヘルガー！火の粉！！」

セ「アリアドス！虫食いだ！」

な「ありや 悪タイプ拔群・・・」

さ「炎で半減あっても これは痛いな」

ツ「次で落ちますねえ・・・」

と会話していた そんな観客席で 戦闘は

あ「くッ・・・ヘルガー！行けッ！」

と行ったあと ヘルガーはアリアドスに向かって勢い良く走った

セ「そんなんじゃ 虫食いの餌食になるだけだよ！」

あ「ヘルガー！炎の牙！！」

と言った瞬間 ヘルガーは疾風のごとく 走り 目に止まらないス

ピードでアリアドスに攻撃した

セ「なッ・・・」

とセクトさんがびっくりし終ったあとアリアドスは倒れた

「アリアドス戦闘不能！ 一回戦 挑戦者の勝ち！」

あ「ふう・・・ お疲れヘルガー」

くそんな頃観客席ではく

みんな鳩に豆鉄砲食らったような顔をしてました

さ「な・・・」

ツ「あれ・・・」

な「あんな瞬殺！？」

ですよねー

さ「ありえねえだろ？ あのアリアドス結構な強さなはずだぞ？」

ツ「ええ・・・愛用はしてなくても二番目にセクトが好きなポケモ

ンです あんな簡単にやられるはずが・・・」

「それでは 二回戦開始します！」

あ「ジバコイル！放電！！」

セ「ビークイン！パワージェム！！」

とぶつかり合う

さ「なみか ビークインお願いできるか？」

な「図鑑No.416 ビークイン はちのすポケモン ミツハニ
ーの進化系 特性はプレッシャー 体の穴の中で子供を育て ミツ

ハニーを操るフェロモンを出している 能力として虫ポケモンで飛行が付いている割にすばやさが低く 防御 特防 特攻が高い……
っておい！」

さ「いやあ 久しぶりに聞きたいなと思ってな」

ツ「まあ なみかちゃんってポケモンのことってすごいよね」

な「ありがとうございます!!」

そんな中

あ「ジバコイル マグネットボム!!」

セ「ビークイン! 攻撃指令!!」

と戦闘が繰り広げられていた

あ「さて……ジバコイル! そろそろかな?」

と言うと ジバコイルはこくんと頷いた

セ「? 一体何を……」

とセクトさんが見た先には とんでもないものがあつた

さ「なッ……」

な「えッ……」

ツ「……」

そう みんなが見たさきはジバコイルの頭上そこには電気の塊があつたのだ

あ「ジバコイル! チャージビーム!!」

と言い終わったあと 電気の塊から線が出て ビークインにいった
セ「なッ!!」

と言い終わったあと ビークインは倒れた

「ビークイン戦闘不能! 二回戦 挑戦者の勝ち! 2対0でよっ

て勝者挑戦者!!」

セ「そんな……」

とよれよれとセクトさんは倒れた

あ「セクトさん!?!」

ツ「大丈夫よ しばらくしたら治るから」

とツリーさんが来ていた

な「あゆむ！おめでとう！」

さ「おめでと」

あ「ありがとう」

さ「しかしあの電気の塊といい ヘルガーといい」

あ「いや うまくいくとは思ってなかったんだよ セクトさん強いし ちよつと僕的にはナシなんだけどね・・・」

セ「はあ・・・負けたのは仕方ないよ はいモストバッチ これで二人ともツーちゃんのジムだけだね」

とセクトさんが復活していた 早いですね

ツ「そうね・・・でもこれからすぐにとはいかないみたいよ」

あ「え・・・それってどういう・・・」

「セクトさん！！！」

とひとりの男が来た

セ「どうしたの？」

「今・・・今すぐ！テレビを見てください！！」

くテレビ前く

あ「なッ・・・」

さ「・・・」

な「そんな・・・」

と三人は絶句していた 内容はこう

『戦国地方・・・いや全国の諸君我々はα団！ これよりα団はポケモン殲滅を開始する！ ポケモンに頼るという考え方はもう古いのだ！新しい時代が！待っているのだ 手始めに我らは 戦力となるためサマンジャ洞窟にいるあるポケモンを殺す！！ハッハッハ止められまい 来たところで貴様らの運命は変わらぬ！！ 覚悟するがいい！！』

と言う内容だった

ツ「観客席から来る途中 ラジオで聞いたのよ」

あ「α団のやつら・・・ッ！！」

ぴぴぴぴぴぴぴぴ

と音がした

セ「ん？珍しい電話だ はいもしもしー」

「数時間前 とある場所で」

？「おい これ」

ウ「挑発と受け取っていいのかしらね？」

？「いいんじゃないですかー？だって明らかに挑発にしか聞こえないじゃないですかー」

？「ふん 安い挑発だな」

ウ「まッ！ 全員一致ってことでいいのよね！シャク？」

シ「当たり前だろ！チャンピオンからあとよろしく」とか言われているんだぞ！」

？「私は受け取ってないですけどねー」

シ「んな！？ずりいぞ ミント！！」

？「俺もだ」

ウ「あら？奇遇 私も」

シ「ダンキにウミまで！？」

あれ これウミさんいますね もしかしてこの4人・・・

ミ「シャクさんが受け取ったということは私たちもってことですよね ダンキさん」

ダ「だろうな あそこらへんチャンピオンめんどくさがりだからな」

ウ「それじゃ ジムリーダーに言っちゃいましょ！」

シ「おうよ！ ジムリーダー全員に次ぐ！ a団と言う奴らが 馬鹿なことを言い出した！この間にもサマンジャ洞窟にa団が来ている！即急にむかってくれ！！」

「コノエジム」

セ「聞こえた？」

ツ「ええ・・・サマンジャ洞窟ですね」

あ「あの・・・」

セ「んー？何？」

な「私たちも行きたいです!!」

さ「α団にはいろいろ恨みがありますから」

ツ「どうしましうかセクト」

セ「いいんじゃないかな 別にというかたぶん君らを強制的に連れていくと思うけどねー」

というセクトさん

ツ「そうですね きつとα団を止められるのはあなた達でしょうね」
な「ありがとうございます!」

さ「・・・」

とさいがさんはほっとしたような顔をした

あ「となるとあともう一人呼ばないとね・・・」

さ「ん? 誰をだ?」

あ「決まっているじゃないか さて今どこにいるんだろぅね? あの天才ー」

とある場所で

そこには一人いたポケモンと共に

人はニヤリと笑っていた

『コノエジムをクリアしたあゆむとさいが! 終わってみればα団の動きが!! ついにα団との全面バトル! 次回『最終決戦?』お楽しみに!!』

最終決戦？

「サマンジャ洞窟前」

「ベ」ときはきたッ！！　これから我らはファイアブイズ捕獲作戦へと開始する！私と　幹部はこの中にはいる　違う奴らはここで邪魔者の排除だ！」

α団全員「おーッ！！」

カ「ボス・・・」

イ「どうしたんだ？カイ」

カ「いや・・・　なんかやな予感がして・・・」

デ「あんた本当にリーダー？　そんなものの気のせいじゃないの　そんなんじゃない　ファイアブイズ捕まらないわよ」

カ「そうよね・・・」

とカイさんは何か心配していました

カ（あの時は理性ぶっ飛んでたけど　今冷静に考えたらあそこにしたのって・・・さいが・・・？　なんであっち側に・・・）

と考えてました　さいがさんの知り合いみたいだね

ベ「カイ　デルタ　イプシロン！」

三人「はい　なんでしようか　ボス」

ベ「これから我々は突入する　遅れるな」

三人「解りました」

カ（大丈夫よね　さいが・・・）

カイさんはこんなことしか考えてなかったです

「上空」

セ「しかし　α団ってやつら　なんでサマンジャ洞窟なんて選んだんだ？」

あ「あそこ　伝説のポケモン　ファイアブイズがいるみたいなんですよ」

ツ「ファイアブイズ！？　たしかにそんな伝承は聞いてますが　α団

はそんな伝承を信じたんですか？」

な「多分 何かつかんだんじゃないんですか？ あそこにファイアブイズがいるって証拠を」

さ「可能性はあるな それか 行ってみてか」

あ「それにしては 大規模なことしたね」

セ「となると なみかちゃんの説のほうが高いね」

とあゆむ なみか さいが セクト ツリーさん達がトロピウスにのってサマンジャ洞窟に向かっていました

あ「間に合えばいいけれど・・・」

ツ「間に合えばじゃありません 間に合わせるんです ファイアブイズを使わせる前に」

セ「そうだね ポケモンを滅亡させるって馬鹿な考えを止めさせなきゃいけないしね」

な「そういえばあゆむ ちーちゃんとは連絡ついた？」

あ「ううん 全く どこにいるのかしらないけどこの騒ぎ聞きつけてやってくるんじゃないかなたぶん」

さ「そんな アバウトな」

とお話しておりました

ツ「見えてきましたよ・・・」

「サマンジャ洞窟前」

ヒ「くう いくらザコでもこれじゃ 中に突入できないわ!!」

フ「さすがに多いですね・・・これじゃ・・・」

ス「わはっは！ いくらいようとも終わりあるのだ それまでやればいい！」

ザ「いやいや ストさん それじゃ 先にファイアブイズを使われてポケモンいなくなるんだって!!」

メ「状況・・・かん・・・がえ・・・て・・・」

ラ「あー もううざったいー」

とジムリーダー揃っていました

ツ「お待たせしましたー」

ヒ「遅いわよって　なんであゆむ君となみかちゃんとさいが君までいるのよ!!」

セ「仕方ないよー」

ヒ「仕方なくないわ!これはジムリーダーでやらされたこと!子供の力は借りないわ!!」

あ「ヒウさん・・・お願いします　サマンジャ洞窟に入らせてください!」

とあゆむは言う

ヒ「ダメよ!いくらこんな状況とはいえ　子供の力を借りるほどではないわ!!」

あ「それは・・・ちひろにも・・・いえますか?」

ヒ「うっ・・・」

あ「たしかに　俺はちひろとの立場が違います　でもフィアブイズはいったんです!助けてって　だから俺はフィアブイズを助けに行かなきゃ・・・」

ヒ「・・・分かったわ・・・でも無理はしないこと!勝てないと思ったらすぐ戻ってきなさい!」

あ「はい!」

ヒ「その二人も　言わずともついて行く気でしよう?」

二人とも沈黙でした

ヒ「あゆむ君一人で心配だったら行きなさい　さっき言ったとおり無理はしないでね　勝てないっておもったらすぐ戻ってきて　それが約束よ」

な&p;さ「はい!」

フ「それじゃ　通路ぐらいは作りましょうか!ギャロップ!火炎ぐるま!!」

サマンジャ洞窟までの入口がひらいた

あ「行ってきます!」

と三人は洞窟のなかに入っていくた

く入口前く

ジ「・・・」

あ「ジョーカーさん・・・」

リ「ふう・・・」

さ「リンカさん」

リ「行くつもり？」

ジ「ここから先は もう戻れないぞ」

さ「はい 絶対に止めなきゃいけません」

あ「助けてっていった・・・ファイアブイズを助けなきゃ」

リ「ふう そんな子に育てた覚えはないんだけどね・・・」

ジ「行ってこい 自分が信じたみちだと思ったらな」

あ「はい！」

く戻って」

ツ「ふふ 保護者ですか」

ヒ「はあ 本当は行かせたくないけどねー」

ス「がはは！もうここに残るしかないようだの！」

ザ「せめて三人が戻りやすいように 整えておかなきゃねー」

メ「攻撃・・・開始・・・」

くそのころ洞窟の中では」

べ「・・・ふん・・・鼠が入り込んだか・・・おいお前ら」

三人「はい ボス」

べ「駆除してこい・・・この作戦は必ず成功させるために・・・」

三人「解りましたボス」

とカイ デルタ イプシロンは入口方面にいった

デ「はあ ファイアブイズコノ目で見てみたかった・・・」

イ「片付ければすぐに済む話だろー」

カ「そうかな・・・おそらくボスは一人でファイアブイズを捕まえるつもりだよ」

イ「あーそのときオレら生きてんのかなー」

デ「知らないわよ そのときはそのときってほら鼠が来たわよー」
と足音が聞こえてきた そのさきにはサーナイトが

カ「サーナイト？なぜ・・・」

（うふ 付いてきてもらいますよ）

と三人一緒にレポートされた

くレポートさきく

そこはただの草原でした

あるひとりの少女が立っていました

（連れてきたわ）

？「おつかれー さーとと この人たちがα団の幹部？」

イ「いった・・・ここ・・・」

デ「誰よあんた・・・」

カ「・・・ここでおしまいね・・・」

デ「はあ！？何言つてのよカイ！！」

カ「私たちはこれまでではいけないことをたくさんしてきたわ！

その罪は払いきれないのよ・・・ここで・・・終わるしかないのよ・

・・・」

デ「意気地なしめッ！私だけでもどるわ！ボスのためにね！！そ

このッ！！いますぐ下の場所に戻しなさい！」

？「えーできない相談だなあ・・・だって・・・」

デ「だって・・・」

とデルタはいきなり倒れた

？「ここで警察に突き出す予定だもん」

イ「なッ お前あのと・・・」

とイプシロンも倒れた

？「遅い遅い はあ あんたが最後の一人だね でも自分のしたこ

とちちゃんとわかってるようだね」

カ「ええ・・・あなたさいがには会う？」

？「？うん」

カ「行ってくれるかな あなたを家族と別れさせてゴメンねって」

？「・・・ふう・・・ 解った言っておくよ」

と少女は消えた

カ(ごめんね・・・さいが・・・)
　　サマンジャ洞窟)

「なんだよこいつら・・・」

とα団の団員が言いました

「誰だよ　なんでこんな強いんだよ!!」

ヒ「誰だって!?　あんたら本当に戦国地方の人?　耳ほじくって
よく聞きなさい!!」

ス「がはは!　ミレッドジムジムリーダー!通称岩石の男!みんな
からはストさんと言われておるぞ!」

フ「アスナジムジムリーダー　通称ファイアーガールのフレナ!」

ヒ「ヒノウジムジムリーダー　通称スカイガーディアンのはうよ!」

ザ「ブリッザジムジムリーダー　通称トランスペアレンシースノウ
のザードだ!」

ラ「エニジムジムリーダー　通称グラウンドガーディアンのはうだ
よ!」

メ「アリッソ・・・ジム・・・ジムリーダー・・・通称・・・鋼鉄の
騎士・・・メタル・・・」

セ「コノエジムジムリーダー　通称森の王者のセクト!」

ツ「ミシコナジムジムリーダー　通称プラントプリンセスのツリ
ーですわ」

「なッ!!ジムリーダー!?なんで」

?「なんでも何も　喧嘩を売ったのはお前たちじゃないか」

フ「この声・・・」

メ「遅い・・・登場・・・」

ラ「張本人たちがおくれちゃだめじゃん」

と周りの木4本には4つの影がありました

「誰だ　てめえ!!」

?「ジムリーダーを知らないようじゃ　私たちのことも知らないよ
うね」

?「仕方ないんじゃないですかー　ぶっ飛ばせばいい話だし」

？「ふん・・・」

「名を名乗れえ！」

シ「あはは ジムリーダーも僕たちも忘れてもらっちゃ困るなあ
僕は四天王が一人！エスパーパーフェクトのシャクだ！」

ウ「同じく！四天王が一人 ウォーターダンサーのウミよ！」

ミ「同じく 四天王が一人 電気使いのお嬢様のミントです☆」

ダ「同じく・・・四天王が一人・・・すべてを極めた男 ダンキだ」
シ「覚悟するんだな！！」

と四天王が降りてきた

ス「さて 戦いの続きだア！ イワーク！！岩石封じ！！」

フ「キュウコン！！火炎放射！！」

ヒ「オオスバメ がむしゃら！トゲキッス エアスラッシュ！！」
ザ「マンムー！！ふぶきだ！！」

ラ「カバルドン 砂地獄だよ！！」

メ「エアムード・・・はがねの翼・・・」

セ「ビークイン 攻撃指令！！」

ツ「キレイハナ マジカルリーフですわ」

シ「エーフィ サイコネシス！！」

ウ「ミロカロス 水の波動よ！！」

ミ「レントラー スパークですよ！」

ダ「ドクログ 瓦割だ！」

と一斉攻撃 しかし数は減らない

ダ「ちい・・・数が多い・・・」

ミ「これだけでも足りないのでしょうか・・・」

？「足りなくないじゃん いま互角って感じだよ みんな」
ス「ほう」

フ「ああ！！」

ヒ「来たわね・・・」

？「あは☆ こんなんで行き詰まったらだめじゃん 全くダメ
私なら一発でできるけどねー」

ザ「ずいぶんな物言いだな」

ラ「いつも通りの自信・・・」

「誰だてめえ!!」

とα団員が言う お約束ですね

？「知らないなら知らないままでいいよ 別に知ったとことで頭が良くなるはずないもんねー」

「てめえ!!」

と攻撃しようとした瞬間 ポケモンは戦闘不能に

？「遅いねー 判断が 遅い そんなんじゃ 今の私を止められな
いよー」

メ「さ・・・すが・・・？」

セ「だね!」

ツ「まあでも 登場は遅いですがね」

？「ぶー だって仕方ないでしょー ここから遠かったんだよ修行
場がー」

シ「それでも間に合わるもんだろーが!!」

ウ「まあまあ 良いタイミングで来てくれたんだから いいじゃな
いのー」

「なんだよ・・・この国・・・」

少女は こう言いました それなら 教えてあげる

？「私はー・・・」

くサマンジャ洞窟内く

あ「・・・おかしい・・・」

さ「だな・・・」

な「え・・・え・・・何が？」

となみかさんが言う

あ「敵が来ないはずないんだよ α団にもうバレているはずなのに」
な「たんに気づいてないだけかもよ？」

そんなことをいう

いや いったんだよ？なのに謎の少女にやられちゃったんだよ？

あ「そうだといいいけど・・・」

（奥地）

べ「これが・・・ファイアブイズ・・・ん・・・？」

あ「ついた・・・」

な「あれっ!!」

さ「・・・」

と三人が奥地につきました

べ「ふん・・・役に立たなかったか・・・まあいい　お前らを死地へ案内しよう」

あ「そんなことはさせないよ　絶対に！コモルー・・・いやボーマンダ！」

さ「いけッ！フライゴン！」

な「デイちゃん！出番だよ!!」

とコモルーはボーマンダに　ビブラーバはフライゴンに　ガーディはウインディに進化した

あ「ボーマンダ　雷の牙！」

さ「フライゴンドラゴンクロー！」

な「デイちゃん！火炎放射ッ！」

と三人は同時攻撃した

しかし

べ「ドンカラス　怪しい風」

と一風された

あ「なッ・・・」

べ「どんなに挑んでも無駄だ　この私を止めることはな・・・黙ってみてるがいい」

あ「黙ってみてる？　そんなこと出来わけないじゃないか」

べ「何？」

あ「ポケモンがそう望んでいるなら止めないよ　そんなものの迷惑に決まっている・・・でもファイアブイズは・・・ファイアブイズはたしかにいったんだ　助けてって　嫌がっているのを止めなくてなにが

悪いんだ!」

べ「戯言を」

な「戯言じゃないッ! 絶対に戯言じゃないんだから! ファイアブイズはあゆむの助けを求めている それだけは絶対なんだから!」

べ「それで? お前たちはどうするんだ?」

な「勝つの! 絶対に! そしてファイアブイズを助けるんだから!」

べ「ふん 弱かったお前らがこの私を倒すねえ」

とベータは鼻で笑う

な「弱くたっていい でも 私にも あゆむにもさいが君にも出来ることはあるのよ!」

さ「あーあ さっきから黙って聞いていりゃ ほんとやだな」

べ「ほう お前はカイがさらってきた子供か? なぜこんなところにいるのか?」

さ「ポケモンを滅ばさないためだよ 生まれてきてから今まで ポケモンに頼りっぱなしだ リンカさんと出会えたことも あゆむなみか ちひろと会えたことも すべてな だから俺はいま腹が立ってんだよ お前らのくだらない空想のために育てられたことをなッ!」

べ「ならかかってくるがいい まあ無理だとはおもうがな」

あ「そんなことはない! ラグラージ! 濁流!」

な「ネイちゃん! サイコキネシス!」

さ「ドサイドン! リーフストームだ!」

と三人が攻撃したあとにベータはこう言った

べ「バンギラス じしんから岩雪崩」

どっしゃーん がらがら

そんな音が響いた

べ「ふん これで邪魔者は居なくなったか」

あ「だ・・・れが・・・いなくな・・・ったて?」

さ「そう・・・だな」

べ「なっ 生き残っていたのか?」

あ「あはは・・・でも足が全く動かないや・・・」

さ「奇遇だな 俺は手が全く動かん」

あ「なみかは・・・？」

さ「大きい岩の下敷きになってる といっても両足両腕頭は下敷きにはなってるねー」

あ「そうか・・・ 助けな・・・うっ」

べ「ふん 生き残っていても 死にかけか なら手を出す必要もない」

さ「なんだ・・・と・・・」

とさいがさんは少しだけ走馬灯を見た ここに到着する直前 リンカさんにあつたことを思い出した

リ『行くつもり？』

さ『はい 絶対に止めなきゃいけません』

リ『はあ そんな子に育て覚えはないけど・・・なら行きなさい

必ず止めてね』

さ（リンカ・・・さん・・・）

とさいがさんが倒れた

あ「さいが・・・ッ・・・」

あゆむさんも意識が失った

べ「あつけないものだな こんなことで死ぬとは」

？「あれー？ 勝ってると思ったら 負けてるじゃん なんだダメじゃん」

べ「誰だ！どこにいる！！」

？「はあ！？ 入口はひとつしかないんだからそこしかないじゃん ばっかじゃないのー？」

べ「ふん こいつらの 仲間か お前も死地に案内してやろう」

？「それはないなー だって今の見る限り私の方が強いもん」

べ「たいした自信だな 名乗れ貴様！」

？「効かなくなっただけいいじゃん 賢くなるわけでもないしー」

と少女はいった そして入口から来たのだ

べ「貴様は……」

？「はぁー 知らないなら教えてあげるよ 私は……」

と少女は サマンジャ洞窟まで言ったことをそのまま言った もう
みなさん分かっているでしょう？

ち「私は 戦国地方第12回チャンピオン 通称「ゴーストジーニアス」のちひろ！ ベータッ！お前の野望 人とポケモンそしてフ
ィアブイズの平和のために止めに来た！」

そう ちひろさんがやってきたのだった

『別行動だったちひろが戻ってきた ベータの野望そして
フィアブイズの運命 あゆむ なみか さいがの運命は？

最終決戦もいよいよ大詰め！次回「最終決戦？」お楽しみに！』

最終決戦？

ア「・・・洞窟の方騒がしいなあ　・・・いってみようかな！」
とアリネちゃんが行く

入口には二人の女の人（？）がいた

マ「あゆむさん達大丈夫でしょうか？」

コ「大丈夫でしょ　やられるものじゃないわよ」

ア「あゆむお兄ちゃん！？」

とアリネちゃんは入口を突っ走ろうとする

マ「ダメですよ　そっちにいったちゃ！　危険ですから！」

ア「やだあ！アリネも行くのッ！」

コ「はいはい　そっちにいけないじゃないの」

と女（？）の Kou さんが言った

コ「でもそっちには　こわーいおじさんたちがうようよしていて
あなたを丸のみしちゃうかもよー？」

ア「にやう・・・アリネ・・・我慢する・・・」

マ「よかった・・・アリネちゃん　あゆむさん達はきっと大丈夫で
すよ　私たちにできることは待ってることだけなんです・・・」

コ「大丈夫よ　あの子達なら必ず帰ってくるから」

ア「うん・・・」

くサマンジャ洞窟　奥地く

ベ「貴様が　チャンピオン？馬鹿げてるにもほどがあるな」

ち「だよねー　でも事実なんだよねー」

ベ「ドンカラス　悪のほう」

と攻撃した

ベ「チャンピオンといっても　このくらいか」

ち「えー？　こんなんで殴られたんじゃ　ちよっとむかつくなー」
ベ「なッ！？」

とちひろさんは言った

ち「軽い軽い♪ ルピ！クロスポイズン ワッコエナジーボール！
ラル サイコキネシス！」

べ「ふん 所詮それだけのこと ドンカラス悪のはどう バンギラ
ス じしん」

ち「それだけじゃ ないんだよ」

とちひろの後ろから シャドーボール 悪のはどう ふぶきが来た
べ「なッ！」

ち「前の私となめないでよ これが・・・」

と後ろのほうから ポケモンが来る

ち「これが ゴーストジーニアスのチームッ！」

スコルピ ワタツコ サーナイトの他 ムウマージ ミカルゲ ユ
キメノコがいた

ち「ルカッ！怪しい風！ ムウ！シャドーボール！ ユツキー！吹
雪！！」

と攻撃する 3匹

ち「ふう・・・まだまだだよねえ・・・ ラル」

（分かったわ）

とラルは何かをし始めた ちひろの後ろには あゆむ なみか さ
いがの3人がいた つまりテレポートさせたんだね

ち「・・・お兄ちゃんは足 さいが兄ちゃんは手 なみか姉ちゃ
んは心臓 肺などの器官系・・・ゆるせない・・・」

べ「ふん・・・それは あいつらが邪魔をするからだ・・・お前も
そいつらと一緒にしてやろう ごはあ！」

とベータ 攻撃された

ち「うるさいうるさいうるさいッ！！何か世の中に不満があるから
集まって それをポケモン達を使って晴れさせてッ！拳句の果てに
は ポケモンを滅ぼすッ！？気前のいいことってんじゃないよッ
！お前らみたいな奴がいるからいるからッ！・・・お兄ちゃん なみ
か姉ちゃん さいが兄ちゃん・・・ピオは・・・こんなことにはな
らなかったんだ！」

べ「集まって何が悪いんだ？」

ち「なッ」

べ「反逆の無い 国など もうコノ世にはない あるのは 平和と戦争が一緒にある国だけだ」

ち「うるさいッ！ルピ！どくばり！！」

と攻撃する そして

べ「ドンカラス 燕返し バンギラス じしん」

ち「ああ もう！強行突破しかないの！？ ユッキー！吹雪！」

とドンカラス バンギラスは凍ってしまった

べ「・・・私が・・・負けただど？」

ち「ポケモン勝負は 技 相性 能力・・・いろいろな結果で終わるけど 結果はそのどれでもない 心で決まるものだ 心を鍛えてなお 能力相性技が決まるもの それは一番重要なことよ ベータ

大人しく警察に行ってもらいましょうか！」

べ「・・・それは・・・どうかな・・・チリーン行けッ！」

とチリーンがちひろの後ろにいた

ち「なッ 後ろ・・・！」

と行ったあととはもう遅い チリーンの攻撃はちひろに直撃したのだち「ああああああああッ！！」

と悲鳴をあげたあと ちひろは倒れてしまった

（ちひろちゃんに何をしたの！）

とユキメノコが言う

べ「もう こんなマネをしないようにな 頭の中をちよつといじつ

たのさ 少しいじれば 信号は送られない 仮定の判断だったがどうやら正解したみたいだな」

ち「う・・・る・・・さ・・・い・・・ま・・・だ・・・しん・・・で・・・」

（今 喋ってはダメ！）

べ「それでも 意識があるか・・・ならもう一回やっておくか？」

ち「ばっか・・・じゃ・・・ないの・・・？あた・・・ま・・・や

った・・・ところ・・・で・・・あたま・・・の・・・なか・・・
けさ・・・ないと・・・しな・・・な・・・」

とちひろさんは息はしているものの 言葉はでなくなった

（許せないわ！）

ベ「ほう しかし一体何ができる？ 主人をもたずなにができる？」
？「出来ることは・・・ある・・・」

と聞き慣れないような声がでた

ベ「な・・・まさか・・・」

フィ「我が名はファイアブイズ 戦国地方最強のポケモン也」

ベ「やっと・・・やっと目覚めた！ファイアブイズよ！われに力を・・・」

と言った瞬間ビームのようなものが出た

ベ「これが・・・最強の力・・・」

とベタは倒れた

フィ「今の技は「エイト光線」の百万分の一の力也 本当にやると
世界を滅びかねない・・・ふむ 下半身 腕 内蔵 頭・・・
ちようど良い也」

（な・・・なにがでしようか？）

とユキメノコが聞く

フィ「ふむ 訳はおそらくこの4人氣づくはずだから聞くといい
我はこいつらのために眠らないといけない 邪魔者が入らぬように
な」

とファイアブイズは言った

「あゆむの夢の中」

・・・ああ どうなったんだろう 僕 一体ね

ベータの攻撃で足が動かなくなったのは覚えてるんだけどなー
そこから・・・意識は飛んでるのかな・・・

そうだ 早く起きないと なみかが・・・なみかが

フィ「今 起きてもなみかちゃんを助けられない」

え・・・君は？・・・もしかしてファイアブイズ？

ファイ「そう 我こそファイアブイズ 戦国地方最強のポケモン」

・・・そっか・・・ごめん 僕は君の約束を守れなかった

ファイ「何を言っている あゆむ君は立派に約束を果たしてくれた私を助けてくれた」

でも・・・僕はベータを前に何も出来なかった・・・

ファイ「それでもだ 私のところまで来てくれた それだけでもう助けてくれたのも当然だ」

・・・

ファイ「しかし 懐かしい ちひろちゃんは 先頭きって歩いてたっけ？遊びを考えるのもちひろちゃんだった さいがくんは誰かの視線を感じてたけど 楽しく遊んでたなあ ちひろちゃんとさいがくんはその頃から仲がよかったのよね なみかちゃんは私を憎んでいたながらも 一緒に遊んでくれた 嬉しかったなあ」

え・・・まって・・・なみか達のことを知っているの？

ファイ「知っているも何も 一緒に遊んだのよ・・・そっか・・・小さい頃のことブルクに封じられてるのね・・・仕方のないことねブルク？小さい頃？」

ファイ「ううん 今は何も知らなくていい ただ生きて欲しいだけ」
・・・でも・・・なみかは・・・

ファイ「ちひろちゃんもなみかちゃんも生死のところまでいっている だからねこれは私のほんのお礼なの」

え・・・？それって・・・

ファイ「動かなかった足も 腕も動くようになるよ まあ・・・ちよつとポケモンの性質はでちやかもだけど・・・普通に暮らしててなんの問題も無い ただ生きていられるから」

まってよ・・・それじゃ・・・！

ファイ「元々 時間がなかったの これは運命なのかもね みんなの中で生きられるならそれでいい」

待って まだ 聞きたいことが！

ファイ「元気になったら ブルクのところに行って 全てを知ってい

るのはブルクだから・・・」

~~~~~

ぱち　とあゆむは目を覚めた

「ポケモンセンター」

目覚めた場所は　ヒノウシティのポケモンセンター

あ「・・・あれ・・・？」

ヒ「ああー！ー！起きたーッ！」

とヒウさんの声が響いた

あ「え・・・？？？」

ヒ「ああ　混乱しちゃうよね　ごめんね　まずここはヒノウシティのポケモンセンター・・・OK」

あ「はい」

と頷く

ヒ「あなた達は　サマンジャ洞窟の戦いにおいて　ベータを止めフイアブイズを守った・・・ここは推測だけど・・・」

あ「・・・夢じゃなかったんだ・・・」

ヒ「ああ　大丈夫？　五臓満足動く？」

あ「そういえば・・・足が・・・」

と足を動かす　あゆむ

あ「・・・？」

ヒ「どうしたの！何か悪いの！」

あ「いや・・・」

とあゆむは違和感を覚えました　がそのあとで

さ「・・・ここは・・・」

ヒ「さいがくんも起きたね　ここはヒノウシティのポケモンセンター　サマンジャ洞窟で戦った　覚えてる？」

さ「はい・・・？」

とさいがさんは手を見つめる

さ「おい　あゆむ」

あ「気づいた？　僕もおんなじ」

さ「ふーん・・・あとはこの二人か？」

あ「そうだよ　ちひろはなんで倒れたか知らないけど」

ヒ「何よー二人して進めないでよー」

とヒウさんが言うのとベットから黒い影が出た

まあ　わかるでしょう　ちひろさんが飛び起きたんですよ

ち「ちひろ　大復活！」

あ「おめでとー」

さ「（ぱちぱち）」

ち「ふふー」

これで3人残るは　なみかさんだけとなりました

な「むにゃ・・・もう食べられませんかー」

いい夢見てますね　内蔵ダメになったあとにそんな夢ですか

ヒ「よかったー　みんなちゃんと生きてるわね　心配したんだからー」

あ「・・・あのー　あの戦いから一体何日寝てましたか？」

ヒ「まるっと一週間よ！」

一週間も寝てましたかー　すごいですねー

さ「一週間・・・」

ち「そんだけ寝ればもう　大丈夫！」

あ「ダメだよ　ちひろもう少しだけ安静にしようね」

ヒ「そうよ　ちひろちゃん　安静にしててね　どこかで傷口開いた

ーとか言わせないんだから　リーグも近いしね」

あ「そういば　リーグっていつです？」

ヒ「もう2週間すぎたわ　あとバッチ　ひとつでしょう？　ジョー

イさんの話では2～3日後には退院出来るから　そのあとツリーちゃんのところに行ってね」

さ「解りました」

な「・・・？　おはよー」

あ「おはようなみか　いい夢見られた？」

な「んー・・・うん・・・」

ち「なみか姉ちゃん おはよーッ！」

な「おはよー ちーちゃん」

『さてさて 最終決戦どうでしたか？

あっけなかったですね そうですね！

それでは次回はいよいよ最後のジム 一体どうなるんでしょうか？

次回「勝ってみよう！」 お楽しみに！」

## 勝ってみよう！

最終決戦から数日 あゆむ達はすっかり元気になりましたとさ

あ「さて！次はミシコナシティだね！」

な「いよいよ最後のバッチだね！頑張ってね！あゆむ さいが君！」

さ「おう・・・」

ち「それじゃ レック 小さくなる！」

な&amp;mp;さ「それは止めて」

と二人息が揃った うん今日も良好だね！

ち「なんでさー」

さ「当たり前だ そんなもん街中でだすな」

ち「だから小さくなるっていったじゃーん レックは血のにじむ修行により小さくなるを取得した他 自由に大きさを変えられるんだよ！」

すごいですね もともと覚えない小さくなるを覚えたほかそんなものまで習得するとは

あ「まあ いいじゃないか一度に運べるっていったらレックだけだしさ」

さ「たしかにそうだが・・・」

ち「有言実行！ レック小さくなる！」

とレックが出てきて小さくなった

ち「さあ！出発だよ！早く乗って」

な「伝説のポケモンなのになあ・・・」

となみかさんがつぶやく

伝説のポケモンを街に移動するだけのために使うとは

ちひろさん恐ろしい子！

ミシコナジム

ツ「来ましたね・・・」

セ「ついにー？」

ミ「楽しみ！」

とツリーさんセクトさん 前々回ちょびつとでてきたミントさんがいます

ミ「お姉さま いったいどうやって倒すの？」

ミントさんツリーさんの妹でした

あ「失礼しまーす」

ツ「いらっしやいミシコナジムへ」

さ「あのー・・・」

とさいがさんが話しかける

さ「ジムの外にあるお城みたいなのは？」

だそうです 一体なんでしょうね？ なんでお城みたいのがあるんでしょうね？

ツ「あれは 私の家なんですよー」

ミ「それで私の家なのよー」

とツリーさんミントさんが言う  
な「え？」

ち「だからいったじゃないかー ツリーさんとミントさんはこの国の一国一城のお姫様で 現在はお嬢様って」

どっちもですか！ どっちもなんですか！

ち「でもツリーさんもミントさんも親の七光りじゃないのがすごいよね 普通に負けるかと思ったもん・・・」

あ「・・・勝てるかな・・・」

と素で考えてます まあちひろさんチャンピオンですしね！

ツ「大丈夫ですよ 全力で戦えばいいことです まあ私も全力出しますけどね・・・」

笑顔なのに怖いですツリーさん

あ「それじゃ 最初はさいがだね」

さ「おう それじゃ よろしくお願いします！」

ツ「はい それではこちらですよ」

数十分後

さ「……これは卑怯だ」

ツ「勝ち勝ちですよ はいグラスバッチ」

さいがさん無事に勝ったようですがなんか卑怯なてを使ったみたいです

あ「お疲れさいが 最後みちづれとは……」

さ「今の俺をせめるな……」

だそうです

ツ「いいですよ あゆむ君 続けてお相手します」

あ「ありがとうございます!」

さ「卑怯なては使うなよ……」

あ「頑張るよ……」

と言うとあゆむさんはツリーさんのところまでいった

「それではミシコナジムジム戦を開始します 準備はよろしいですか?」

あ「はい」

ツ「大丈夫です」

「では はじめ!」

あ「ボーマンダ エアカッター!」

ツ「ユレイドル! 原子の力!」

とユレイドルのほうが有利です草有効でも岩で半減されますからね  
ちなみに炎もダメです

ユレイドルの対処法は虫とか格闘の技でガンガンいこうぜ!で攻めるしかないですね

あ「……ボーマンダ! 戻って……ジバコイル!」

と入れ替えたあゆむさん あのままゴリ押しはきついですね

ツ「でもこっちは技は豊富なんですよ……ユレイドル! 地震!」

あ「ジバコイル! 電磁浮遊!」

とひと足早くジバコイルが先制でした

ツ「無効……ですか それなら怪しい光!」

あ「混乱!……でも……」



とジバコイルは混乱が治った

ツ「キーの実ですか・・・」

あ「はい！反撃開始だ！ジバコイル！シグナルビーム！」

と反撃するあゆむさん

（観客席では）

な「ユレイドルって耐久型だから　ゴリ押ししかないよねえ・・・」  
ち「しかも炎出したら原子の力でおしまいだしねー」

そのころ戦闘では・・・

ツ「エナジーボール！」

あ「シグナルビーム！」

とユレイドルは倒れた

「ユレイドル　戦闘不能！」

ツ「お疲れ様です　ユレイドル　ロズレイド！日本晴れからウェザーボール！」

と日本晴れで炎タイプになったウェザーボールはジバコイルに直撃した

あ「ジバコイル！・・・もう少しだけ頑張ってくれるか？　シグナルビーム！」

と当て　その次のウェザーボールでジバコイルは倒れてしまった

「ジバコイル戦闘不能！」

あ「お疲れ様　ボーマンダ！燕返し！」

ツ「炎タイプにやられないタイプで来ましたね・・・でも！ロズレイドどくどく！」

あ「なッ・・・ボーマンダ！エアカッター！」

と言うあゆむ　でもボーマンダは苦しそうだ

ツ「うふふ・・・ロズレイド！草結び！」

あ「ボーマンダ！エアカッター！」

と攻撃を繰り返す二人

少し時間が経ち

ボーマンダ　ロズレイド同時に倒れた

ボーマンダロズレイド 戦闘不能！」

あ(さて・・・こっちに残っているのはラグラージ ユキノオー  
ヘルガー ソルロック・・・相性的にラグラージ ソルロックは出  
したくない・・・でも炎タイプも出してくると仮定したらユキノオ  
ーもまずい・・・かといってヘルガーは要だし・・・ここは・・・  
・)「ソルロック!炎の渦だ!」

ツ「ラフレシア! 花びらのまいですよ!」

と攻撃を与える

あ「ソルロック! ロックカットからサイコパワー・・・そしてサ  
イコウェーブだ!」

ツ「ラフレシア! ギガドレイン!」

あ「ツ・・・ソルロック!瞑想から・・・サイコキネシス!」

ツ「うふふ・・・お疲れ様ですよ ラフレシア」

ラフレシアは倒れた

ミ「・・・これからね・・・」

セ「そうだねー」

ち「あーあー」

な「さいが君の時もここまでは楽勝だったよね」

さ「だな」

と言うみなさん

ミ「お姉さまにとって トロピウス キレイハナは手持ちの中でも  
別核 そのなかでもキレイハナは最強を誇る」

セ「まあツーちゃん 本当は四天王にも入れる強さだったけど・・・  
」

ミ「お姉さまの実力は私を上回り ウミさんやシャクさんを超え  
ダンキさんと同じくらいの強さを持っているの」

な「それじゃ なぜジムリーダーを?」

となみかさんがきく

ち「なんでも 妹にジムを任せられないからだって 表向きは」  
さ「表向き・・・ということとは本当の理由は?」

とさいがさんが聞くとちひろさんはセクトさんに聞こえないようこ  
う言った

ち「セクトさんといっしょの立場にいたいからだって」

さ「それで・・・」

な「きゃー!」

とかやってる間にほら 大変なことになってるよ

ツ「トロピウス! マジカルリーフツ!」

あ「ラグラージ! 冷凍ビーム!」

完全に不利なラグラージ出してますが これも作戦の内なのでしょう  
冷凍ビーム使ってるしね

ツ「ふふ そんなものでは倒れませんよ・・・トロピウス エナジ  
ーボール!」

あ「ラグラージ! 穴を掘るでよけろ! そのあと冷凍ビーム!」

ツ「なるほど・・・そういうよけ方は初めてですネ・・・でも!  
トロピウス! エアカッター!」

とラグラージに直撃する

あ「・・・お疲れ様 ラグラージ」

とラグラージは倒れる

ツ「うふふ・・・」

あ「さて・・・ユキノオー! 冷凍ビーム!」

ツ「ツ・・・! トロピウス!」

とトロピウスは倒れた どうやら冷凍ビームは強力のようでしたね  
あ「これで最後の一匹ですネ」

ツ「そうね・・・キレイハナ!」

ミ「キレイハナ・・・私にとってああいうポケモンすごく楽なきが  
するのよ」

セ「でもツーちゃんのポケモンは一味違うよねー 僕何回か戦った  
けど勝ったことが一度もないんだ」

さ「え・・・」

な「そんなにですか? もうツリーさん凄すぎじゃないですか」

ち「ジムリーダーの中で一番尊敬する人はツリーさんじゃないかな  
その次にメタルさんとかザードさんとか」

とちひろさんがいう　ザードさん覚えてたんですね

ツ「キレイハナ！　ベ泥爆弾！」

あ「ユキノオー！　冷凍ビーム！！」

ツ「キレイハナ！　どくどく！」

とユキノオーが毒状態になった

あ「猛毒か・・・」

ツ「あら・・・察しがいいわね」

あ「ユキノオー！　冷凍パンチ！」

ツ「キレイハナ　守る！」

と繰り広げられる戦闘　数分経ち

ユキノオーは倒れた

あ「ヘルガー！　火炎放射！」

ツ「キレイハナ　ドレインパンチ！」

と攻撃

あ「くっ　やっぱり・・・ヘルガー！　遠吠えから炎の牙！」

ツ「キレイハナ　ドレインパンチですよ！」

攻撃が続く　勝負

ツ「さて・・・そろそろですかね？　ドレインパンチ！」

あ「ヘルガー！　火炎放射！」

と攻撃するが　長くはもたない

さ「すごいな・・・」

な「さいがくんは負けちゃうからここで道連れ使ったんだよね？」

さ「・・・」

だそうです　そりゃ　ものすごく強いポケモンだったらねえ・・・

ツ「これでおしまいです！」

と言うとヘルガーが倒れた

あ「・・・・・・・・」

ツ「どうしました？　もう一匹出さないのですか？」

あ「いえ・・・ヘルガーはまだ瀕死ではないですから」と言う

とヘルガーは立ち上がった

ツ「な・・・」

あ「ヘルガー！自分に火炎放射だ！」

と言うと自分で火炎放射に当たった

セ「なるほど 特性貫い火だね でも大胆なことするなあ」

あ「日本晴れ！から・・・火炎放射！」

という

ツ「くツ・・・クレイハナ・・・！」

とクレイハナは倒れた

「クレイハナ戦闘不能！ よって勝者挑戦者！」

あ「ふう・・・」

ツ「最後はしてやられたわ はいグラスバッチよ 次はいよいよ

リーグ戦ね」

ミ「二人のどちらかがくるの待ってるよ」

さ「もし 勝ち進めば・・・」

あ「僕とさいがとの再戦だね」

ち「・・・」

な「どうしたの？ちーちゃん」

ち「なんでもないよ なみかお姉ちゃん！」

セ「勝ち進めばって言うてるところからルールは知ってるんだね？」

とセクトさんが言う

さ「いや詳しくは・・・」

セ「あら？」

とこける なぜ知らないし・・・

まあでま 軽く説明を

リーグ戦は2年に一度の感じでやっている

四天王の前に 挑戦者のリーグがある

参加条件はバッチ5以上 最低でも5こは集めなきゃいけない

そしてリーグ戦 そこで優勝した人だけが四天王に挑める

そしてVS四天王 ここからは負けたら終わりの世界  
勝ち抜き戦で回復あり

そしてその四天王全員に勝てたものだけがチャンピオンに挑める  
ちなみに四天王は

今ここにいるミントさん

ブリッザシティで会ったウミさん

そして最終決戦で会ったシャクさんダンキさんである

そしてチャンピオンはなんと言ってもあのちひろさんなのだ  
はてさて いったいどうなることやら？

とある場所

ある場所でパソコン画面がでてた そこには・

『せんごく☆ジムリーダー四天王チャット☆』

あ・・・久しぶりに復活だね

とチャット内容

フレナさん

Flame・・・あれ？ 私一番ですか？

ヒウさん

sky..あら本当ね 珍しい Steelが早めに来てるもんだけど

Steel..や・・・あ・・・ちよつと・・・おく・・・れ

た・・・？

シャクさん

Esper..はあ・・・これからリーグか・・・

ラウさん

Ground..なんか 元気ないね？どうしたの？

ウミさん

Water..大丈夫よGround リーグ戦始まるから遊びに行  
けなくてがっかりしてるんだから

Esper..ぎくり

ザードさん

Snow..真面目にやれよー 今回はあゆむ君とさいが君が出場す  
るしな

Flame..サマンジャ洞窟ではお世話になったしね

sky..そうね ひいきはしないけれど応援はしないとね

ツリーさん

Ground..そういえばPlantとInsectは今日もこな

セクトさん

いのかなー？

ダンキさん

ミントさん

Grapple..Electricityもこないぞ 今あの4人

といるんだと

ストさん

Rock..がはは！リーグ戦楽しみだア

Snow..Rockさんのいうとうりだ 今回どうなるか楽しみだな

Water..目が離せない対決が・・・たぶん2つ！

Grapple..あゆむVSさいがとあゆむorさいがVSちひろか

Steel..た・・・の・・・し・・・み・・・

Esper..まっ チャンピオンに行く前にオレら四天王が倒すか

もしれないがな

Flame..それでも 予想はしちゃうね この戦いうー！うずう

ずしてきたあ！

く終了く

『無事にグラスバッチを手に入れた二人

次はいよいよ リーグ戦！

たくさんの強敵 実力をしらない四天王

そしてずっと一緒に旅をしてきたちひろとの最終バトル

一体どうなるのか？次回『リーグ戦？』お楽しみに！』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0770z/>

---

ポケットモンスター マリン

2011年12月3日17時45分発行